

Pixiv再録集 NO.2

果ての岬で 空に笑う

※本編程度の暴力表現はあります。

※性行為を匂わせる描写があります。

目次

B a s h a	3	
読むひと	33	
飛ぶ鳥を待つ	51	
Te necesito	69	
罪と罰と慈愛と、多分我儘	94	
Scent of rain	124	
スレイン・トロイヤードのことを教えてくださる	152	
PROMISED LAND	191	
IN THE BLUE	200	
PERFECT DAYS/ INSIDE OF YOU	206	
世界の果てで溢れるくらいのカスを	257	
Ta voix me manque	310	
		往復書簡（書き下ろし）
		323
		あとがき
		350

I love you.

訳「月が綺麗だね」

訳者 夏目漱石

Ваша.

訳「しんでもいいわ」

訳者 二葉亭四迷

(2016-08-22)

「界塚弟。ちょっといいか」

地球連合軍の会議室を出て、エレベータのボタンを押した伊奈帆は、自分呼び止める声に気が付き足を止めた。電子音を立てて開いたドアに入り、開のボタンを押す。

「界塚伊奈帆少尉です。鞠戸大尉」

鞠戸孝一郎大尉がエレベータに乗り込むのを待って、伊奈帆はエレベータの開ボタンから手を放した。エレベータの扉が、ゆっくりと閉まる。

「界塚少尉、お前の、極秘施設への面会申請についてだが」

伊奈帆は、いつか誰かが指摘するだろうと思っていた要件に、音を出さずに小さく舌を打った。

「はい」

抑揚のない伊奈帆の返答を聞いた鞠戸が、顔を顰めて言った。

「頻繁すぎる」

「はい。自覚しています」

エレベータのオレンジ色のランプが、数字の降順に切り替わる。早く目的の階に着けばいい

のに、と伊奈帆は思う。

「改めろ」

鞠戸は、はっきりとした声で言った。伊奈帆は、答えの分かりきった質問をする。

「それは、命令ですか」

「そうだ。お前は地球連合軍の軍人だ」

伊奈帆の脳裏に、蛍光灯の青白い光で照らされる青い服、白い顔、金の髪、光を反射するペ
ンダントの留め具が浮かぶ。そして真向かいの無関心で気だるげな表情を思い出す。あんな顔
が見たいわけじゃない。

「お前の立場は、ある程度理解しているつもりだ。しかし、あいつにもう関わるな。身を滅ば
すぞ」

そういつて鞠戸は、ゆっくり開いたエレベータの扉から出て、エントランスホールへ足早に
歩き出した。

伊奈帆は鞠戸が出て行ったあとのエレベータの扉が閉まるのを、ドアの内側から見ていた。

「界塚少尉」

いつもユキが運転するハンヴィーに乗り込もうとした伊奈帆に、鞆戸が声をかけた。

「はい」

車体の反対側から聞こえた声に、ドアの取っ手に伸ばした手を引っ込める。鞆戸がフロントを回って伊奈帆の前に立ち、親指で助手席のドアを示した。

「乗れ」

伊奈帆は、短く返事をして助手席に乗り込む。鞆戸が運転席に乗り込みエンジンをかけた。

「面会は、俺が同伴することになった」

シートベルトを掛けながら、鞆戸が言った。

「お前、あれから面会申請を出してないだろ」

「はい」

鞆戸が溜め息をついた。

「しかし、やはり極秘施設へ行っている。調べはついてる」

伊奈帆は、鞆戸の警告を受けてからも極秘施設に通っていた。申請をあえて出さなかったのは、鞆戸が叱責されることを懸念しての行動だった。命令違反をするのは、自分だけでいい。これは、自分の個人的な問題だからだ。

「俺がお前の行動を監視することになった。上からの命令だ。不審な行動をとるな」

鞆戸が苛立ちを表して言った。伊奈帆は、この上官が自分の身を案じてくれているのを改めて認め、申し訳ない気持ちになる。しかし、自分の行動を曲げるつもりはない。

安全運転で極秘施設に到着したハンヴィーから降りる。薄い水色の空には、小さく白い月が浮かんでいた。歩き出す伊奈帆の後ろに、鞆戸が大腿で続く。

「やあ、調子は」

面会室の扉の外で、界塚伊奈帆の声を鞆戸は聞く。壁にもたれ、腕を組みマジックミラー越しに目を凝らした。

椅子に座った囚人は、何も言わずに伊奈帆を見ている。

先の戦争の第一級戦犯であり、火星の総大将であったこの囚人は、鞠戸より二十歳近く年下だ。火星カタフラクトを巧みに操り、地球軍に大きな損害を与えた。界塚伊奈帆との戦いで地球へ降下し、その敵の手で命を救われた地球人。

様々な処置や手続き、交渉の後、処刑を伝えられ世界から抹殺された男は、密かにこの施設で生かされている。収容された当初は、今鞠戸がいる部屋は軍の関係者でゴッタ返していた。鞠戸も数回、任務で立ち会ったことがある。どの記憶を辿っても、年若い囚人は無反応に椅子に座っていた。

今では、ここを訪れる人間はほとんどいなくなった。世界は忙しい。いつまでも、過去のことを穿り返していることはできない。

そんな中、界塚伊奈帆は月に数度この極秘施設へ足を運んでいる。それは囚人が収監されてしばらくの一回を皮きりに、三か月間途絶えることはない。ここへ来る時は姉の界塚ユキが運転していたそうだが、おそらく一人で来ることもあるのだろう。調書の記録が合わないからだ。

「これ、差し入れ」

そう言って伊奈帆はテーブルの上に置いた包みを広げた。よく見えないが、食べ物のようなだ。

囚人は関心のない様子で、ぼうっとしている。伊奈帆はチェス盤を広げた。

「出汁巻き卵って、食べたことある？」

伊奈帆が、駒を掴んで話しかける。鞆戸からは、囚人がどこを見ているのかはつきりしない。

「僕には姉がいるんだけど、家事が苦手だね。いつも僕がご飯を作るんだ」

相手は全く反応を返さないが、伊奈帆は話し続ける。時々、視線を追って後頭部が揺れた。

「小さい頃、二人で遠足に行った。海を見に行ったんだ。ユキ姉は、固いおにぎりと、しょっぱい卵焼きを作ってくれた」

鞆戸は眉を上げる。伊奈帆の声は静かだった。

「飲み込むのに苦労したけど、それでも、世界で一番美味しかった」

伊奈帆は、一人で駒を動かす。黒のナイトを、白のビショップが取った。

「また来るよ」

そう言って伊奈帆は立ち上がった。弁当箱の包みとチェス盤を持った伊奈帆の後ろ姿を、四人は一度も見なかった。

「先生、どう思う」

バーのカウンターで、鞆戸は隣に座る耶賀頼蒼真に尋ねた。

「そうですね」

耶賀頼はナッツを口に入れた。アーモンドの香ばしい香りが弾ける。

「一応、あれから俺を通して面会申請を出してる。かなりの回数立ち会ったが、俺にはどうすればいいのか分からん」

「どう、とは？」

鞆戸はロックのウイスキーをちらりと舐める。でこぼこした氷を眺めて言った。

「あの頑固者に面会をやめさせるのは無理だ。しかしあまりにも回数が多すぎる。その申請理由も理解しがたい。今は俺が立ち合い内容を報告しているが、こんなことが続くと上が黙って

ないだろう」

耶賀頼は、鞆戸の前に肴の乗った皿を押し出し、言った。

「面会での伊奈帆くんは？」

「一人で話してる。天気の話や、星の話、家族の話、チェスの話と……まあとにかく、雑談だ」
しかし、何度会いに行っても相手はうんともすんとも言わない。それを聞いて、耶賀頼は含み笑いをした。

「伊奈帆くんから、何か聞いたりは？」

鞆戸は、腕を組んで天井を見上げる。

「これは知ってる？とかそんなことをよく聞くな。ええと、今日は『どうして海は青いか知ってる？』って聞いてたな。俺は、光の反射と波長について詳しくなったぞ」

鞆戸は溜め息をついて、テーブルに突っ伏した。

「あいつが、何がしたいのか分からん」

カウンターに伏せた鞆戸の耳に、耶賀頼の明るい声が飛び込んできた。

「伊奈帆くんは、まだ十七歳ですよ。鞆戸大尉」

「はあ？」

耶賀頼が、眼鏡を外して光に翳しながら言った。

「話を聞く限りでは、その彼と仲良くしたいんじゃないですか。普通の高校生みたいに」

その言葉に、鞠戸は目を丸くする。

「……しかし、相手が相手だ。敵同士で、殺しあって、左目を奪ったやつと友だちに？」

まあ、だからじゃないですかね、と言った耶賀頼は、眼鏡を置き、ジンジャーエールをぐくりと飲んだ。

——互いに殺しあった相手。その強烈な意思がそんな穏やかなものに変わることもあるのだろうか。

今日もマジックミラー越しに面会に立ち会う鞠戸は、界塚伊奈帆の茶色い後頭部を見つめた。近くで書記官の動かす鉛筆の音が、硬質な音を立てる。

「なあ、何で界塚は、ここに來るんだと思う？」

自分と同年代くらいの書記官は鉛筆を動かしながら、驚いた顔で鞆戸を見た。職務規定違反だが、どうせさっきからずっとあいっらは喋っていない。少しくらい無駄話してもいいだろう。あんた、どう思う、と再度鞆戸が聞くと、書記官は鉛筆を額に当て、しばらく考えた後言った。

「はあ、何ででしょう」

「あんた、いつも記録してるんだろ。あいっら見てて、どう思う？」

明るい茶髪の書記官は、鞆戸を見た。目が灰色だった。ロシア系だろうか。

「そうですね。嬉しそうです」

「は？」

書記官が、マジックミラーの向こう側に視線を送る。

「彼、いつもは下を向いてじっとしてるんですが。面会の際は少し顔が上がるし、いろいろ見てるように思います。少尉が来たときは、食事も残す量が違いますね」

彼、というのが囚人のことを示すのを、鞆戸は不思議な気分で見聞いていた。世間では第一級戦犯で、大犯罪者で、狡猾な裏切り者。諸悪の根源とされる囚人に対して、書記官をはじめと

する施設の職員は親しげだ。事務官など、伊奈帆と囚人の情報交換をする際に「あの子」呼ばわりしていた。

「入れ込みすぎでしょうか。我々は」

考え込む鞆戸の顔を見て、書記官が困ったように笑った。そして、同じ年頃の息子がいるんです。もう死んでしまいましたが、と続けた。

面会室を出た伊奈帆は、いつも事務室へ立ち寄る。人が良さそうな事務官に差し入れを手渡し、いくつか質問をする。

「首に、蚯蚓腫れのような跡がありました」

事務官は、差し入れを受け取り、悲しそうな顔をした。

「監視官から、昨日深夜…三時頃、うなされて掻き筆ったと報告がありました」

鞆戸は、事務室で交わされる会話を初めて聞いた時、少なからず驚いた。目の横が青い、肘を擦りむいている、足をかばっているようだ、と伊奈帆は囚人の様子で気になったことを事細かに聞く。そんなところまでよく見ているな、と感心した。

「起きている間は？」

「おとなしいですし、理性的です。自傷行為はありません。食事は、今日は少ないですね。でも、毎食口にしています」

事務官が、デスクから取り出したファイルを捲りながら応える。

「ありがとうございます」

それでは、と右手を額に掲げる伊奈帆に、こちらこそ。あの子にも食べてもらえといいですね、と事務官はにこにここと敬礼した。鞆戸は、事務室のドアの外で、その様子を腕組みして見ていた。

「申し訳ありません、少尉。本日は、面会できません」

鞆戸が面会に付き添うようになって三か月ほど。極秘施設を訪れると、応接室に通された。すぐに管理官が現れ、足早に伊奈帆に駆け寄る。

「何か、ありましたか」

伊奈帆が気色ばんで立ち上がる。その様子に、鞆戸はぐっと息を呑む。

「囚人が目覚めるなり頭を壁に打ち付けて……すぐに監視官が止めたのですが、錯乱して暴れるので鎮静剤を投与しました。今は意識を失って、眠っています」

それを聞いた伊奈帆は固く目を瞑り、唇を噛みしめた。握り込んだ手がぶるぶると震えている。

「……それで、彼は今どこに？」

感情を抑制した声で伊奈帆は尋ねた。管理官は背筋を正した。

「独房です」

「様子を見ることはできますか」

管理官は、鞆戸を見た。

「大尉、よろしいですか」

伊奈帆が鞆戸を振り返る。その顔を見て、鞆戸は小さく息を吐いて言った。

「許可します」

独房は静かだった。

白い壁は、所々凹んで染みができていたが、手入れされて清潔だった。小さく簡素なベッドに、囚人が横たわっている。

「入っても、いいですか」

伊奈帆の言葉に、管理官と鞆戸は目を見合わせ、鞆戸が頷く。管理官がほっとしたように息を吐き、鍵を開けた。

ベッドの前で、伊奈帆が見下ろす。鞆戸は伊奈帆の肩越しに、その囚人を見た。

囚人の体は、ベッドにベルトで固定されている。頭に、真新しい白い包帯が巻かれていた。こんなに近くで、この人物を見るのは初めてだった。面会室で亡霊のように佇む囚人の寝顔は、驚くほどあどけない。鞆戸は、この青年が界塚伊奈帆と年代の若者だったことを思い出す。

伊奈帆が、拘束された手首に触れる。取り押さえられたときについたのだろう、赤い痕が痛々しく残っていた。

「調子は」

一週間後の面会室で伊奈帆が聞いた。いつものお決まりの枕詞だが、前回の事もあってその声は少し緊張を伴い鞆戸に聞こえた。

囚人は俯いたままだ。しかし、今日は表情がある。マジックミラーを通して分かるほど、唇を噛みしめ膝の上で手を握り込む。それは、先週見た伊奈帆の顔によく似ていた。

「前より、いいみたいだ」

伊奈帆が、チェス盤の市松模様を指でなぞり言う。今日は、なかなか駒を並べない。

「…ごめん、なさい」

伊奈帆の言葉からずいぶん長い沈黙があり、その後、絞り出すように囚人が呟いた。蒼白な顔は寝れていて、目の下には濃い隈があった。

「いいんだ」

優しい声だった。伊奈帆のこんな声を、鞆戸は初めて聞いた。その声は、彼の姉が弟を心配するときの声によく似ていた。

「でも、心配していた。今日は君に会えて良かった」

そう言った伊奈帆は、笑ったのかもしれない。茶色い髪が首の動きに合わせて揺れる様を見て、鞆戸は思った。

「界塚、ちょっといいか」

鞆戸の言葉に、長い髪を揺らして界塚ユキは振り返った。

「はい。何ですか」

「弟の事だ」

ユキは、複雑な表情を浮かべた。浮かない顔、怒った顔、悲しい顔を想定していた鞆戸は、そこにポジティブな感情を見出し、意外に思いながら多目的ホールのソファへ移動し聞いた。

「弟の例の面会、俺が立ち会っている」

ユキは、ソファに座って髪を整える。

「知っています。私が外されて、鞆戸大尉が代わりを」

ありがとうございます、とユキは頭を下げた。

鞠戸は身を乗り出し、声を落として言う。

「お前、どう思ってるんだ。弟の行動を」

ユキは、これ以上ないほど姿勢を正して、言った。

「私は、弟の味方です」

ユキの目が、真摯に鞠戸の目を見つめる。覚悟を決めた目だった。

「俺は、敵じゃない」

その榛色の瞳をじっと見る。一滴の汗が、頬を伝う。ユキはしばらくして、そっと話し出した。

「…前になお君に聞いたんです。どう考えても危険だし。どうしてあいつに構うのって。お姫様のお願いだから？って」

アセイラム女王が、スレイン・トロイヤードの命を助けるようにお君に頼んだって聞いたから、とユキは続ける。

「かなり問い詰めました。最後には、なお君は、言いにくそうに私が知らなかったことを話し

てくれました」

ユキが一度目を閉じて、もう一度開いた。

「なお君は彼とカタクラフトで地球に落ちて、海岸で銃口を向けたそうです。その時、スレイン・トロイヤードは笑って、自分のこめかみを指で叩いたって……なお君はその時、彼はずっと死にたかったのだと思った、って言った」

鞆戸は囚人の、面会室で見る青白い顔、そして、独房で眠るあどけない顔を思い出す。

「その後軍用ヘリが来て、スレイン・トロイヤードは収容されました。どうして撃たない、殺せ、と暴れたそうです」

冬の光が、ホールに場違いなほど明るく差し込む。鞆戸は、ユキの長い睫毛が落とす影を見た。

「ヘリの中で、麻酔を投与され、彼は意識を失いました。負傷していたので、移送中、治療を開始することになりました」

なお君は、その様子をずっと見ていたって。ユキの肩が強張り口がぎゅっと引き結ばれる。

鞆戸はその口が開くのをじっと待つ。ぶうん、と窓の外で軍用機のエンジンの音がした。

「なお君は、服を脱いだ彼の体中にひどい傷跡があったと言っていました。古い一生傷から、ついて間もない青や赤、黄色の痕まで。アセイラム女王はきっとそのことを知らなかったと、なお君は私に話しました」

ユキが組んだ両手をぐっと握る。そして、鞆戸を見てから窓の外に目をやった。乾いた空は青く、雲が風でゆっくりと流れていく様子を、ユキは痛々しい表情で眺めた。

「私、それを聞いてどうしていいのか分からなくなっちゃって。なお君に聞いたんです」
なお君はスレイン・トロイヤードをどうしたいの、って。

「そうしたら、大事にしたい、って言ったんです」

ユキは、目を閉じて微笑んだ。黒い睫毛が水分を含み、束を作った。

「私は、それを聞いて、反対するのをやめました」

ユキは立ち上がり、半身を向けて鞆戸を見下ろした。

「男の子って、知らないうちに大人になるんですね」

界塚ユキは少し寂しそうに笑った。

「今日は来る途中、紫陽花が咲いていた。水色の」

もう何回目になるだろうか。鞆戸は、面会に立ち会っている。今日は来る途中、小雨に降られた。少し濡れた自分の肩を、意味もなく撫でる。

「知ってる？紫陽花には色素が一つしかないんだ」

「知ってる。アントシアニンだ」

囚人が返答したことに少し驚く。鞆戸は、囚人の肉声を初めて聞いた。伊奈帆の頭が少し持ち上がる。

「詳しいね。どうして、色素が一つしかないのにいろんな色味が存在するか知ってる？」

付き合いの長い人間でもそうわからない程度、ほんの微かに声を弾ませて、伊奈帆が言った。

「知ってる」

囚人の掠れた声が聞こえた。

「そう」

そこで会話が途切れた。その後の一時間、面会室からは伊奈帆が動かす駒の音だけが聞こえた。時間が来ると、伊奈帆は開けたままの姿を保つ差し入れの包みとチェス盤を持って、面会室の扉を開けた。「また来るよ」と言われた囚人は、ドアが閉まると目を伏せた。心なしか嬉しそうな伊奈帆を見て、鞠戸は書記官と顔を見合わせた。書記官は片眉を上げて、笑窪を作った。

「昨日の夜は、満月だったよ」

鞠戸は、伊奈帆の後頭部を見る。次に、その向こうの囚人を。伊奈帆はいつも彼の変化を注意深く見つめ、その変化を探している。

返答はない。伊奈帆はチェスの駒を動かす。

いつになれば、囚人は駒に手を伸ばすのだろうか、と鞠戸は思う。

「月が割れる前には、満月っていうのは丸かったんだって」

その言葉に、鞠戸は目を瞠る。そうか。丸い月を知らないのだ。彼らが、ほんの子どもと言

っていい年齢だったことを、ここにいと度々思い出す。

「丸い形は見たことないけど。昨日の月は、綺麗な色だった」

伊奈帆の指先が黒のポーンに触れ、しかし動かすことを躊躇い、手を戻した。

「月の話は、嫌い？」

囚人に別段変わった様子があるようには見えないが、伊奈帆はチェス盤を片付け始めた。

「また、来るよ」

面会室を出た伊奈帆は、叱られた子どものように肩を落としていた。

「弟。帰り、ちょっと付き合え」

運転席に乗った鞆戸が、キーを回してそう言った。伊奈帆は、返事をして頷いた。

鞆戸が向かった先は、海だった。車を停め、堤防に腰かける。伊奈帆は隣に座った。ごつごつとしたコンクリートの上で、鞆戸はコンビニで購入したカップ酒の栓を開ける。

「こういうのを、月見酒っていう。月が割れる前には、よくこうやって酒を飲んだ」

鞆戸は、青いラベルの張ってあるガラスのカップを伊奈帆に差し出した。

「飲め」

「未成年ですよ」

伊奈帆は受け取って、おいを嗅いで顔を顰めた。

「固いこと言うな。もうすぐ誕生日じゃないか？」

似合わないウインクをする鞠戸に少し笑って、誕生日が来ても未成年ですよ、と言った。鞠戸が持ち上げたカップに、右手のカップを小さく当てる。

「割れた月で月見酒も、いいもんだ」

一気に半分くらいを飲んだ鞠戸が、月を見上げて言った。伊奈帆は一口飲んで、口をへの字に曲げる。消毒液のような香りと、喉が焼けるような熱さを我慢しながら、喉の奥に流し込む。

「僕が生まれた年に割れましたから。今の月しか知りません」

月は、丸くない。あのギザギザした、クッキーを不器用に割ったような月が、伊奈帆の知っている月の形だった。

「そうか」

鞠戸が、もう一度カップを煽る。もう、ほとんど空になっていた。伊奈帆は、なみなみと残った酒のカップを両手で包み、月を見上げた。

「それでも、あの色を綺麗だと思います」

そういつて、ぐびりと酒を流し込む。顔が熱い。焦点が定まらない。月を見た。アナリティカルエンジンを外した伊奈帆の目には、輪郭の定まらない月がぼんやり映る。暗い夜空に浮かぶ儚い色彩は、あの人の髪の色によく似ている。

「お前、あいつが好きなんだな」

鞠戸が言った。伊奈帆は、ぐらぐらと視界が揺れた気がした。きっと、顔が熱いのも、動悸が速いのも、アルコールのせいだ。

「そうなのかな」

ぼつりと言った伊奈帆の顔は赤い。鞠戸はにやりと笑った。

「そう見える」

伊奈帆は酩酊し始めた意識の中、スレインの記憶を辿る。

種子島。

サテライトベルト。

月面基地。

海。

面会室。

青い軍服。

灰色の騎士服。

臘脂の伯爵服。

浅葱色の囚人服。

その瞳に浮かぶ涙。

怒り、憤り、憎しみ、悲しみ、諦め、そして真摯な愛を形取る透き通った碧。

その一つ一つが瞼の裏でポラロイドカメラのように鮮明に焼き付き、奔り、どくどくと心臓が高鳴る。焦燥を感じる願いを自覚した。

「僕は、あの人に笑ってほしいんです。泣いた顔や、怒った顔は見たことがある。皮肉気な笑いか。でも一度も、幸せそうに笑った顔は見ていない。そのために、僕は何回でもあの人に会

いに行く」

波の音が声を浚う。鞠戸は真剣な表情で伊奈帆の言葉を聞いていた。

「お姫様のお願いだから、じゃなかったか。弟、お前には覚悟があるのか」

伊奈帆は、力強く頷いた。

「はい」

「何の覚悟だ」

鞠戸が、目に深い色を宿して、静かに聞いた。伊奈帆は、その温かい色の瞳を見つめて、命を懸けて言った。

「あの人と地獄の底まで落ちても、必ず幸せになる覚悟です」

そうか、と鞠戸は言って、僅かに残った瓶の中身を飲み干した。

「俺は軍人だ。お前もな。命令に背くな」

しかし、と鞠戸は続けた。

「プライベートに口出しするのは主義じゃない。デートは、ばれないように上手くやれ」

受付の立会人欄に俺の名前を書いて申請しろ、たまには出すのを忘れたっていい、と鞠戸は

笑い、肩を竦めた。

「…ありがとうございます」

伊奈帆は、カップの中の月を見た。水面に映る月の色が、揺らしたびゆるやかに広がる。

「ああ、それと」

鞠戸が、顎を上げて月を見た。

「今日の面会室での台詞、いつかもう一度言ってやれ」

「どれのことですか」

もう耳まで真っ赤になった伊奈帆に、鞠戸は頭の後ろを搔いて笑った。耶賀頼の受け売りの知識だが、このくらいは恰好をつけてもいいだろう。

「月が綺麗だ、って話だ」

「月が綺麗だね」

砂浜を歩きながら、天を指して伊奈帆は言った。スレインも夜空を見上げた。

「そう、なのかな」

伊奈帆は横目でスレインの瞳に映る月を見た。探し物を忘れてしまったような顔で、スレインが口を開いた。

「前に、その話をしてくれた時……」

二人の後ろに残った足跡が、寄せて返す波に消えていく。裸足の足に、ひやりとした砂が沈むのを感じた。足首に波が遊ぶ。

「よく……分からなかったんだ。僕には、月の色は宇宙空間から見えた岩肌だったから」

それは墓場のような色だった、とスレインが言って、伊奈帆は月面基地に潜入した時のことを思い出した。スレインは、地球も、と波に濡れる足を見て呟く。

「宇宙から地球を見た。とても綺麗だったけれど、そこに僕の居場所はなかった」

だから、地球を見るのは嫌いだった。

「でも、そうですね」

スレインが、もう一度月を見る。伊奈帆は、その白い横顔を見る。

「伊奈帆と見る月は、綺麗に見える気がします。きっと伊奈帆が、綺麗だと言ってくれたからです」

スレインが伊奈帆を見た。視線が交錯し、その温度が冷たくはないことに気付く。目が三日月のように細くなり、唇が弓なりに形作られた。ずっと見たかった笑顔に、伊奈帆の胸が大きく高鳴る。伊奈帆は、そっとスレインの手のひらに手を伸ばした。

読むひと

『私にはあなたがある　あなたがある　あなたがある』
(人類の泉より)

高村幸太郎 著
「智恵子抄」

(2016-08-20)

初めてスレインに面会して、ひと月が経ったある日。伊奈帆は、極秘施設の事務室で聞いた。

「差し入れをしたいのですが、許可は下りますか」

伊奈帆よりずっと年上の穏やかそうな事務官は、座ったまま姿勢を正した。

「界塚少尉。ええと、どのようなものを？」

「食べ物とか」

事務官は、デスクから真新しい一つの冊子を取り出し、目次を開いた。指でページを確認して、パラパラと捲る。眼鏡を親指と人指し指で額の上に持ち上げて、目を細める。

「食品の持ち込みについては、面会室なら可能です。独房へは、持ち込みはできません」
「ありがとう」

それから伊奈帆は、火の通った食品を作って持っていくことにした。おにぎりや出汁巻き

卵、お菓子など。面会室のテーブルに置くと、スレインは一瞥し目を逸らす。彼は一度も手をつけなかったが、伊奈帆は差し入れを欠かすことはなかった。

それらの軽食は、面会を終えた伊奈帆によって事務室に届けられ、事務官と運のいい職員の胃袋に収まった。

それからさらに三か月ほどが経った。伊奈帆は再び極秘施設の事務室で聞いた。笑顔で歩み寄る事務官に、今日も手の付けられていないアップルパイを手渡す。

「食品以外の差し入れをしたいのですが、許可はありますか。」

「いつもごちそうさまです。界塚少尉。ええと、今度は、どういったものを？」

「本です」

事務官が、デスクからよれよれになった冊子を取り出し、さっと開いた。マーカーの蛍光イエローが目に残った。

「電子書籍は禁止されています。紙媒体は、雑誌、新聞、写真集などはOKです。他にも色々

制限があつて、持ち込めるのは全年齢向けの小説くらいですね。面会室なら、何冊でも。ただし、ハードカバーは禁止です。独房へは、五冊までです」

事務官はもう一度文章に目を走らせ規則を確認し、伊奈帆に向かって頷いた。

「わかりました」

伊奈帆は本を探したが、物心ついた時から書籍は電子媒体で購入するのが一般的で、紙媒体の書籍は見つけるのに苦労した。

結局、もう二度と辿りつけないような場所にある古本屋の、十冊一絡げ千円の叩き売りを数束購入し、伊奈帆は極秘施設の面会室へ向かった。

「やあ、調子は」

涼しい顔だが汗を流して、ふうと息を吐いた伊奈帆の声に、スレインはぼんやりテーブルの上を見た。

「これ、良かったら、暇つぶしに使って。あと、シュークリーム」

菓子の包みを解く。彼の口に入ることはないかもしれないが、目には入るだろう。

「独房へ持ち込めるのは五冊まで。たくさん持ってきたから、持ち込めない分は一度持って帰る。選んで」

一つ一つ取り出し、机に並べる。古い本の匂いが強く香った。テーブルがいっぱいになったところで伊奈帆はスレインに顔を向けたが、彼は素っ気なく視線を外した。予想された反応だったので、特に落胆せず伊奈帆は本を物色する。ノーカバーの本が多かったが、カバーの無事な一冊の本が目についた。タイトルを二度読む。伊奈帆は、それをスレインの前に差し出した。

「それじゃあ、これはどう。今日は一冊だけ置いていくよ」

スレインの目の前にずい、と置いて、伊奈帆はもう一度並べた本を箱に仕舞う。収まりよく詰め込んでも蓋が閉まらない箱を持ち上げて、足で扉をノックする。書記官にドアノブを押してもらって、面会室を後にした。

「やあ、調子は？」

数日後、再び両手いっぱいの本と手作りクッキーを持って面会室に訪れた伊奈帆に、スレインはちらりと視線を寄越した。そして、先日の本を丁寧な手つきでテーブルに置く。

読んだのか。

「どうだった」

「かもめ、というのは seagull のハナニ。」

返事が返ってきたことに内心驚きつつ、伊奈帆は頷く。同時に、想像が足りなかったと申し訳ない気持ちになった。

「ごめん、日本語が読めなかった？」

「写真があったから、それを見てた。分かる言葉もあったけど、読み書きはそんなにできない」

スレインは色あせた表紙をじっと見て言った。

「思い至らなかった。敬語まで話せるから、てっきり読めると思ってた」

「文字が解読できないだけ。声に出したら、分かると思う」

少し考える。あ、と声が出た。

「僕が、読んであげようか」

そう言っただけで伊奈帆は、自分の提案を自分でも意外に思い、僅かに目を瞠った。

「え？」

「面会の間だけだけど」

伊奈帆は、口をあけたままのスレインの隣に椅子を移動させた。居心地悪そうに身じろぐスレインを横目に、椅子に腰を下ろし表紙を開く。

「えっと…」

『朝だ。しずかな海に、みずみずしい太陽の光が金色にきらめきわたった。』

スレインが何か言う前に、伊奈帆は読み始めた。一頁目が終わる頃、スレインは次第に伊奈帆へ身を寄せて、注意深く文字を追いだした。

その日伊奈帆は、三時間朗読して本を置いて帰った。全部は読めなかったが、彼は今日の朗読である本のおおよその語彙を把握しただろう。次に来るときは、辞書を持ってこよう、と伊奈帆は帰路に着いた。

その次の面会には、レモンケーキと、本を読むための和英辞典、国語辞典、漢和辞典、本がみっちり詰まった段ボール箱を持っていた。

「やあ、調子は？」

両手が塞がった伊奈帆が、刑務官に開けてもらったドアの隙間から言った。スレインは椅子に座ったまま伊奈帆を見て、そっと目を伏せた。

ぎい、と机が軋んだ。伊奈帆の額には、玉の汗が浮いている。

「これ、辞書。独房へ持ち込んでいいって。これで三冊分だから、あと二冊選んで」

スレインの目の前に、三冊の分厚い本を積み上げる。鼻の先まで隠れて、ちょっと可笑しい。

「あと、差し入れ」

包みを広げ、伊奈帆は椅子をスレインの横に移動させた。特に反応はない。この間は、挙動不審だったけれど。

「この間の続きを読もうか。持ってきた？」

スレインは少し目を泳がせて、膝の上に持っていた文庫本をテーブルに置いた。

「読んでいる途中でも、それ、食べてね」

伊奈帆は、ドッグイヤーのページに指をかけ、文字に目を走らせた。

『彼の右の翼から二センチほどのところを、世界中のどのカモメよりも白く輝くカモメが飛んでいた。』

美しい話だ。読んでいる間、スレインは伊奈帆の声に耳を傾け、食い入るように一文字一文字を目で追っていた。

「調子は？」

扉を開けて伊奈帆が聞くと、スレインは文庫本を読んでいた。彼の近くに、国語辞典が置かれている。ページが撓んで、かなり使い込んだ様子だった。

伊奈帆が朗読した本が終わりを迎えてから、スレインは自分で本を選び、読んでいる。刑務官の話だと、前回の面会から五冊目になるらしい。言語習得能力が高いな、と感心する。向かいに腰を下ろす伊奈帆の姿を認めて、スレインは顔を上げて本を閉じた。

「続けて。読んでいていいよ」

伊奈帆は差し入れの包みを開き、テーブルに置いた。スレインはタッパーを一度だけ見て、もう一度ページを開いた。碧の瞳が、文字を追って縦に動く。

伊奈帆も、面会室の床に置いてある箱から一冊の文庫本を取り出した。あの凄まじい重量の箱は、職員の厚意で面会室に置かせてもらえることになった。スレインが読み終わると、監視官が交換していると事務官から聞いた。

伊奈帆が手に取ったのは、日本では有名な近現代文学だった。授業で説明を受けた覚えはあ

るが、まともに読んだことはなかった。

「界塚少尉」

一頁を読み終えたところで、刑務官が呼んだ。伊奈帆は本を開いたままテーブルに伏せ、扉の外へ出た。急務で戻るよう、連絡があったとのことだった。

「また来るよ」

そう言って伊奈帆は、弁当箱を片手に面会室を出る。その後、五度目のチャレンジだった出汁巻き卵を事務官に手渡し、一息をついて極秘施設を後にした。

「やあ、調子は？」

面会室の扉を開けた伊奈帆は、少し眉を上げた。

「ああ、それ、この間置きっぱなしにしたね。読んだの？」

スレインが、薄い文庫をパラパラとめくっていた。自分が置いていった時にはなかった折り目が沢山ついている。差し入れを邪魔にならないように脇へ置いた。

「これは魚？」

スレインが表紙のタイトルを指で示し、聞いた。伊奈帆は手を伸ばす。スレインは文庫本の裾を伊奈帆に向けて手渡した。

「どれ…ああ、違う。これは両生類だ。Salamanderだよ」

見ると、かなり古い本らしく旧仮名遣いがいくつかあった。辞書にもないので、読みにくいのも無理はない。

「読んであげようか」

返事を聞かずに伊奈帆は椅子を移動させスレインの隣に座る。三角定規のようなフルーツサンドを指して、「良かったら食べて」と言っ表紙を開き、ページに指を滑らせた。伊奈帆が読み始めると、スレインは素直に身を寄せて、じっと文字を追った。

『牢獄の見張り番といえども』

そこまで読んで、伊奈帆は少し間を置いた。彼に読んで聞かせて気分のいい内容ではない

と、読み始めてすぐ後悔した。ここに至るまでも何度か、これは、と読むのを躊躇った。そのたびスレインが掠れた声で「続けて」と言った。

スレインが文字から伊奈帆へ視線を移動させた。伊奈帆が顔を向けると、碧の瞳とかち合った。彼の青ざめた唇が、そっと開かれる。

「最後まで、読んでくれますか。この生き物が、どうなるのか知りたい」

伊奈帆は少し息を吸って、静かに読み進めた。

『ああ寒いほど独りぼっちだ』

最後の行を読み終えた時、スレインは小さな声で礼を言った。

それから、伊奈帆は何度も面会室を訪れた。伊奈帆が朗読することもあったし、二人で一言も喋らず本を読むこともあった。初めて並んで本を読んだ日から半年以上が経ち、大量の文

庫を読み切る頃。スレインは伊奈帆が話しかけると返事をするようになったし、差し入れも少しだけ口にするようにあった。また、刑務官や監視官が、挨拶したら返事が返ってきた、食事を摂る量が増えてきた、と彼の様子を伊奈帆に親身に報告してくれるようになった。彼らの嬉しそうな顔を見て、伊奈帆はほっとする。

スレインが反応を示すようになると、伊奈帆は面会室でいろいろなことを話し出した。チェスを挟んで話すこともあったし、本を読みながら話すこともあった。スレインは返事をしない時もあったが、その視線や表情から、聞いていることは分かった。

そんな関係が続いたある日、差し入れにサンドイッチを持って行った。それまで、雀の涙ほどしか食べるのがなかったスレインが、この時は長い時間をかけて一生懸命食べてくれたことを思い出す。それまでもフルーツサンドやハムサンド、ホットドックなどを作っていたことがあったが、パンを食べてくれたのはそれが初めてだった。バケットを厚めに切っているような具を挟んだサンドイッチの、イチゴジャムを挟んだものを彼は手に取った。伊奈帆は、スレインが食べる間、残りのサンドイッチに手を伸ばし、できるだけゆっくりと、スレインの食べる速さに合わせて一口一口食べた。

歸りに事務室に寄ると、事務官が「少尉、嬉しそうですね」と、受け取ったランチボックスを開けて目を丸くした。「おお！今日はたくさん食べましたね。少尉、良かったですね」と嬉しそうに伊奈帆の肩を叩く事務官に、伊奈帆は頬を掻いて礼を言った。今度から差し入れを二つに分けて持つてこよう、と思いながら、伊奈帆は軽い足取りで極秘施設を出た。

月日が経ち、もうすぐスレインが収監されて二度目の冬が来る。伊奈帆がこの面会室へ訪れた回数は、差し入れのレパートリーが八週目を迎えるほどになった。出汁巻き卵に至っては、持参した回数は二十を軽く越した。六回目から食べてくれるようになった。伊奈帆にとって、思い入れがある料理だ。サンドイッチもよく作る。具はいろいろだが、ジャムやフルーツをよく食べる。

「これは、不思議な文章ですね。このまま読むのですか」

面会室で差し入れの包みを開いていると、スレインが言った。かなりの読書量で、語彙も豊富になった彼が質問するのは久しぶりだ。伊奈帆は屈んで、スレインの手の中の文字に目を落とす。

「どれ？…旧仮名遣いだね。この『ふ』は『う』と発音するんだ。他にもいろいろと決まりがある」

真剣な顔で聞くスレインを見て、伊奈帆は嬉しくなった。

「読んであげようか」

伊奈帆が言うと、スレインは素直に伊奈帆に手渡した。椅子を並べて座り、表紙を撫でる。そう言えばこれは愛の詩集だったな、まあいいか、と僅かに緊張を伴いながら、伊奈帆は口を開いた。

『世界がわかかわかしい緑になって、青い雨がまた降ってきます。』

面会室に伊奈帆の抑揚の少ない声と、時々本をめくる紙の音が反響する。スレインは肘をつ

いて、身を乗り出しページに顔を近づけていた。薄い肩が伊奈帆の腕に当たる。初めて並んで本を読んだ日のことを思い出す。その時より、体も、心も、ずっと近くなったと思う。伊奈帆は、ページを進める合間に横目でそっとスレインを見る。その碧の目は文字を追いかけて、言葉を反芻し、思考し、美しく澄んでいた。

愛の言葉は照れくさいが、美しい。彼に、美しい言葉が届けばいいと思う。まだ愛とは言えない自分の気持ちをそっと織り交ぜ、伊奈帆は唇に音を乗せる。

「ねえ、これ読んで」

風呂上がりに寝室へやってきたスレインに、伊奈帆はベッドに寝転んだまま手を伸ばす。差し出された重量感のある本と伊奈帆の顔を交互に見て、スレインは首にかけたタオルをサイドテーブルに置いて伊奈帆に近づいた。

本を受け取ったスレインは、焦げ茶の表紙と裏表紙を指で撫で、背表紙の小さなタイトルを

読み上げた。

『『El amor en los tiempos del cólera』分厚いですね』

「そう。貰ったんだけど、僕は読めないし」

スレインがベッドに腰かける。両手の中の本に向けて、伊奈帆の首が伸びてきた。

「いいですけど、下手ですよ」

「いいんだ」

伊奈帆がベッドの奥に詰めたので、スレインは隣に寝転んだ。肘をつくと、伊奈帆が肩を寄せた。うつ伏せで、天井に向けた足をぶらぶらさせている。くすりと笑って、スレインは硬い表紙を開いた。端が少し黄色い。息を吸いこむと、古い本の香りがした。

飛ぶ鳥を待つ

(2016-10-09)

「久しぶりですね。界塚少尉」

「ご無沙汰しています」

新芦原市。かつての防衛軍基地の会議室で、界塚伊奈帆は自分呼び出した上官に敬礼した。テーブルを挟んで立つダルザナ・マグバレッジ大佐は、伊奈帆に軽く頷き微笑んだ。

「早速ですが、本題に入りましょう。貴方に、会いたいという人物がいます」

「僕に？」

伊奈帆は意外さを声音に含んで返答した。終戦から一年以上が過ぎた。ダルザナの口振りからは軍関係者ではなさそうだし、どういう経緯だろうかと思像する。

「耶賀頼少尉からの申し出です。彼の患者の一人が、界塚伊奈帆に会って、話がしたいと」
ダルザナが簡潔に説明を始める。耶賀頼は、軍医の肩書を持ちながら、新芦原市にある病院に勤務している。耶賀頼の名を聞いて、伊奈帆は大体の状況を察した。

「それは、あの月面基地から離脱し、デューカリオンに保護されたシャトルの一員ですか」
「そうです」

第二次惑星間戦争で月面基地が自爆する直前、基地にいた軍人の多くが離脱した。その中の

多くは、サテライトベルト周辺の地球軍カタフラクトによって捕縛、あるいは保護された。終戦を経て、多くの火星兵は故郷へ帰りついたはずだった。そうでないということは、治療の状況が思わしくないか、あるいは。

「上層部の目的は尋問ですか」

「あるいは、そうです」

伊奈帆の質問に、奥歯にものの挟まったような言い方でダルザナは答えた。決断力の塊のような上官らしくない様子に、伊奈帆は問う。

「あるいは？火星兵ではないのですか」

上官は困ったような表情で髪をかき上げた。伊奈帆にどのように話せばよいか、考えているようだ。

「少女です」

「少女？」

伊奈帆の頭には、一瞬火星の女王が浮かんだ。

「彼女について、ファーストネーム以外は何もわかりません。惑星間条約により、種々の条件

から強制的な尋問もできません」

ということは、民間人だと想定されているのだろう。

「今後の処遇について、決めかねています。彼女が火星人であっても、地球人であっても、救助した船の責任者ですから、最後まで責任があります」

「わかりました」

おそらく、面倒事を片付けたい上層部の面々から、この上官は少女を守り通しているのだろう。そういう人だから、共に戦うことができた。彼女が同志でよかった、と思う。ダルザナはタブレットを操作し、会議室のテーブルに置いた。画面には、桜色の髪をした少女が映し出された。確かに、可憐な容姿からは軍関係者だとは想定しづらい。続いて、病院までの地図とアクセスが表示される。住所と電話番号を頭の中にメモする。

「耶賀頼少尉の患者です。ここへ赴き、可能であれば彼女について何か掴んでください」
無理は言いません。そう言って、ダルザナは会議室の扉を開ける。伊奈帆は扉を出る前に尋ねた。

「その人は、どこか悪いのですか」

「治療中と聞いています」

会議室のドアの外に、窓から光が差し込んだ。眩しくて目を細める伊奈帆は、額に手をかざし真っ青な空に浮かぶ白い雲を眺めた。

「やあ、伊奈帆くん。調子はどう？」

久しぶりに会う耶賀頼は、穏やかな声で明るく伊奈帆に聞いた。

「ご無沙汰しています。耶賀頼先生」

「アナリティカルエンジンとは外したと聞いたよ。それがいいと、僕も思うね」

戦時中は、耶賀頼にはアナリティカルエンジンのことで随分世話と心配をかけた。空洞になった左眼窩を軽く抑える。

「もう、必要ありませんから」

うん、と頷く耶賀頼は、椅子を回転させてデスクの書類を整理しだした。整理が必要なほど物はない。

「彼の面会は？」

世間話の体で聞くが、これは軍の最高機密だ。デューカリオンの面々以外は、軍の上層部、地球と火星の政府重鎮しか知らない。

「定期的に」

くると椅子が回転し、耶賀頼の顔が正面に現れる。少し間をおいて、耶賀頼は少し低い声で言った。

「今日君に来てもらったのは、それも関係あるんだ」

その言葉に、伊奈帆は眉を吊り上げる。

「極秘事項ですよ」

伊奈帆の言葉に、耶賀頼は肩を竦めてしいつ、と唇に指をあてた。知り合いらしい、と言う。

「彼女、彼のことと君と話がしたいらしい。最後に戦闘していたのは、君だったから」

ウミネコのような白い機体は、今はない。伊奈帆の乗っていたスレイプニールも、もうない。大気圏突入で機体は大破し、二人のパイロットは海に打ち上げられたのだった。そこまで

は、公表された情報の通りだ。民間人が知っていても不思議はない。

「僕は、その人の情報を収集する任務で来ました」

「それは、逆かもしれないね」

耶賀頼は伊奈帆の言葉に微笑んで答えた。

「聞きたいことが沢山あるようだったよ」

さあ、こっちに応接室があるから、と耶賀頼が立ち上がる。伊奈帆は続いて、診察室のドアを出た。

「界塚伊奈帆少尉です」

応接室のソファの前で、伊奈帆は敬礼しつつ目の前に座る少女を見た。モニターで見たより少し髪が伸びている。火星人特有の色素の薄い肌はとてつもなく白く、少女の華奢な体格と相まって儂げな印象を強く残した。美しい、というよりは、可憐な魅力を持った少女だった。その目が、伊奈帆を凝視する。見ると、瞳は空色だった。伊奈帆は彼女の名前を呼ぶ。

「レムリナさんですね」

「ええ」

伊奈帆は向かいのソファに腰かけ、まっすぐ目線を送る。ひざの上で組まれた小さな手は、強く握りしめられていた。

「貴方が、あのオレンジ色のカタフラクトに乗って、タルシスと戦闘していたパイロットですか」

「はい」

「タルシスのパイロットは、死んだと聞きました」

「はい」

「でもそれは、捕らえられた後だと聞いています。間違いありませんか」

「はい」

「どうして貴方は、彼を撃たなかったのですか」

「戦争ですから」

「戦争だから？」

「はい。さしあたり敵将を無力化することができればよかったのです。死んでから捕らえるの

と、生きていて捕らえるのでは、後者の方が賢明です」

「因縁があったと聞きました」

頭の回転の速い人だ。こんな状況だが、伊奈帆は嬉しくなって頭のギアを切り替える。もつとも、彼の感情の変化がこういう場合に表層へ現れることはないので、傍目には何が変わったようにも見えない。

「軍人ですから」

「そうですか」

あっさりと言って、レムリナはひたと伊奈帆の顔を見据えた。その視線は、受け止める器官の失われた場所へ、その後対となるもう一方へ注がれる。

「その目は、どうされたのです？」

伊奈帆は空洞の左眼窩に眼帯の上から触れ、そして手を下ろし答えた。

「戦時中の負傷です」

レムリナが一度目を閉じ、そしてゆっくりと開く。

時計の音が、やけに大きく聞こえる。どこかで、誰かが歩く音がする。壁の模様や、テーブ

ルの木目、ソファの繊維などがやけにはっきりと意識される。時が止まりそうな鈍い色彩の中で、レムリナの唇がゆっくりと動いた。

「火星人に撃たれたのですか」

ノヴォスタリスクの空が脳裏に浮かぶ。白くけぶる灰色の空。肌を刺す空気。暗闇の温かな手。赤黒く飛び散った血液。伸ばした手。かすれた声。浮かび上がる白い顔。その涙に濡れた瞳。銃声。そして、眩しいほどに真っ白な病室。

引き金を引いたのは、蝙蝠。地球で生まれながら地球に帰れず、火星にいながら決して受け入れられなかった彼は、火星人も、地球人もない。たとえ、書類上は地球人だろうとも。

「いいえ」

伊奈帆の言葉に、レムリナが目を細めた。「そう」と呟き、口を引き結ぶ。伊奈帆の勘だが、彼女はこの一年、あらゆることを想像して、考えていた。きっと、ほとんど何も知りはないのだ。その想像の整合性を確かめるために、もっとも重要で肝心なことだけを聞いている。そして、その想像はほとんど驚異的なほどに当たっている、と伊奈帆は考える。

レムリナは、弾かれたように顔を上げ、身を乗り出した。テーブルの上に置かれた手の指

に、ぐっと力がこめられ血管が浮き出る。髪がさらりと揺れ、瞳がまっすぐ伊奈帆を見る。

「本当に、スレインは死んだのですか」

彼の名を呼ぶ。射貫かれそうな鋭い眼差しに答える。

「はい」

レムリナの顔が歪む。泣くか、と思われたが、その目は乾いたままだ。

「あなたが助けた、スレインが死んだのですか」

「はい」

「どうして」

「惑星間交渉の結果です」

「ひどいわ」

冷たい響きを持って、その声は聞こえた。彼女が冷静そのものだということを改めて認識して、伊奈帆はその先の言葉を待つ。

「戦争の首謀者だなんて。何てことなの」

悲痛な声に、今は獄中で生かされている囚人と思う。彼にも、心穏やかな時間はあったのだ

ろうか。

「あの人のこと、何も知らないのに」

レムリナが胸の前で両手を握りしめる。ふと、青い意匠の施された銀のペンダントを思い出す。レムリナが伊奈帆を見た。

「貴方も」

ぶうん、という音が聞こえた。空を飛行機が飛んでいく音だ。

「お姉さまも」

伊奈帆はなぜだか、隣に立って鳥を見た少女を思い出した。もう、簡単には会えない場所に行ってしまった少女。その碧の瞳と蒼の瞳は、どこか似ている。ブラインドから差し込む光が拡散して、どこかぼんやりとした黄色の空気が少女の輪郭を浮かび上がらせる。

伊奈帆は聞いた。

「貴方は、何者ですか」

レムリナは、「やっと聞いたわね」と呟き、してやったりという表情で小さく笑った。

「貴方は誰です」

この質問に対する返答は、彼女の賭けだ、と伊奈帆は思う。もし想像通りだとしたら、と伊奈帆も覚悟を決めた。レムリナが優雅に手を重ね、美しい姿勢で顎を引いた。桜色の唇が一度開き、閉じて、もう一度ゆっくりと開いた。

「私は、レムリナ・ヴァース・エンヴァース」

伊奈帆の夕焼け色の瞳を、澄んだ空色の瞳がまっすぐ見つめた。

「偽りのアセイラム。そして、スレイン・ザーツバルム・トロイヤードの婚約者です」

伊奈帆は、海賊放送の映像を思い出す。空が青いのは、光の屈折だと話したアセイラム。背筋を伸ばして、少し硬い表情で演説していたアセイラムが偽物だと、伊奈帆は知っていた。何度も検討し、導き出した結論の通りならば、レムリナは、持っている。

「アルドノア因子を」

「ご想像の通りだと思います」

レムリナの右手が翻り、心臓のあたりに指がそつと添えられる。小首を傾げて彼女は言った。

「お分かりかしら。私の存在が知られれば、未だに反抗を続ける火星騎士は私を奪還するため

に再び戦禍を巻き起こすかもしれませんわね」

アセイラムだけではないのだ。アルドノア因子の保持者は。アセイラムが地球との和平を願い、それに反発する火星騎士の説得を続けているが、その火星騎士たちがもう一人のアルドノア因子保持者であるレムリナの存在を知れば、どうなるかは火を見るより明らかだ。

「どうして、それを僕に？」

いたずらが成功したような表情で、これ以上なく嬉しそうに少女は言った。

「どうせなら、貴方に殺してもらおうと思って」

ふと、背中がざわめいて嫌な想像がちらついた。レムリナのバイアスは、スレインのそれとよく似ている。破壊を内包した生を生きる二人。初めての面会で聞いた「頼む」というかすれた声の先の言葉は、きっと今の言葉と同じだろう。

「私が、お姉さまにとってどれほど危険な存在か分かりますね」

レムリナの言葉に、伊奈帆はじっと聞き入る。目の前の小柄な少女の正体を知った今では、何事もなかったように、ここを出て行くことはできない。

「私は、火星にも地球にも居場所はありません。月にも、もう帰れません。そしてスレインは

いない。私には帰る場所なんて、どこにもないの」

帰る場所を持たない。翼を持つ生き物の姿が浮かぶ。鳥籠から出たものの、鳥籠は失われ、帰る場所もなく、行く場所もなく飛び続ける白い翼。光の中でどこにも行けない、もう戻れない黒い翼を震わせる生き物の姿。

白い海猫と、黒い蝙蝠の姿が。

「さあ、私をどうしますか。界塚伊奈帆さん」

伊奈帆は立ち上がった。

「あなたの身柄を拘束します。：耶賀頼先生」

伊奈帆の声に、きい、とドアの開く音がした。耶賀頼がソファに近づく。伊奈帆はレムリナに体を向けたまま、耶賀頼の方を見やった。

「今の会話は、記録されていますか」

「実は、監視カメラが故障していてね。書記官は手が足りなくて僕がした」

耶賀頼が片目を瞑り、呑気な様子で言った。右手のノートには、判別不可能な字体が整列している。伊奈帆は頷いて、レムリナに顔を向ける。

「ここでは何もなかった。あなたは、月面基地の火星兵の娘、ただの民間人だ」

伊奈帆は耶賀頼のノートをごしごしと手でこすりながら言う。ノートに鉛筆の黒い色が広がった。

「そういうわけで、マグバレッジ艦長に身柄を引き渡します。身元引受人が現れるまで、居住地は地球になるでしょう」

「やっぱり…」

絞り出すような声に、伊奈帆はレムリナを見下ろした。その顔には、晴れやかな表情が広がり、目には涙が滲んでいた。

「やっぱり、スレインは生きているのね」

両手の指を組んで、祈るように額に寄せる。頬を涙が伝った。あの涙はきっと甘いだろう。

「僕を試しましたか」

「ええ」

「無謀な人だ」

要するに、レムリナは伊奈帆に懸けたのだ。彼女の秘密を知って、伊奈帆が彼女をどうする

のか。そしてそこに、伊奈帆がスレインを助けた理由を見出そうとしていた。そしてそれは成功した、と言えるだろう。レムリナは、スレインが伊奈帆によって命を救われ、今なお生きていることを確信している。

「わたし自身を懸けるだけの理由があります。私は、あの人のものだから」

レムリナは、誇らしげに微笑み言った。伊奈帆は、もう一度ソファに腰を下ろす。耶賀頼は、レムリナの近くに立って、穏やかに微笑んでいる。伊奈帆は、面会室で差し向かいに座る、不愛想な青年を思い描く。彼もそうだ。いつも捨て身で自分のただ身一つを懸けて戦っていた。

「貴方たちは、よく似てるように思います。」

少し肩を竦め、嬉しそうな仕草でレムリナは「ねえ」と伊奈帆を見つめる。その瞳は、希望を宿して輝いていた。

「いつか、会えるかしら」

「善処します」

伊奈帆はテーブルに視線を落とした。何も乗っていない場所に、チェス盤が透けて見えるよ

うだった。

「あいつ、今は生きる準備をしてるんだ。それができたら、必ず」

「いつまでも、待ってるわ」

空色の瞳の中に、飛ぶ鳥を見た気がした。

Te necesito.

(2016-10-19)

訳) わたしは あなたが ひつようです。

「これ見て」

面会室の扉を開けた伊奈帆は、歩きながら一枚の書類をテーブル越しにスレインに突き付けた。スレインは紙面に目を走らせるが、日本語のため何が書いてあるのかよく分からない。

「何だ、これ」

「外出許可証。一週間後」

外出許可。処刑されたはずの火星軍の総司令官に外出許可。スレインはまじまじと読めない紙面の文字を三往復してから伊奈帆を見た。伊奈帆は対面に座り、テーブルの上で手を組んでいる。

「僕の？何のために？」

「そう言うと思った。気の利いた理由なんてないよ」

考え込むスレインに、伊奈帆は息を吐いて書類を取り上げた。ひらひらと、書類を指に挟んで玩ぶ。

「結構苦労したんだ。折角だからどこか行こう」

「別に、行きたいところなんてない」

俯いたスレインを一瞥して、伊奈帆は立ち上がった。

「それも、言うと思ったけどね。一週間ある。考えといて」

すたすたと立ち去る伊奈帆の後ろ姿を、スレインが恨みがましく見つめる。伊奈帆が、ドアの前で振り返った。

「もし決めてなかったら、僕が行きたい所に行くから」

「界塚！」

「一週間後に、また来るよ」

扉が閉まり、スレインは複雑な表情で固く閉じられた扉を見つめた。

「決まった？」

私服で現れた伊奈帆は扉を開けると開口一番そう言った。白いTシャツとオレンジ色のパーカ、ブルージーンズの年相応の服装が目新しい。若者らしい服装に、スレインは伊奈帆の年齢を思い出す。

普通の学生のようなだ。その左目の眼帯さえなければ。

「…」

「そう。じゃあ行こうか」

黙り込むスレインの腕を取って、伊奈帆は面会室の扉を開けた。初めて見る方の出入口にぎよっとして、スレインは目を丸くする。

「こっち。着替えて」

正方形の小さなロッカールームで、囚人服を着替える。そこに置いてあったのは、紺色のカットソーとブルージーンズ、白地にグレーの三本ラインのスニーカーで、スレインは着替え終わると壁際の伊奈帆に聞いた。

「手錠は？拘束しないでいいのか」

「遊びに行くのに、そんなもの着ける人いないよ」

伊奈帆がスレインの頭から爪先まで視線を一往復させると、しっかりと頷いてロッカーの扉を開けた。中に手を伸ばす。

「あ、遊びに？」

「うん。今日は遊びに行こう」

伊奈帆は、ロッカーの中から取り出したブルーの野球帽を放った。

「ここは…」

「入り口はこっち」

目隠しを外し到着した場所を確認して、スレインは呆気にとられて呟いた。伊奈帆は入場口を示して、スレインの手を引く。

「こんな所に連れてきて、何のつもりだ」

「いちいち煩いな。遊びに来たんだよ。言っておくけれど、今日僕は非番なんだ」

白とベージュの落ち着いたインフォメーションに近づく。四つある窓口には、今は一組のカップルが並んでいるだけだ。

「だからって、どうして僕を…」

「君、来たことある？遊園地」

「ない」

「僕もない。いい機会だ」

「…」

大股で歩いていく伊奈帆に、スレインは小走りについていく。カウンターのガラスの奥で、係員が微笑んだ。伊奈帆はポケットから財布を取り出し、いつもの抑揚のない声で言った。

「大人二枚。はい。パスポート込みで」

「最初は何に乘ろうか」

園内に入ると、赤茶色と白の石畳が幾何学的な模様を描く地面が広がっていた。ぐるりと、ローマ風の大理石円柱、アラブ風の煉瓦壁、ルネッサンス風の化粧タイルや冬期の塑像などが配置され渾然と溶け合い、太陽の光に照らされ輝いている。

美しい異国的な景色が目飛び込み、スレインは目を瞬かせた。もう長い間施設の外に出たことはなかったので、太陽の光に目が痛い。平日の午後で人は疎らだ。伊奈帆は案内板を眺め

ている。その左眼は、今は外気に触れている。「眼帯だと目立ってしょうがないから」という理由で、伊奈帆は義眼をつけていた。アナリティカルエンジンではない。ただそこにあるだけの義眼は焦点が結ばれることはなく、スレインは居心地悪そうに伊奈帆の左側に立った。オレンジ色のパーカーの裾を引っ張る。

「なあ、本当に今日はここで過ごすのか？」

「うん」

「気が進まない」

「そのうち楽しくなるから。あれに乗ろう」

スレインの野球帽のつばを下に引き下げて、伊奈帆は三つの輪がレールで構成されたアトラクションに向けて歩き出した。

「お腹空いたね。何か食べよう」

いくつかのアトラクションを制覇し、靴底でカンカンと音の鳴るアルミの階段を下りて伊奈

帆は言った。スレインは小さく頷いた。

ジェットコースターもバイキングも、カタフラクト乗りにとっては風に揺れるブランコのような感覚だな、と伊奈帆は轟音とともに頭上を過ぎ去ったアトラクションを見送った。スレインの顔を見ると、同じようにレールの上を走るアトラクションを眺めている。薄ぼんやりとした表情だが、楽しくないわけではなさそうだ。

「面白かったね」

「うん」

宇宙での生活が長く、現在は自由に出歩くことも許されていないスレインは、伊奈帆の言葉に素直に頷いた。スリルがあったわけではないが、青い空を逆さに見たり、宙返りしたり、風を感じるのには気分がいい。改めて、地球にいることと実感させられる。

それにしても、こんな社交辞令のような、特に意味のない会話は伊奈帆らしくないな、と思いを伏せる。

気を遣ってくれているんだ。

自分は、そんな資格はない。

「こっちだよ」

立ち止まるスレインを振り返り、伊奈帆が呼んだ。

気がつくとき、異国的な街並みの中を歩いていた。真っ白な漆喰の壁を飾る花々が鮮やかで、スレインは幼い頃立ち寄った国を思い出す。細い路地で伊奈帆の後ろを歩く。

昔、父と歩いたヨーロッパの街並みに似ている。大股で歩いていく父に追いつこうとして、いつも走って、躓いて時々転んだ凹凸の多い道。スレインが転んだことに気付くと、慌てて駆け寄り、手を繋いでくれた。

「アンダルシア」

スレインが呟く声が聞こえたのか、伊奈帆が振り向いた。スレインが追いつくのを待って、肩を並べて歩く。少しだけ、スレインの方が背が高いので、伊奈帆は少し顎を上げて聞いた。「行ったことある？」

「昔に」

「そう」

「遊園地っていうのは、乗り物があるだけかと思っていた」

「ここはテーマパークだから。日本では、遊園地と区別されないことが多いよ」

だからこんな細い路地が存在するのか。よく見ると、周囲の家々の窓の中には土産物が並んでいたり、レストラン、フリーの飲食スペースになっていた。

「ここにしよう」

茶色い屋根の、ランタンの下がった店だった。伊奈帆が青い木製のドアを開ける。カラんとドアベルの音が響く。店内には手書きのメニューボードが置かれていて、パスタや、サンドイッチなどの軽食が日本語と英語で表記されていた。奥から、ウエイターらしい店員が近づく。「空いているお席にどうぞ」

店員が二人に席をすすめる。客は、伊奈帆とスレインの他にはだれもない。店内の大きな壁かけ時計を見ると、十六時を回っていた。平日の半端な時間のせいだろう。窓側の丸テーブルに腰かけると、店員が水の入ったグラスを持ってメニューを聞きに来た。

「何でもいいよね。サンドイッチとナポリタン、あとカフェオレ二つ。アイスで」

スレインの返事を待たず、伊奈帆が黒板のメニューを見て注文していく。どんな時も迷いのないやつだ、とスレインは思う。

「カフェオレは、いつお持ちしますか」

「一緒でいいです」

店員が厨房へ消えていくと、伊奈帆はグラスの水をごくごく飲んだ。喉が渴いていたのかな、と思いながら、スレインは汗をかけたグラスから伊奈帆の腕を伝う水滴を見る。

「アンダルシアって、どんな所？」

さっきの会話の続きだ。伊奈帆と会話をするようになってしばらく経つが、彼の話し方には問いかけが多くなったように思う。収容当初の頃のような刺々しさは、もうない。お互いに。記憶の中を探るが、臆気なものばかりだ。シャッターを切ったかのような鮮明な記憶も混じっているが、断片的で前後の脈絡がわからない。

「…小さい頃だから、あまり覚えてない」

「ふうん」

伊奈帆は気にした風もなく相槌を打つが、これで会話が途切れてしまうのは勿体ない気がして、スレインは言葉を探す。

白い壁に赤と黄色の花々。細く登る石畳。大きな掌。その笑顔は眩しすぎる太陽を背にして

影になっていた。

「けど……さっきの道を歩いていたら、昔のことを思い出した」

「うん」

「だからきつと、ここはアンダルシアに似ているんだと思う」

「そう。いいね」

「何が」

伊奈帆の不思議な返答に、スレインは首を傾げる。伊奈帆はくすぐったそうに肩を竦めた。

「君が、嬉しそうに見えるから」

穏やかな表情で見つめられて、スレインはどきまぎと窓の外を見た。

夕方に近づき、日差しはじんわりと降り注いで影絵の世界にいるようだ。空は絵の具の青を水で薄めたように白っぽく滲んだ色を広げていた。

「……向日葵が」

「向日葵？」

うん、と頷いて目を細めるスレインの顔を、伊奈帆は正面から見た。彼の金の髪と碧の瞳、

北欧人らしい顔立ちは、飴色で木目の歪なテーブルであるとか、高い天井でゆっくりと回るシーリングファンであるとか、壁面の模様や絵画であるとか。古めかしく作り込んだ店内に詭えたようにぴったりで、まるで本当に異国の地、アンダルシアにいるかのような、そんな錯覚に陥る。

「見渡す限り、一面の向日葵畑の中を歩いた。空は青くて、雲が峯のように連なって……。黄色の向日葵は風に揺れて、……笑っているようだった。僕より背の高い向日葵の中を、父と二人で歩いた」

伊奈帆は椅子に背を預け、静かに耳を傾けている。スレインは、自分を眺めるその左目をふと見る。自分が彼の左目を見ていることに、彼の右目は気付いているだろうか。

「いつも自分のペースで歩くから、僕は白衣を着た大きな背中を見上げて、走って追いかけて……。転ぶこともあった。そんな時は、戻ってきてくれて……。手を。手を引いてくれて……」

スレインが自分の右手の平を持ち上げ、視線を落とした。

伊奈帆は、姉のことを思った。小さい頃は、よく手を引いて歩いてくれた。その柔らかで温

かい手は、一人ぼっちの自分が唯一守りたいものだった。たとえ、人を傷つけたとしても。

「父の顔はあまり覚えていないけど、あの手はよく覚えてる」

「そっか」

スレインはぎこちない表情で笑って、伊奈帆はできるだけそっけなく返答した。「お待ちせしました」という声とともに、二人の間に二つの皿と二つのコップが置かれた。

食事を済ませて店を出ると、橙色の細い雲が青い空に浮かんでいた。空の色は地平線に近づくにつれ青から白、橙色とグラデーションになっている。薄暗くなった路地を抜けると、広い空間に出た。

中央の噴水から、透明な水が湧き出ている。水の飛沫は夕焼け色を湛えてきらきらと光っていた。噴水の中心には、女性の像がある。二輪の戦車に腰かけ、それを引いているのはライオンだ。タロットカードにこんな絵柄があったな、とスレインは思った。

「キュベレだ。ギリシア神話」

スレインは伊奈帆が解説を始めたことに顔を顰めて、目の前の美しい女神の像を見る。この話したがりにつき合う気もないが、彫像は美しい。伊奈帆の声が聞こえる。

「病を治し、戦争の時民衆を守る女神。二頭のライオンが戦車を引く」

ライオンを駆り、戦場へ現れる女神を想像する。

「キュベレは、神託を与え、恍惚を誘い、予言をもたらし、痛みや死でさえも和らげる」

「…何が言いたい？」

いつもそうだ。伊奈帆の話は回りくどい。何となく言いたいことは伝わってくるが、はっきりとした言葉にしないから、いろいろと考えを巡らさなければいけない。しかし、今回はあまりにも分かりやすい喩え話だったので、スレインはいらいらと伊奈帆に詰め寄る。伊奈帆は首をぐるりと回してスレインを見た。意思のこめられた右目と目が合った。

「民衆だけだ。その恩恵を得ることができるのは」

言って、伊奈帆はもう一度噴水を見上げる。スレインもその白い像を見上げる。もう記憶の中でしか会うことができない、美しい少女の姿が重なる。

「二頭のライオンには、死すらないんだ。キュベレにも」

そう言って伊奈帆は踵を返した。スレインはもう一度噴水の女神と二頭のライオンを一瞥して伊奈帆の背を追った。

空の色がオレンジからピンクになり、青くなり始めた頃、伊奈帆とスレインは地上六十メートルの地点から夕焼けを眺めていた。ゴンドラは、ゆっくりと円周上に上昇を続けている。スレインは、帽子を座席に置いて窓の外を見ていた。伊奈帆は、同じ景色を瞳に映してスレインに聞いた。

「楽しかった？」

スレインは窓の外から伊奈帆に視線を移して、大きく目を見開いた後、口を引き結んで頷いた。

「うん」

「良かった」

それは零れるように口から出た伊奈帆の本心だった。スレインは目を左右に泳がせてちらり

と伊奈帆に視線を送った。いつも面会室で交わされる会話との違いに、今日は一日中戸惑いを隠せない様子だ。

しばらく、穏やかな沈黙が続いた。ゴンドラの揺れと、少しずつ変わっていく視点、時間とともに色を変える空。ふと、スレインが口を開いた。

「あれ、なんて言ったっけ。馬の…」

白い指先が指し示す方を伊奈帆は見る。唐草模様で美しく装飾された屋根が確認できた。

「メリーゴーランド？」

「そうか、メリーゴーランド…」

スレインの目の色を見て、伊奈帆は言った。

「君が考えていることを当てようか」

スレインが伊奈帆を見る。いつもと違い、今は向かい合う二人の間には何もない。スレインはじっと身を詰めて、伊奈帆の言葉を待った。伊奈帆はその碧の双眸を見つめた。

「きっと、アセイラム姫が好きだろうな、って思ってる」

スレインが居心地悪そうに伊奈帆から目を逸らした。伊奈帆も、スレインの見る先へ顔を向

ける。同じ場所を回り続ける木馬たち。

「僕も、同じことを思ったよ」

「そうか」

小さく聞こえた声は、優しかった。

速度を上げて変わる空の色。その中を、雁が連なって飛んで行く。

「生きて、こんな景色を見ることができるとは思わなかったな」

「そうだね」

本当に、そうだ。あの頃は、死と隣り合わせだった。伊奈帆はスレインの銃弾によって生死をさまよい、彼と相対して命のやり取りを繰り返した。

何度も戦場で相見えた相手。

ゴンドラの中で向かい合う自分たちは、お互いの手によって死んでいたかもしれないのだ。

「伊奈帆」

スレインが雁の群れを目で追い、伊奈帆の名前を呼んだ。スレインが伊奈帆のファーストネ

ームを呼ぶことは珍しい。伊奈帆はスレインの声が穏やかに優しく聞こえるように感じた。

「何」

「ありがとう」

「うん」

そこでスレインは、伊奈帆に正面から顔を向けた。眉が下がって、口元がよく見ないと分からないほど緩やかに持ち上がり、碧の目が細められる。

伊奈帆は、スレインが微笑むのを初めて見た。しかし、微笑みと言うにはあまりに悲しそうで、伊奈帆はなんだか堪らない気持ちになった。

「今日のことだけ。…その、僕に会いに来てくれて。いつも」

「うん」

「僕は、姫と君に生かされている」

スレインの右手が、服の上からペンダントを握る。スレインから、アセイラムへ、伊奈帆へ。またアセイラムへ、そしてスレインへ巡ったもの。地球と宇宙を行き来したペンダントは、何も語らない。

「うん」

「生きているのは苦しい」

「うん」

面会の度、スレインの状態について伊奈帆は報告を受けている。食事を、吐いてしまう。夜は飛び起き、眠っている最中に体を掻きまわったり。どうにも心配な様子だと刑務官から聞いていた。スレインはペンダントを固く握りしめたまま、伊奈帆に語る。

「夢を見る。僕が殺した人たち……。正義とか、平和のためじゃない。僕の都合だ。……息子だと
言ってくれた人もいた。みんな騙して裏切って、殺した」

戦争だから、とは彼に言うことはできない。その言葉が、彼を追い詰め傷つける言葉だと分かるからだ。彼は、幾つもの選択肢の中から多くのものを捨て去り、奪った。自分の意志で。

「そんな日は死にたくなる。姫様の思いを裏切るようで辛い。……でも、そんな夢が何日も続いて、いよいよ死のうか、と思うと、そんなときに限って、君が来る」

ひたとスレインの瞳が伊奈帆を捉えた。言葉にできず零れ落ちた感情の何かが、碧の色彩の中で揺れたように見えた。

「君がその仏頂面で、目の前に座ると。…生きていること、生きていくことを思い出す」

「…仏頂面はお互い様だよ」

伊奈帆の言葉に、スレインはくすりと笑った。

「でも、そうだな。何が言いたいかっていうと、」

薄暗い園内に点り始めたイルミネーションが、スレインの顔を照らした。青と黄色と、白っぽい光。はっきりとした輪郭で白い頬が浮かび上がった。唇が動いて、ひそやかな声がこだまする。

「君がいるから、僕は今生きてるんだ。…きつとこれからも」

伊奈帆は、藍色の空の中、もう見えないところへ飛んで行った雁の群れを思い描く。

「雁は、群れの一羽がけがや病気で群れから離れると、別の二羽が編隊を離れてその雁を追いかける。この二羽はずっと付き添う」

スレインは伊奈帆の話にじっと聞き入っている。

素直じゃない自分の話を、いつもスレインは最後まで聞いてくれる。そして、その表情から伊奈帆の思いや意思が伝わっていることが分かる。スレインは、今まで他人に理解されること

の少なかつた伊奈帆が、手加減なしで話ができる唯一の人物だった。

「ずっと？」

掠れた声が問い返した。うん、と伊奈帆は続ける。

「怪我をした雁が回復するまで。あるいは、息を引き取るまで」

地上が近づく。イルミネーションで光るアトラクションや街灯の明かりが、薄い扉を隔て別の世界のように感じられた。

「その後、新しい群れに加わるか、新しい編隊を作って元の群れに追いついていく」

ゴンドラが大きく揺れた。平行移動を始め、降り場へ動いていく。

「僕は、君に生きてほしいと思うよ。できれば、笑って」

スレインは伊奈帆に向けて、口角を上げた。怒っているような、泣いているような、不器用な笑顔だった。いつか晴れやかな笑顔が見れるといい、と伊奈帆は願って、開いた扉から身を乗り出した。

薄闇の中、遠くからパレードの音が聞こえる。静かな園内を、伊奈帆とスレインは並んで歩いた。伊奈帆が口を開く。

「怪我をした雁は、君だけじゃない。僕も、君に救われてるんだ」

スレインが、隣を歩く伊奈帆を見た。伊奈帆は、真っ直ぐ前を見て歩いている。焦げ茶の髪が風に揺れた。

「人を殺したのは、僕も同じだ。セラムさんも」

伊奈帆の言葉に、スレインは思わず胸のペンダントを握りしめる。

人が死ぬということ。父が死んだ日のことを思い出す。家族を失った子ども。一人ぼっちの子ども。きっと、自分たちが殺した人にも家族がいた。子どもがいた。愛する人がいた。

「…戦争だから」

パレードの音も聞こえない所まで歩いて、ようやくスレインは言った。その言葉で、伊奈帆は足を止めた。振り返るスレインを、橙の丸い目で見た後、ゆるゆると首を振った。

「…戦争だけど、失われた命は戻ってこない。自分が生きるために、自分の都合で人を殺したのは僕もセラムさんも同じだ」

惑星間戦争の英雄と大罪人は、夜の色の中で向かい合った。街灯の光が影を伸ばし、伊奈帆の影がスレインの足を黒く染めていた。

まだ幼さの残る顔立ちの二人は、他の人間が見ればぞっとするほどの深い色を宿した瞳で見つめ合う。

「君には、知っていてほしい。君が死にたいと思う時は、僕も同じ気持ちだ。セラムさんもそうだ。死にたい気持ちを抱えて生きている。でも、生きていていいんだ。君も、僕も、セラムさんも」

伊奈帆が一步、二歩、スレインに近づく。胸で握りしめられたスレインの手を、伊奈帆の手がそっと外して両手で包んだ。ぎゅ、と小さく力をこめた。

「スレイン。君がいてくれて、良かった。君が生きていてくれて、良かった」

近くで見下ろす伊奈帆の顔は、目を閉じて笑っていた。子どものようで、スレインはこの軍人が自分よりも年下だったことを思い出した。

「…君、笑えるんだな」

「君もね」

気が抜けたように言うスレインに、伊奈帆があっけらかんと言った。伊奈帆の右手がスレインの左手を引いた。

「また来よう」

帰路に着く二人の手は繋がれたまま、群青色の空には星が瞬いていた。

罪と罰と慈愛と、 多分我儘

(2017-03-15)

※暴力表現を含みます。

※性行為を匂わせる描写を含みます。

※アセイラムと克蘭カインのキャラ解釈が酷いです。

「ようこそ。サー・スレイン・トロイヤード」

目隠しを外された目に飛び込んできたのは、克蘭カインの冷笑だった。地球の極秘施設からの長い旅路を拘束具と目隠しでがんじがらめにされていたスレインは、光源が目に刺さり顔を顰める。椅子に拘束されて身動きができないスレインの数歩前から、克蘭カインがその様子を見下ろしていた。

「懐かしいでしょう。父の揚陸城です」

目だけを動かし見渡すと、ここはいつか、アセイラムともに地球を眺めたテラスだった。床面に地球が透けて見える。

「貴方が生きていることが、どうして分かったか教えてあげましょう」

コツコツと、克蘭カインが踵を鳴らして室内を歩く。氷のような冷たい笑みを浮かべる克蘭カインは、薄気味悪いほどの甘い声で話し出した。

「アセイラム女王が、貴方に並々ならぬ感情をお持ちだったことを知っていたのね。処刑されたと聞いて私は心の中で喝采を送りました。悲しみに暮れる陛下をお慰めして、私たちの愛はより一層深まり、夫婦として新しい生活を送っていくことができるね」

克蘭カインは首を振った。

「しかし女王陛下はそれほどの悲しみを受けているように見えなかった。本来であれば、それは喜ばしいことなのですが、どうも腑に落ちない。悔しいが、貴方が陛下にとってつまらない存在だとは、認められなかったのですね」

遠ざかる克蘭カインの背中を、スレインはじっと見た。その真っ直ぐな背筋と冷たい怒りが立ち上る背中とは、彼の父親によく似ている。

「私は、鎌をかけたのですよ」

このテラスで、アセイラム女王に降りかかる様々な責務や苦言、平和には程遠い地球や火星の現状、戦時中の思い出などを語り、私の忠誠を示したのですよ。そう告げる克蘭カインの声は甘かった。吐き気がするほどに。

「女王陛下はお優しい方だから、私がお心を慰めるうち、一言溢された」

克蘭カインは振り返った。もう笑ってはいなかった。冷たい表情の中、その青い瞳に浮かぶのは憎悪だ。

「スレイン、とね」

このテラスで、地球を見て。

スレインは目を伏せ、口輪の中の奥歯を噛みしめた。ぎり、と音がした。

「貴方が生きていると確信しました」

克蘭カインは、大股でゆっくりスレインに近づく。声が、奇妙な朗らかさを持ってしんとした室内に響く。

「地球連合も、貴方を持て余していたようですね。引き渡すよう交渉したら、すんなり通りました」

克蘭カインは、スレインの拘束された椅子の前で立ち止まった。小首を傾げて言う。

「一人の軍人を除いてね」

その言葉に、スレインはぱっと顔を上げた。その碧の瞳を、青い瞳が冷たく見下ろした。

「界塚という男は、最後まで応じようとしませんでした。：貴方、彼とはどういった関係なのですか？」

克蘭カインが、スレインの顎を掴んで引き寄せる。吐息が感じられるくらい顔が近づき、スレインの肌が羽を挽がれた七面鳥のように粟立った。

「先の星間戦争の英雄。女王とも懇意の間柄だとか。地球での後見人のような立場だったそうですね。随分と、貴方に執心でしたよ。我が身惜しさに、その顔で誑かしたわけですか。この期に及んで命乞いとは見苦しい」

つ、と睨みから顎先までを撫でられ、スレインは逃げるように身じろいだ。克蘭カインはけらけらと笑う。

「どこにいても、やることは同じですね。浅ましい地球人だ」

唐突に真顔になって、克蘭カインはスレインの口輪を取った。

「何か喋りますか」

スレインは強い視線で克蘭カインを見上げた。嚙んで血が滲んだ唇を小さく開く。

「…姫様は、このことは」

バチン、と音がした。頬を打たれたスレインは、バランスを崩し、椅子ごと倒れた。その頭を、克蘭カインが踏みつける。

「女王陛下と呼びなさい。いえ、呼ぶ必要もない。貴方がここにすることは知りませんよ」克蘭カインの手が、スレインの髪を掴んで引っ張った。もう一度、強く頬を打つ。

「貴方はこれから、女王陛下のいるこの揚陸城で飼われるんです。どんな気分ですか」

近づいたクランカインの顔に、スレインは唾を吐いた。クランカインがスレインの頭を床に叩きつける。首に手を掛け力を込めた。スレインの口から、呻き声が漏れる。

「躰がなっていないですね」

扉が開き、ぞろぞろと青服の兵士が現れる。再び目隠しをされて、スレインは数人の兵士に羽交い絞めにされた。

「貴方がどういう立場か、教えてあげましょう」

真っ暗になった視界の中で、クランカインの声がぐわんぐわんと響いた。乱暴に押されて、どことも知らない場所へ連れて行かれるのを、スレインは不思議とほっとした気持ちで受け入れた。

途中でぐるぐると回され、角を戻り、方向感覚を失わされてたどり着いた扉の中、スレインは手枷と目隠しをされたままで服を剥ぎ取られ柱のようなものに縛り付けられた。兵士たちが出て行き、扉が閉まる音がした。

「ふうん。地球では、大量殺戮の罪人を随分丁寧に扱うんですね。傷一つ、痣一つないとはね」

長い指がゆっくりと体中を撫でまわす。視界を奪われた中与えられる刺激に、スレインは体を強張らせた。その様子を見て、克蘭カインが声を上げて笑う。指が、執拗に胸の古傷をなぞった。

「この、そこら中についた古傷は、誰がつけたのですか」

爪を立てられ古傷から血が滲む。

「父ですか」

ぎり、と爪が食い込み血が滴った。ぱん、と音がして、スレインの頬を克蘭カインの平手が打った。

「上書きしないといけませんね。新しい飼い主は誰なのか」

目隠しを取って、額が触れ合うほど近くで克蘭カインは笑った。口元を歪に曲げて、仄暗い笑みを顔に浮かべる。

「不幸ですね。貴方も」

そして克蘭カインは嘔みついた。首筋から、血が滲んで流れ出た。嘔みちぎられるか、という強い力に、スレインは思わず悲鳴をあげる。

「うあっ…、あ、あ！」

「煩いですね」

がん、と固いもので横面を張り飛ばされて、口の中に血の味が広がった。見ると、克蘭カインの手にはステッキが握られている。見覚えのありすぎるそれに、思わずそのステッキと持ち主を交互に見比べた。大きく振りかぶったステッキの握り手が、今度は側頭部に当たる。スレインの額から、だらだらと血が流れ落ち床に血溜まりを作った。続けざま、頭にガンガンと振り下ろされる。

「はあ…、が、あ…」

「何を大袈裟な。慣れているでしょう」

そう言って克蘭カインは、ステッキを操作して形状を変化させた。ひゅつと風を切る音がして、次いでバチン、と弾ける音。鞭が撓り、青白い体に赤い蛇が這うような跡が次々残った。

「うっ…、く…あ、あ…」

「お前のせいで、お前のせいで、お前のせいで！」

克蘭カインは、体中が真っ赤に腫れあがり、痣だらけ傷だらけ血だらけでぐったりと吊られるスレインの縄をほどいた。床に崩れ落ちて横たわったスレインを蹴飛ばして、克蘭カインは馬乗りになって首を締めあげる。スレインの喉から、ぐぐもったような声が漏れた。

「お前のせいで…！あの方は、私を…」

克蘭カインの怨嗟の声と暗く燃える瞳に映る自分を見て、スレインは早く殺してくれればいいのに、と思う。

「お前さえ、いなければ…」

ぎりぎりと言を締め上げる両手に意識を手放そうとした矢先、解放された。はあはあと息を切らした克蘭カインの下で、スレインは力なく咳込んだ。

「いや…。殺しません。死ぬなんて貴方には勿体ない。死ぬより辛い生が、貴方の罰ですよ」
ステッキの柄をがっ、と口に突っ込まれて、スレインは苦しさに嘔吐く。切れた口内から顎を伝い血が流れ落ちた。

「もう奪われるものは何もないと、安心していきましょう。なら、貴方を破壊してあげましょう」

シュル、と衣擦れの音がした。スレインは、混濁した意識の中で克蘭カインの声を聞いた。

「貴方の、中身をね。あの方のことが分からなくなるまで、壊してあげましょう」

その一室は、小ぎれいに整えられていた。シャワー室と給湯室、大きめの寝台、そしてクロゼット。その部屋で、克蘭カインはスレインを責め、蹴り、凌辱した。スレインは、特に抵抗することもなく、それらを受け入れた。克蘭カインの気が済むと、クロゼットの奥にある隠し戸の中へスレインを放り込んだ。世話をする人間はいない。汚れ、傷つき、襦袢雑巾のように打ち捨てられ、放置される。何日かして、また克蘭カインが扉を開けると、シャワーと食事を強要され、一通りの残酷な仕打ちを受けた後、クロゼットの奥に放り込まれる。

そんな日が、どのくらい続いたのだろうか。

昼も夜もなく、動物のように扱われる。人格とか、尊厳とか、そういったものを徹底的に破壊してくれるこの場所は、しかしスレインには酷く相応しく思えた。だから受け入れる。意識や尊厳、美しい思い出や感情を理不尽に奪われることも、引き裂かれ砕かれ磨り潰されるような苦痛を与えられることも、もう見ることもない光や未来を突き付けられることも。

暗いクローゼットの奥の密室で、素肌で石畳に転がりながら、スレインは閉じた瞼の奥で思考する。早く、こんな正気など失ってしまえばいいのに。

ここに来てから、あの男のことをよく思い出す。

冷たい地下で、差し向かいに座る男。幼く見える面差しに不釣り合いな軍服と眼帯を身に着け、雨の匂いをさせていた少年。彼の目を奪ったのは自分だ。ただ一つ残った橙の瞳はいつもじっとスレインを見た。その瞳の温度は、冷たくはなかった。

あの場所は安全で、何も奪われないし何も与えられない。そして、途方もなく静かだった。

彼はスレインの前に座り、ただそこにいた。伊奈帆は、何も奪わなかった。何も与えなかった。そして、ただそばで、同じものを共有していた。

スレインは、暗闇の中声を上げずに笑う。肋が痛んで、数度咳込んだ。痛みは慣れている。この場所は自分に似つかわしい。でも、やけに耳の奥が煩い。うわんうわんと、耳鳴りがする。火星でも、月でも、宇宙空間でも。地球にいた時にだって感じた耳鳴りは、あの男が来るようになり無くなった。

なんと得難い存在だったろうと思う。でも、もういい。伊奈帆から離れることができて良かった。彼は、光の中にいる。できればそこに留まり、人並みの幸せを感じて生きてほしい。自分に巻き込まれて、闇の中へ引きずり込んでしまいたくはない。

遠くで、小さな電子音がした。クランカインが来たのだろう。時間の感覚が曖昧だが、随分早いように思う。これから行われる行為を思い、スレインは重い瞼を開けた。

一方その頃、揚陸城のエマージェンシー音を最大にして、一機のシャトルが滑り込んでい

た。けたたましいサイレンの中、侵入者は揚陸城のウェルドックを走り抜ける。

侵入者は、界塚伊奈帆。

ピストルを右手に、アナリティカルエンジンを左目に、通用口を駆ける。

克蘭カイン伯爵がスレインの存命を知り、瞬く間にスレインの身柄は伯爵の元へ移された。地球軍への申し入れの際に最後まで抵抗した伊奈帆だったが、少尉という階級では火星を統治する伯爵に張り合うことなど到底できなかった。

そして今現在、伊奈帆は界塚ユキを頼り、鞆戸孝一郎を頼り、マグバレッジ艦長を頼り、カームや韻子に頼り、シャトルをはじめ様々な面倒を預け、事ここに至っている。損得ではなく、ただの厚意に甘える形で。

遠い日の、シャベルと土の感触を思い出す。ざりざりとした感触と冷たさを、思い出す。

もうあの頃みたいに、一人で戦う必要はない。

大切なものが、伊奈帆には増えた。そして、大切な人たちの大切な人になれたことを信じられる。

自分が、こんなに人を信じることができるとは。背中を、弱みを、覚悟を、預けることがで

きるとは。

それは多分、セラムのおかげだ。そして、彼女の願いを形作ったスレインのおかげだ。だから、今回のことも黙って無かったことになってできない。スレインは、既に伊奈帆にとって個人的に干渉せざるを得ない対象だ。それを差し引いても、セラムに預かった願いを、セラムとして最後に願った彼の救いを、こんな形で反故にされては堪らない。

「どこに、いるんだ」

狭い通路を抜ける。左目のアナリティカルエンジンが、伊奈帆の問いかけに応え電子音を立てた。

連絡通路を駆け、J字路を左折した瞬間、現れた人影と鉢合わせた。身構える伊奈帆の前で、白い布が翻った。

「伊奈帆さん？」

その声に、姿に、呼吸が止まった。

「セラムさん？」

目の前に、かつての火星のプリンセスが一人で立っていた。あの時と同じ白いドレスを着ている。胸の前で握られた左手の薬指に、銀のリングが光っていた。

「アセイラムです」

少し大人びた表情の彼女は、肩を竦めて微笑んだ。

「アセイラム女王。ご壮健で、何より」

伊奈帆は、敬礼の姿勢をとった。アセイラムは、小さく膝を折り、それに応えた。この場には不釣り合いなやり取りだ。アセイラムが、不安そうな表情で伊奈帆に聞いた。

「伊奈帆さん。どうして、ここにいますか？侵入者が現れたと聞きました。まさか、貴方がそうなのですか？」

伊奈帆は、唇の前に人差し指を立てた。

「内緒に、してください」

「え？」

「僕を、見なかったことにしてくれませんか」

アセイラムは伊奈帆の言葉に眉を顰めて数秒考えた後、聞いた。

「でも、それでは、何をしているのですか？」

言った瞬間、アセイラムは、はっと表情を強張らせた。

「ここに、スレインがいるのですか」

こんな時だけ、察しがいい。詰め寄るアセイラムを左手で制した。アセイラムは目の前の伊奈帆の左手を両手で強く握った。

「彼の様子がおかしいと思っていました。よく、姿が見えなくなつて……。何か、何を考えているのか分からないところがありました」

アセイラムの言う彼、は彼女の夫だ。交渉の際、一度だけ話をした。その瞳に宿る暗い憎悪を思い出す。

——殺しません。先延ばしにしている罰を与えるだけです——

「彼は死にました。貴方は、ここにいて」

伊奈帆の示す彼は、スレインのことだ。アセイラムはふるふると首を振った。

「嫌です。私も行きます」

アセイラムが、伊奈帆の腕を掴んだ。伊奈帆は、その腕を事務的に外す。そして、厳しい声

で言った。

「駄目だ」

伊奈帆の冷たい仕打ちに衝撃を受けながら、それでもアセイラムは縋りついた。

「どうして!? 一体、何があったのですか。スレインは、地球にいるのではなかったのですか」
城内には、警告音が鳴り響いている。ばたばたと、足音があちらこちらで聞こえる。早くしなくては。

「…貴方は、知らない方がいい」

伊奈帆は、アセイラムから二歩下がり、半身を翻す。

「私も行きます。この揚陸城は、私のほうが詳しいですよ」

引くつもりはないらしいアセイラムに、言いたいことは幾つかあった。この事態に自ら関わる危険性とか、地球と火星の関係とか、小さな恨み言とか、いろいろ。でも、全てを飲み込んで、伊奈帆は一つだけ言った。

「…酷いものを見ることになる。後悔しますよ」

「伊奈帆さんは、後悔しないのですか」

間髪入れずに、アセイラムが言った。二歩分の距離で見つめ合う。瞳は、逸らされなかった。

「分かった。一緒に行こう」

多分。自分も、後悔するだろうし、傷つくだろう。でも、何もしないではいられない。スレインは、伊奈帆にとって失うことができない存在になりつつあった。アセイラムにとって、スレインはずっと以前からそうだったのだ。

「こっちだ」

地球連合軍少尉とヴァース帝国女王は、連れ立って走り出した。一人の地球人を探して。

「こんなところがあったなんて……」

結局、伊奈帆が先導して揚陸城内の一室に辿り着いた。鍵も掛かっていない簡素な扉の内側は、華美ではないが美しい調度で整えられている。布張りのソファとガラスのローテーブル。そして大きな天蓋付きの寝台が配置されていた。シーツは整えられているが、その木製の柄に

細かい傷や染みを見つけ、アセイラムの胸がざわめく。

「…あまり、じっくり見ない方がいい」

伊奈帆の言葉に、アセイラムは視線を伊奈帆の背中に固定して、足早について行く。

「ここだ」

伊奈帆がクローゼットの扉を開ける。中にはもう一つ扉があり、その横の電気錠に伊奈帆はコードを接続した。

アナリティカルエンジンが稼働する音が響く。数往復の電子音との会話の後、伊奈帆がキーを操作する。

小さく音を立てて、あっけなく扉が開いた。

真っ暗な室内は、ひやりとしていた。餓えたような臭いがする。ほんの数歩歩けば行き止まりの小さな空間だった。アセイラムが、小さく悲鳴を上げて後ずさる。

「どうして…?」

立ち尽くすアセイラムを一瞥して、伊奈帆は足を踏み入れた。そのまま数歩進み出る。

それはまるで、いらなくなつて放り投げられた人形のように転がっていた。投げ出された手足はもはや枝のように細くて、床に散らばる髪は絡み纏れて汚れている。青白い裸の体中にこびりついているものが何かわからないほど、もう子どもじゃない。

膝をつき、汚れた肌に躊躇いなく触れて、伊奈帆は聞いた。

「僕が分かる?」

微かに身動いで、長くなつた髪の間から虚ろな翠が覗いた。伊奈帆の顔を確認して、青白い唇が震えるように動いた。

「…なんで来た」

まだ正気があったことに安心して、伊奈帆はほっと表情を緩めた。軍服の上着を掛けてやり、肩を抱いて上半身を起き上がらせる。以前から痩せ細っていたが、さらに痩せた。骨格が目立つ体についた痣や傷、乾いた血や体液で顔も体も無残な姿だった。顔に掛かる長い髪を掻き上げてやる。スレインは、痣と血だらけの顔をゆっくりと伊奈帆に向けた。その目を見て、

伊奈帆は言った。

「迎えに来た」

「…馬鹿だな」

「まあね」

汚れるから離せ、と小さく言った彼の肩を、伊奈帆はぼんぼんと叩いた。スレインは意識をはっきりさせるように小さく首を振って、顔を上げた。

目が。開いたままのドアの光源へ自然と引き寄せられる。

「…ああ」

スレインの瞳がアセイラムの姿を映した。体がびくりと跳ね、わなわなと唇が震える。

「姫様が」

信じられないもの、昼間の幽霊でも見たような顔でスレインは言葉を落とした。逸らすこともできない翠の二対の瞳は、その全てが大きく波打ち揺れた。

「スレイン…どうして…」

消え入りそうな声にあったのは、戸惑いと怯え、そして隠しようのない生理的な嫌悪だ。

「セラムさん」

伊奈帆が左側に振り返った。アナリティカルエンジンが伊奈帆を呼ぶ。伊奈帆は、声を出さずにそれと会話した。

ここに、向かっている。早くしないと。

「もう、僕らから離れた方がいい。帰ってくる前に」

「それを、したのは。誰なのですか」

アセイラムが恐怖で目をいっぱいに見開いて、スレインを見る。瞳から大粒の涙がぼろぼろとこぼれ、床に染みをつくった。

スレインは、固く目を閉じて項垂れている。愛する人に、彼女の夫に凌辱された体を見られている。その事実には伊奈帆は唇を噛んだ。

克蘭カインは…、という呟きは、震えていた。両手で頬を包んだアセイラムはがたがたと震えている。膝が震えているのか、ドレスの裾がさざ波のように波打った。

「私に触れた手で、あなたをこんな目に？」

スレインの体が小刻みに震えだす。

「どうして…」

かつて恋をした人。美しい思い出をくれた人。そんな二人は、もう一生、手を取り合い幸せになることはできないのだ。

「彼が生きているということは、そういうことです」

伊奈帆が淡々と告げた。

「事前に防ぐことはできなかったが、予測できた事態だった。これから、別の人間によって同じようなことが何度も繰り返される、かもしれない」

伊奈帆はアセイラムを見た。左目が微動だにせずアセイラムの姿を映し出す。

「貴方に、その覚悟がありますか」

「私は…」

途方に暮れたようなアセイラムに、伊奈帆は続けた。

「耐えられないのなら、こいつを自由にすればいい。救いを求めるなら、絶望を耐えなければいけない」

「…スレイン」

スレインはがたと震えていた。床を掴む指は爪がはがれて血が出ている。感情の読み取れない双眸から、水滴が流れ続けていた。涙というには、悲しすぎる雫だった。

「…」

ガチガチと奥歯を鳴らして、じっと耐えている。死よりも惨い時間が流れる。伊奈帆は、肩を抱いた手にぐっと力を込めた。

「私は、あなたを救いたかった…」

アセイラムの声が聞こえる。静かで、悲しくて、どこか虚ろな声だった。

「でも、私の願いが、あなたを不幸にしているのなら…」

アセイラムが首を振る。逆光の中立ち尽くす彼女の影が、スレインの指先まで伸びている。

その影に触れることすら恐れるように、スレインは不器用に手の爪で床を掻いた。

「もう、いいのです」

祈るように手を組み、涙を流して許しを与えるアセイラムは、まるで聖母マリアのようだと伊奈帆は思った。優しく、思いやり深く慈悲深い女王。しかし、彼女は聖母マリアではない。かつては、弱くて、少し狡い、恋に夢見て愛を謳う十六歳の少女であったはずだ。彼女は、恋も愛も知ったが、砕かれた。他ならぬその恋する人、愛する人によって。

「それでも、忘れないでください。スレイン」

アセイラムが、ふらつく足取りでスレインに近づく。しゃがみこんで、伏せたスレインの顔を覗き込んだ。スレインは一層固く目を閉じる。

「私は、私の心は、貴方に預けたのです。貴方のことを、いつまでも思っているということ、を、忘れないで」

アセイラムは、床を掻くスレインの手に、自分の手を重ねた。スレインが弾かれたように顔を上げる。間近にアセイラムの顔があつて、スレインの体が電流を浴びたように跳ねた。

「…あ、…ひめ、さま…」

アセイラムは、悲し気に顔を歪めて、それでも精一杯微笑んだ。スレインの手を両手で包む。似た色の、四つの瞳が交錯する。

「私は、不幸ではありません。不幸になることはありません。私は、ヴァースの女王なのです。人々を、幸せに導く責務があります。私の幸せは、多くの人々の幸せとともにあるのです」

だから、とアセイラムは目を閉じる。睫毛にたまり零れた涙は、スレインの指先に落ちた。「だから、貴方が私を傷つけることはできないのです。貴方は、不幸の連鎖から離れることができるのです」

そっと手を放して、アセイラムは立ち上がった。慈悲深く見える顔で、スレインと伊奈帆に微笑む。しかしそれが慈悲ではないことを、今の伊奈帆は知っている。

「だから、もうお行きなさい」

そう言ってアセイラムは、優雅に振り返り扉から出て行った。翻るスカートの裾は、薄汚れていた。

「行こう」

伊奈帆は、スレインの腕を肩に回して、立ち上がった。嗚咽を漏らす彼の肩をぐっと抱き寄せ歩き出した。

「…どうして」

揚陸城を出発したシャトルの中で、人形のように力なく座ってたスレインの声が聞こえた。

「何？」

伊奈帆は、シャトルの操縦をしながら答える。自分でもびっくりするくらい、優しい声が出た。

「どうして、殺してくれない…？」

スレインは死人のような顔で、隣に座る伊奈帆を見る。伊奈帆は、ゆっくりと一度瞬きをした。

「僕は姫様に死を許された。お前は どうして僕を殺さない？」

シャトルに乗るとき、アストロスーツに着替えた。未だに体中が汚れていたが、服を着て外部の刺激を感じるにつれ、スレインの虚ろだった瞳は輪郭を取り戻していった。それは、酷い現実を認識することでもあったけれど。

「スレイン」

伊奈帆は、自分にできる一番丁寧な発音で彼の名前を呼んだ。スレインは、じろりと伊奈帆に視線を送る。

「僕は、君に生きてほしいんだ。これは僕の勝手な希望だけだね」

軌道に乗ったことを確認して、操縦をオートにする。伊奈帆は、スレインに向き合った。

「君のためじゃない。だから、君の願いを僕は聞き入れない。僕は僕の感情で、勝手に君の傍にいる」

困惑を顔中に浮かべて、スレインは伊奈帆を見返す。人工的な光の中で、汚れた髪や顔が古い人形のように無機質に映る。しかし、彼は人形ではない。生きて、呼吸をして、心臓は動き、感情のある一人の人間だ。スレインが悲痛な顔で伊奈帆へ詰め寄る。

「何で。…僕はもう、生きている意味も価値もない人間だ」

彼の両目に暗い影が落ち、ひゅっと喉がなった。

「そんなこと、君が決めることじゃない。僕にとって、君の生存は大いに意味があるんだ」

伊奈帆が、メインモニターに目をやる。スレインもそれを追って眺める。そこには、青い星

が映っていた。

「君がいなくなったら。…僕が、一人ぼっちになってしまおうだろ」

その声音にあったのは寂しさだったように思う。スレインは、伊奈帆がこんな風に話すのを聞くのは初めてだった。

「英雄なんて都合のいいことを言ってるけれど、みんな怖いんだ。人殺しが」

星間戦争の立役者。英雄。軍神。生ける伝説となった隻眼の軍人は、まだ十六歳の人間だ。

「居場所がないのは、僕も同じだ。だから君は僕と一緒にいてよ」

家族も、友だちも、仲間も、いる。でも、孤独だ。それは、伊奈帆の背負ったものを理解することができず、共有することができないからだ。

たった一人。たった一人だけだ。伊奈帆と同じ大きさの荷物を抱え、同じ景色を見ている人間は。この隣に座る、痩せぎすの、顔色の悪い青年だけなのだ。

「…馬鹿じゃないのか」

そのたった一人は、呆れたように呟いた。伊奈帆は、彼の存在に安らぎを感じて微笑んだ。

「そうだね。馬鹿で、寂しがりの子どもなんだ。傍にいてよ」

伊奈帆の言葉に、スレインはそっぽを向いて押し黙った。

「…考えておく」

しばらくして聞こえてきた掠れ声に、伊奈帆は頷いた。

「うん、いい返事だ」

青い海が、雲の切れ間から覗く。

彼と一緒に、どこにだって行ける。眼下に横切る渡り鳥の群れを眺め、伊奈帆は操縦を切り替えた。いつかこうやって、スレインと一緒に海を、空を、川を山を飛んで行く日が来るといい。まだしばらくは、あの監獄が彼の傷を癒すというならそこにしよう。

操縦桿に添えられた指先が、とんとん、と機嫌よくリズムを刻んだ。

Scent of rain

(2016-09-20)

訳) 雨のにおい

二〇一七年、七月。

「今日は雨か」

スレインは言った。面会室に足を踏み入れた伊奈帆の前髪からは、ぽたぽたと雫が垂れていた。肩の水滴をはらうが、すでに軍服の色が変わっているから無駄だろう。

「さっき降られた。最近雨ばかりだ」

梅雨だからね。伊奈帆がそう言って腰かける。

「…わざわざ、雨の日に来なくても」

「そういうの、何て言うか知ってる？」

減らず口、って言うんだ。余計な一言、ともね。その言葉に、スレインが唇を尖らせてそっぽを向いた。

「…風邪を、ひくといけないだろ」

「そういうの、素直じゃないって言うよね」

でも、ありがとう。伊奈帆は照れたように言って、軍服の胸ポケットから折りたたまれた一

枚の紙を取り出した。

「これ見て」

テーブルの上で開く。スレインはそれをのぞき込むが、詳しい内容が分からない。漢字は難しい。

「…何て書いてある？」

「一時外出許可証。雨だけど、せっかく通ったから、出かけよう」

意外な申し出に、スレインは少し心配そうに声を潜めた。

「僕を外に出していいのか」

「一時間だけでも。散歩でもしよう」

伊奈帆は立ち上がり、笑った。スレインは珍しいものでも見るようにその顔を見て、のそりと立ち上がった。

透明のビニール傘に、雨粒が当たりポツポツと音を立てる。道路は水に覆われ、靴は中までびしゃびしゃだ。二人の肩や腕はしとどに濡れていた。

伊奈帆は横目でスレインを見る。ずっと黙ったままだ。スレインは、遠くを見ているような顔つきだった。ビニール傘の柄を握る手は、濡れていた。白く光るその手を見る。

「雨のにおいがする」

スレインが、目を閉じ息を吸い込んで言った。口元が微笑んで、少年のような表情に見えた。

「雨のにおい？」

「水と、草と、生き物と、海のおいがする。地球のにおいだ」

スレインが傘を持っていない手を傘の外にかざす。手の平から、細い腕の血管を辿る雨。伊奈帆は、尖った肘からぼたぼたと落ちる水滴を数える。

「君は、雨が好きなんだな」

「そうなのかな」

「嬉しそうに見える。良かった」

伊奈帆が言うと、スレインは目の周りと耳を赤くして言った。

「界塚、…その、ありがとう」

「僕も楽しいよ」

雨粒が踊る道を歩いていく。足も体も、濡れていないところがないくらい濡れていた。

「もう、差していても仕方ないな」

伊奈帆のビニール傘が空に飛んだ。

「ほら、君も」

「へ？」

そしてもう一つ。

二つの透明な傘が、石突きを円の中心にして道路の上でぐるりと回る。

「…びしょびしょだ」

「だって、すごい雨だし」

だからといって、傘を投げるか。言い返すために口を開いたスレインは、伊奈帆の顔を見て思わず笑った。自分で傘を放り投げたくせに、頭から雨を受けて顔を顰めている。雨が目に入って鬱陶しそうだ。

「君、実は馬鹿だろう」

「失礼だな。でも、時々言われる」

「そうだろ」

スレインは、白い歯を見せて子どもっぽく笑った。伊奈帆は、濡れた金の髪に手を伸ばした。

「髪が光ってる」

「…そうかな」

髪に触れる。細い金色が束を作り、濡れて艶々と光っていた。少し伸びた髪が首筋に張り付き、真白い首で喉仏が小さく上下した。

「君が、光っている」

濡れた唇が知らず重なった。

彼の唇は少し冷たくて、強張っていた。伊奈帆の頬にこわごわと指が触れる。濡れた爪からも、雨のにおいがした。

「…なんで？」

スレインの声は掠れていた。間近で見た碧の瞳は澄んで、雨に濡れていた。

「…キスするのに、理由がいる？」

「…本当に、馬鹿だなあ」

伊奈帆の返答に、スレインは可笑しくて仕方がない、という風に笑った。もう一度、臉を開いて唇を重ねる。柔らかくて、吐く息は浮かされたように甘い。隙間から舌を入れると、熱い舌が絡みついた。

背中に腕を回す。服が張り付く体は、ごつごつと骨の感触。細い体を抱きしめる。

雨のにおいがした。

君のにおいがした。

生きているにおいが、した。

前兆はない。

何か、きっかけがあったわけでもない。

彼にとって、何の変哲もない日常の中、それは起こった。

ある朝。目覚めた彼は自身の変化には全く無自覚であったが、それまでと決定的に違っていた。ある一つの事柄が、彼の記憶から、経験から、体感から、記憶から思い出から失われていた。いや、失われたというよりは、初めからなかったことのように自然に、傷口が塞がった後の瘡蓋のように剥がれ落ちた。だから、気付かなかったのだ。

そのことで起こった変化は他人にはほとんど分からないほどで、初めて彼の様子に違和感を覚えたのは、やはり彼の姉だった。しかし彼女は、それを指摘することはなかった。これは弟にとってデリケートな問題であるだろうし、彼女の立場からは何も言うことはできなかった。弟はいつも意外な行動で彼女を驚かせたが、時間が経つと彼の行動は彼女にとって最善に思えたし、きっと今回もその一環だろうと思われたのだ。

そうして、界塚伊奈帆があれば通い詰めていた極秘施設へ行かなくなってから、一年近くの日日が過ぎた。

二〇一八年、四月。

「界塚少尉」

その日、連合本部に呼び出しを受けた界塚伊奈帆は、目の前の上官に名前を呼ばれ敬礼した。

「ハッキネン中将。ご無沙汰しています」

ハッキネンはテーブルに肘を寄せ、伊奈帆に笑いかけた。伊奈帆は、この上官の笑い方が好きではない。

「調子はどうかね」

「特に変わりありません」

「そうか。早速だが、本題に入ろう。例の囚人についてだが」

伊奈帆は、片眉を吊り上げた。

囚人とは、誰のことだろうか？

「やはり、死んでもらうことになった。利用価値がないわけではないが、危険を伴う。当初から予定されていたがね。一応、未成年に死刑は惨いという声が出たので、こんなに時間が掛かってしまったわけだ。あれは大量殺人の戦犯なのに、おかしいことだ」

ハッキネンは、組んだ両手に顎を乗せた。

「フェンリルはグレイプニルに拘束されるが、ラグナロクでオーディンを飲み込む。オーディンがフェンリルの主と成り得るかと思ったが。やはり無理があつたようだな」

北欧神話だ。伊奈帆の登場するスレイプニルも北欧神話からきていて、軍人の中には北欧神話に詳しいものが多い。ハッキネンもその一人。

「フェンリルは災厄なのだ。英雄を失うわけにはいかない」

「もう少し分かりやすく、話していただけますか」

先ほどから、自分に関わりのあることとは思えない回りくどい話が続く。

誰を、何に、例えているのだろうか？

「あれは頭のいい男だ。だれか、手綱を握れればと思ったのだがね」

そこで、睨みつけるように伊奈帆を見た。口元は薄く笑っている。

「少尉は、そうではないようだ。そして、君以外には、あのけものは懐かんだろう」

「…」

「死刑執行は、三か月後」

伊奈帆の顔を見て、ハッキネンが咳払いをした。

「君には、知る権利があると思ってね。界塚伊奈帆少尉」

「ユキ姉」

「なお君。どうしたの？」

足早に帰路につきながら、伊奈帆はスマートフォンで界塚ユキに電話をした。息を切らした伊奈帆の声に、ユキが訝し気に問いかける。

「最近、僕に変わったことはなかった？」

「は？」

「いつもと様子が違うことはなかった？何かを忘れたり」

「なお君、どうしたの。何かあったの？」

弟に只ならぬことが起こっていると察知して、ユキは気色ばんだ。

「ハッキネン中将に会った。囚人の話をした。僕には知る権利があると言っていた」
通話口の向こうで、ユキが息を呑むのが聞こえた。

「でも、僕は何の事だか、わからなくて。戦犯だと言っていた。誰のこと」

沈黙。伊奈帆は、背中が騒めく中、ユキの声を聞いた。

「なお君、それって……」

「もう、来ないかと思った」

蛍光灯が切れているわけでもないのに、薄暗い印象をもたらす面会室。界塚伊奈帆の目の前に座る囚人は言った。

伊奈帆は食い入るようにその顔を見る。北欧系の、綺麗な顔の青年だ。同じくらいの年頃に見える。話によると、現在は二十歳のはずだ。伊奈帆より一歳年上の計算になる。

しかし、やはり見覚えがない、ように思う。一度見たら、忘れられないような人物だ。淡い金色の髪と不思議な色の瞳は、表情も相まって儂げな印象だ。

「…ごめん」

しばらくして、謝罪する伊奈帆に囚人は諦めたような顔で笑った。

「別にいい」

伊奈帆は、目の前の青年に問いかける。

「君は一体、何者だ？」

「は？」

間拔けな声を出して、青年が碧の目を丸くする。年相応の表情に、伊奈帆は不思議な感触を受ける。

「分からないんだ。僕は以前、ここに来ていたんだろう？でも、それが分からない。覚えていないというより、そんなことがあったと知らないし、あったとも思えない。…君は、誰なんだろうか」

「…そうか」

青年が俯く。そのまま、ぼそぼそと小さな声で言った。

「知らなくていい。僕と君は、関係ない。何も。…何もない」

「それは、嘘だろうか？」

青年は顔を上げた。引き攣った笑いがあつた。目は強い光を宿している。

「嘘か、真実か…。君が決めるんだ」

「何を」

「未来を」

そう言つて青年は立ち上がった。手錠がカシャリと音を立てる。青白い手には関節と血管が浮き出て、纏わりついた手錠が大きく冷たく見えた。

二〇一八年、五月。

「久しぶりだな。お前を乗せてここへ来るの」

「ありがとう、カーム」

小型の軍用車の助手席に座る伊奈帆は、運転席でハンドルを握る友人に礼を言う。

「あいつ、処刑されるんだってな」

カームの声はいつになく低い。

「そうみたいだ」

「今更だけど、すっきりしないな。お前が命懸けで助けたのに」

「それ…」

窓の外には、海が見える。海猫が飛んでいた。この光景は、最近慣れ親しんだもの。…だと、思う。

「僕は、どうしてそれを知らないんだろう」

伊奈帆の言葉に、カームが眉を下げた。自分を案じてくれる友人の存在を、伊奈帆は掛け替えのないものと思う。

「記憶喪失ってやつだろう。耶賀頼先生が言ってた」

そんな感じはしないのだけれど。周囲はみんなそう言う。

…彼以外は。

「僕は、彼をどうしたいんだろうか」

「伊奈帆……」

カームがしばらく考えてから、はああと大きく息を吐いた。

「俺は馬鹿だからさ、お前の考えてることは分かんないことばかりだ。どうしたいかなんて、伊奈帆しか分かんないよ」

でも、とカームは続けた。

「でも、鈍い俺から見ても、お前はあいつに相当入れ込んだってことは分かるよ」

「入れ込んだ？」

「何度も面会して、いろいろ調べて。あいつに関わろうとしていた」

そんなことが、あったのか。自分のことなのに、人事のように聞こえる。

「前にさ、お姫様と船に乗っていた時も、入れ込んでるってユキさん言ってたけど」

カームが大きくハンドルを切った。

「俺にはお姫様の時より、必死に見えたけどな」

無機質な面会室で再び向かい合う。伊奈帆は正面の青年について、思いを巡らせる。

話によると、この青年——スレイン・ザーツバルム・トロイヤード——は先の惑星間戦争の首謀者かつ戦犯であり、すでに処刑されたことになっている、らしい。しかし、様々な理由からこの施設で極秘裏に生かされていた。それもあと三か月で終了し、正式に処刑されることに決まったそう。

そして、彼を打ち負かし、捉えたのが当時スレイプニールを駆り軍神と呼ばれた地球連合軍少尉界塚伊奈帆だった。

全く心当たりがない。

わからない。自分のこととは思えない。どうして、そんな大切なことがわからないのだろう。そして、そんな相手に何回も会いに来るなんて。

自分は、どういふつもりだろう。

「僕は、ここで何をしていたんだろう」

スレインが切れ長の瞼の中、眼球をぐるりと巡らした。伊奈帆はその真面目そうな表情を見

て、この人も、そんな大それたことをするような人には見えないが、という感想を持った。大人しくて、頭のいい青年だ。数度の面会で、伊奈帆に対する気遣いも感じられる。時折見せる無防備な表情が、少し斜に構えた態度を不自然に見せていた。

多分、元来は優しい人なんだろう。

「…チェスを」

「チェス？」

「いつも、君が白で…。君は強かった」

「やってみよう」

頭の中に盤面を描く。ボードも駒も使わない、ブラインドフォールド・チェス。

「F6ナイト」

「G5ビショップ」

「E4ナイト」

「E4ポーン」

そこでスレインは眉間にしわを寄せ、明らかにがっかりした顔をした。分かりやすい表情の

変化に伊奈帆は驚く。

「…どうしたの」

「別に」

スレインは口をへの字に曲げて俯き、目を固く閉じた。長い睫毛が落とす影が、震えているように見え、泣いているのか、と思った。

「…ポーンか」

開いたスレインの目は乾いていた。その視線を追って、伊奈帆は、白のポーンを見る。蛍光灯に照らされて、少し黄味がかって見える。

「ビショップになら、取られても良かったんだけどな」

「何の話？」

「独り言」

スレインは目を細めて笑った。笑っているのに、こんなに悲しそうな顔になるのはどうしてだろう。

二〇一八年、七月。

「…雨か」

「梅雨だからね」

面会室を開ける伊奈帆が前髪を濡らしていたので、スレインの体がびくりと強張った。伊奈帆がおや、という顔をして椅子に腰かける。スレインは、目を細めて伊奈帆を見た。

「雨のにおいがする」

「そうかな」

湿った空気で、この部屋もいつもより薄暗く感じる。スレインが、踵で床を軽く蹴って俯いた。

「…いつか、君と雨の中を歩いたよ」

「へえ」

伊奈帆がこの面会室を訪れ、三か月になった。正しくは、一年前に途絶えた面会に再び通い始めて三か月目、ということになる。

彼の処刑は六日後だ。

「どこに行ったの？」

「さあ…」

「…」

会話が続かない。この三か月で分かったことは、スレインの話は断片的で脈絡がなくて、抽象的でとにかく分かりづらいこと。伊奈帆も会話が達者な方ではないので、よく会話の袋小路に陥る。

これまでは、聞き手に理解してもらうことを放棄している話し方だったが、今日は少し違いうように伊奈帆を感じた。

「…君がそうなる前に、最後に会ったのが、その時だった」

スレインの碧の目は、小刻みに動いている。懸命に言葉を探しているように見えて、伊奈帆はテーブルに身を乗り出して両手の指を組んだ。

「君のことを…」

そこで、スレインが真正面から伊奈帆を見た。揺れる瞳が綺麗だった。

「君が来ない間、その時のことを思い出していた。…だから、雨のにおいは君のにおいにするんだ」

口角が上がり、目が細められる。

「今日は、君が戻ってきたみたいだ」

いい笑顔だった。ほっとしたように見えたのは、きっと言いたいことを言葉にできたからだろう。

一体、この青年と自分はどういう関係だったのだろうか。

「歩いて、何をしていたの？」

スレインは口を開きかけて、閉じた。上目遣いで、悪戯っぽく笑った。

「…内緒だ」

伊奈帆は立ち上がった。

「今から、散歩に行こう」

「嫌だ」

「何で」

「思い出すから」

「僕は、思い出したいんだ」

そう言っ、伊奈帆はスレインの手首を掴んだ。手錠がカシカシと音を立てる。細い手首を引っ張る。触れた部分は、力を込めると血液の流れる感触がした。

透明なビニール傘を差して歩くが、ほとんど意味を為さなかった。雨粒が風に煽られ、体中の水玉模様が、すぐ雨粒のグラデーションに塗り潰される。

「ずぶ濡れだ」

「そうだな」

伊奈帆の言葉に、スレインが相槌を打つ。六日後には、この人は死ぬんだと思うと、伊奈帆は涙が出そうになった。

雨が降っていて、良かった。

「…この道を歩いた」

スレインが呟く。雨の音は煩いがその声は、はっきりと聞こえた。

「今日みたいに、ずぶ濡れになって」

スレインが、傘を放った。傘はふわりと地面に落ち、止まりかけの駒のように回って止まった。逆さになった傘の内側に雨水が溜まっていく。

「雨のおいがする。水の中に、草と、木と、海と。生き物と…、君のおいがする」

そう言うスレインの白い腕が。首が。顔が。淡い金の髪が。雨に濡れて光る。降りしきる雨が作り出す白い靄の中で、霞んで消えていくような色だ。

「君は、」

伊奈帆はスレインに向き直った。二歩分の距離で、視線が交わる。伊奈帆は聞いた。

「君は、僕が好きなの？」

まん丸い目を向けて、これ以上ないくらい驚いた顔のスレインは、その後、笑った。今度はそれに驚いて、伊奈帆が目を見開く。声を上げて笑い続けるスレインに、伊奈帆はむっとして言う。

「そんなにおかしい？」

「ははは、は…！ああ、すまない。そうか、そうだ。知らなかった」

細い体を折り曲げて笑っていたスレインは、笑うのをやめて伊奈帆に一步、二歩、近づいた。

「そうだ。…僕は、君が好きなんだ」

そう言ってスレインは、伊奈帆に口付けた。ビニール傘の中、触れた唇は冷たく濡れていて、髪から滴る水滴が二人の顔を濡らした。

「なんで？」

伊奈帆が聞いて、スレインが笑う。

「…キスするのに、理由がいる？」

少し傷ついたような、くしゃりとした笑い方に伊奈帆の鼓動が速くなる。

「…なんてな。前に君が言ったんだよ」

「僕が？」

スレインが、今度は一步、二歩とゆっくり後ずさる。ビニール傘の円周から出たスレインが、白い雨に包まれる。

「好きだよ、伊奈帆」

それは、月のような笑顔だ。伊奈帆は、傘を取り落として手を伸ばす。届かない。

「そして、君も僕を好きだった。多分ね」

そう言って彼は消えた。

スレイン・ザーツバルム・トロイヤードはいなくなった。

この道を歩くと、君のことを思い出す。

スレイン・ザーツバルム・トロイヤードが消えてから、三年が経った。伊奈帆は時々、雨の中に歩いたこの道を一人で歩く。晴れの日。雨の日。雪の日。しかしどんな天気の中で歩いても、思い出すのは雨の中に浮かぶ月のような笑顔だ。

「君は、誰だったんだろうか」

今でも、伊奈帆はスレインのことが分らない。過去の記憶は失われたままだ。スレインの記憶も思い出も、雨の中で消えてしまう間の三か月しかない。

面会室に座る、青い服を着た美しい青年。そして、雨の中消えた月のような笑顔。

あの雨の中、スレインを見失ってから随分長いこと伊奈帆は歩いた。彼を探していた気もあるし、他のものを探していた気もある。どのくらい経ったろうか。施設へ戻り報告すると、すぐに軍の上層部がやってきた。伊奈帆はしばらくの期間、あの面会室で取り調べを受けた。囚人の脱獄を手引きしたとして、禁固刑が言い渡された。狭い独房の中、ほんの三か月だが彼がいたその部屋で過ごした。

スレインの痕跡は、何もなかった。

その後は軍を除籍され、大学に進学した。姉のユキとは別々に住み、一人暮らしをしている。カームが何かにつけて遊びに来る。韻子や、ニーナ、ライエとも時々会う。テレビでは、地球を飛び回るアセイラム女王の姿を見る。画面の中で彼女に寄り添う夫の姿も見ると。大学へ行って、勉強して、普通の生活を送る。

その日常の中で、時々、伊奈帆は一人で、この道を歩く。

「僕は、君を好きだったんだろうか。今の僕は、君を好きなんだろうか」

あの雨の中、口付けをした。

君の髪も。指も。肌も。唇も。吐く息も。

雨のおいがした。

君のおいがした。

それが忘れられなくて、何度もこの道を歩く。隣には、君はいない。

忘れてしまった君と、忘れられない君を探して、僕は今日も一人でこの道を歩く。

(2017-08-15)

スレイン・トロイヤードのことを
教えてください

※P.157 掲載文に、対話相手の台詞を加筆しています。

スレイン・トロイヤードのことを教えてください。

一人目。

「ごめんなさい、私に話せることはないわ
母親だと伺いました。

「そうだけど…だって、何も知らないのよ」

幼い頃に生き別れたと。それから、会っていない？

「ええ、そう。…へえ。これから、色んな人に聞きに行くのね」
はい。最初にここに来ました。

「私が一人目？」

次は、火星の騎士に会いに行きます。それでは。

「でも貴方、調べてどうするの？」

…。

「だって、もう死んだのよ」

そうですね。

「今更、死んだ人のことを聞いて回って、どうするの？」

確かめたいことがあるので。

「待って。…何かわかったら、また来てくださらない？」

二人目、マズールカ。

「結局、私は直接会うことはありませんでした」

そうですか。その時の状況を、詳しく話してもらえますか。

「貴方が私に預けたペンダントは、侍女に託けました。ちゃんと女王のところへ届いたよう
で安心しましたよ」

どこにいましたか。

「アセイラム女王は、月面基地ではなく揚陸城に捕らえられていたようですね。月面基地に
いたのは、偽物ですよ」

偽物だと、分かりましたか。

「地球の話をしました。すると、下賤なものたちの住まう星と仰るので。これは違う。そう思
いました」

なるほど。その時、スレイン・トロイヤードはどこに？

「トロイヤード卿は、ちょうど本物のアセイラム姫のところへ行っていたようです。必要以上
に月面基地と揚陸城を行き来していた。伯爵が不在だと確認し、揚陸城に仕掛けました」

エデルリッツさんから、アセイラム姫にペンダントは手渡され、あなたが協力者であること
が伝わったわけですね。

「その後どういう経緯で月面基地へお姿を移されたのかは分かりませんが、クランカイン伯爵

と共に我が揚陸城へ。そこから宣言が発せられたわけですが」

あなたは、スレイン・トロイヤードをどう思いますか。

「トロイヤード卿ですか」

ええ。

「狡猾な裏切り者、でしょうか」

…。

「奴は父であるザーツバルム卿を殺害した。アセイラム姫を幽閉し、偽物の姫を祭り上げ、地位と財産を得た。反対するものは潰す。…火星騎士の中には、身に覚えのない罪状で捕らえられた者も多い」

…。

「死んだ人間を悪く言うのは本意ではないが、女王陛下の理想の妨げとなる存在だった」

そうですか。ありがとう。

三人目、バルークルス。

「ほう、面白い。良かろう。退屈凌ぎに付き合おうか」
感謝します。

「トロイヤード卿は、真の騎士であろうよ」

真の騎士、というと？

「私はトロイヤード卿とマリルシャン卿の決闘の立会人だ。今思い返しても、見事な戦いだっ
た」

月面基地付近での、タルシスとハーシエルの決闘ですね。

「知っているのか」

地上から見えていました。

「私はマリルシャン卿とは昔馴染みでな。ふ、諸侯の中には、どうしてマリルシャン卿を殺したトロイヤード卿の傘下に入るか、と嫌味を言う者もいたが…」

…。

「決闘は、美しかったのだ。私は、ずっと騎士として、あのようになりたいと願っていた」

どういうことですか。

「我ら軌道騎士はヘヴンスフォールからの十五年間、揚陸城で過ごしてきた。戦争を知らず、戦闘を知らず、騎士の意味も知らず。騎士として全力を出して戦うなど、考えたこともなかった。地球軍を相手にする戦いとは、一方的に搾取するものであったからな。しかしその決闘に私は血が湧き、肉が踊った。命を懸けて戦う。騎士の姿に憧れた」

火星カタフラクト同士が戦うことは、まずありませんからね。

「決闘は、カタフラクトの特性から言ってトロイヤード卿にとっては圧倒的不利な状況だった。死を覚悟しながらであつたらうな。しかし、姫君と臣下は心からトロイヤード卿の勝利を信じ、決闘を見守った。月面基地にいた多くの騎士がその姿に羨望を抱いた。いや、騎士だけではないか。下級兵、整備士、使用人、その戦闘を見ていた全ての火星人が胸を躍らせた。見事決闘で勝利し、トロイヤード卿はマリルシャン卿の財産と姫君を戴いた」

その結果が、スレイン・トロイヤードを夫に迎え、新王朝を築くというアセイラム姫の宣言

だったわけですね。

「どうやらその姫君は偽物だったらしいが、関係ない。彼の姫はトロイヤード卿を愛しておられたのだ。愛する人を信じ支える。美しい話だ。姫君は、月面基地から離脱するときも最後までトロイヤード卿の名前を呼んでおられたよ。私は行かぬ、傍にいます」と

そうですか。

「そなた、何か知らぬか」

というと？

「私は、その姫の名前も知らぬのだ。健気であった。護衛の少ない旅路で、無事だといいたが」

四人目、ステイギス隊。名もなき兵士。

「この外道」

…。

「私はお前たち地球人を許さない」

…。

「処刑だと。騎士たるもの、戦闘で生死を分けよ。負けて生け捕り、処刑とは騎士の誇りを踏みにじる行為だ」

決闘ではない。戦争です。政治的な駆け引きは当然だ。

「その挙句、アセイラム姫殿下暗殺の首謀者とは…。お前たちの目は節穴だ」

禍根を残さない最善の選択です。地球にとっても、火星にとっても。

「黙れ！あのお方がアセイラム様を…殺すなど、ありえない」

どういうことですか。

「私のような雑兵でも知っている。トロイヤード様はアセイラム様を心から愛しておられたのだぞ」

それは、配下の軍人は皆知っていること？

「…あの方が、傷ついたザーツバルム様とアセイラム様のお命を救われたのだ。地球人であるにも拘らず、あの方はザーツバルム様の手足として必死で我々のため力を尽くしてください」
た。他の伯爵達にどのような仕打ちを受けようともな

仕打ち？

「火星で地球人がどのように思われているか知らないのか。謂れない中傷、暴力。…あの方がこれまでどのような人生を歩んでこられたか。我々最下層の人間も、差別を受けてきた。火星人の中でさえも差別は明確にあり、貧しい火星の人心は弱き者へと流れる。たった一人の地球人であられたあの方の境遇は、察して余りある」

なるほど。

「私は第三階層の生まれ。本来なら、カタフラクトになど触れることすら許されぬ身の上。火星では、生まれた瞬間に人生が決まる。夢を見ることさえ許されない。それを、ザーツバルム様とトロイヤード様は変えようとしてくださった。私たちを輝かしい夢に住まわせてくださった」

夢…。

「地球人にはわかるまい。火星人でありながら火星人に差別される私たちが、地球人であるトロイヤード様についていこうとした気持など」

…。

「トロイヤード様は、我々の気持ちを汲んでくださったのだ」

代弁者ですか。

「持たざる者が世界を変える瞬間を待ち焦がれた。我が身だけでいく。それが私たちの誇りなのだ」

しかしスレイン・トロイヤードは月面基地を放棄し、貴方たちに投降を命じました。懸命な選択だが、貴方達は家を放り出された幼子と同義ではありませんか。

「ステイギスは特攻機。出撃したが最後だ。目の前の敵を倒す。さもなくば落とされる。前線の指示は届かない。でもあの方は…月面基地から離脱せよと、命を無駄にするなと…私たちのような下級兵の命まで案じてくださった。自らの命で戦闘を終わらせようと為された。それなのに…」

…。

「生け捕りにして過ぎたる罪状で処刑とは、恥を知れ」

自殺は、愚かな行為だ。だから僕は迎えに行った。

「…そうか、お前がオレンジ色」

界塚伊奈帆です。それじゃあ。ありがとう。

「待て！…一つ教えてほしい」

何？

「ハークライト様は、どうなったのだろうか」

ハークライト。ハーシエルのパイロットですね。

「トロイヤード様の右腕であられた方だ。私達の誇りだ。ハークライト様は、生きておられるのだろうか」

五人目、エデルリッツ。

「界塚伊奈帆さん。お久しぶりです」
久しぶり。

「あの、地球では、いろいろと失礼なことを申し上げました。女王陛下を何度も救っていただ
き、本当に、あの、ありがとうございます」
いえ。戦争でしたから。それより。

「スレイン様について…ですか」

はい。

「スレイン様は、お亡くなりになったのでは？」
はい。

「では、私から申し上げることは何もありますか」
どうして？

「これ以上、スレイン様の思いを踏みにじるようなことは……できません」

そうですか。では、別のことを教えてください。ノヴォスタリスクのことです。

「ノヴォスタリスク？」

あの後、アセイラム姫とザーツバルム伯爵が姿を消した。貴方はどうしたのですか。

「私は、火星兵に捕らえられました。そして、月面基地へ連れて行かれました」

命が危なかったのではありませんか。ザーツバルム伯爵はアセイラム姫暗殺の真の首謀者。

あなたは姫に忠実な侍女でしたから。

「スレイン様が、助けてくださいました」

なるほど。スレイン・トロイヤードが、ザーツバルム伯爵とアセイラム姫を連れて行ったの

ですね。

「……はい。私は、姫様のお世話をするようになりました」

どちらの？

「ええと……アセイラム姫様です」

もう一人は？月のプリンセス。

「知っているんですか」

僕は、ずっと前から偽物だと知っています。アセイラム姫は、何処にいたんですか。

「…アセイラム姫様は瀕死の重傷で、アイソレーションタンクでお眠りになっていました。私とスレイン様は、月で姫様のお目覚めをずっとお待ちしていました」

どのくらい？

「えっと、二年近くです」

そうだったのか。じゃあ、僕が月で会ったのは、目覚めて間もない頃だったんですね。

「スレイン様は、姫様のお命を守るために戦い続けました。…だって、姫様のお目覚めを待ち望んでいるのは、もうスレイン様と私だけでしたから。ザーツバルム様とレムリナ様にとっては、姫様は…」

レムリナ？

「あつ、その、ええと…」

偽物の姫だね。

「…知ってるんですね。レムリナ様は、もう一人の姫様です」

どんな人？

「レムリナ様は、アセイラム姫の身代わりを務めるため、スレイン様から地球の知識を学ばれていました。日に日にレムリナ様がスレイン様に惹かれていくのを、わたしは一番近くで見えていました。でも、スレイン様はずっとアセイラム姫様のことを想っておいででした」

結婚すると言っていたね。

「はい。そのご婚約について、私はスレイン様に聞いたのです」

彼は何て？

「これからすることを軽蔑されようと、罵られようと、別にかまわないと思っている、と仰いました」

そう。

「：スレイン様は、姫様がお目覚めになったときに自分はどう見えるだろう、とこぼされていきました。いろんなことが、変わってしまっていましたから」

そんなことを言うんだね。

「ええ。私には、そういうことを話してくださいました」

アセイラム姫が眠っている間、どんなことを話したの？

「地球のことを、いろいろと教えていただきました。鳥のことも」

鳥。エデルリッツさんは、地球でも見たね。

「あの時は、鳥なんてなんとも思っていないませんでしたけど。スレイン様にお話を聞いてからは、また見たいと思っていたのです」

今日は見られて、良かったね。

「はい。…飛べない鳥もいるのですね？」

ええ。ペンギンとか、ダチョウとか。ニワトリも。

「飛べない鳥は、飛べなくても平気。飛べるのに閉じ込められている方が可哀想、と仰っていました」

へえ。

「…それは誰のことだったのかな、と思います」

うん。

「スレイン様は、最初から何も変わっていません。ずっとお優しい方で、ずっとずっと、アセ

イラム姫様の幸せだけを考えていらっしやいました。姫様が地球に降りる時も、お父様の形見のペンダントをお守りだと言って手渡されていました」

あのペンダント、そうだったんだ。

「…姫様がお目覚めになった時、私達は泣きました。姫様は、ずっとスレイン様の名前を呼び続けられて…スレイン様は、姫様のお目覚めを心から喜び、姫様のために涙を流していらっしやいました」

そうだったの。

「お優しい方です。ご自身の全てを投げ打って、姫様のことを助けてくださった」

六人目、レムリナ・ヴァース・エンヴァース。

「私が誰だか知っているの」

はい。偽物のアセイラム姫。月のプリンセス。スレイン・ザーツバルム・トロイヤードの婚約者ですね。

「その通り。あなたは何者？」

界塚伊奈帆です。

「そう。あなたが。…一つお願いがあるのだけれど」

何ですか。

「その頬を打たせていただけないかしら」

…どうぞ。

「…変わった人ね」

結構痛い。本気ですね。

「いいわ。全部教えてあげる」

感謝します。

「私は、お姉さまの幸せになんて興味ないもの。何を話しても構わないわ」
スレイン・トロイヤードのことを教えてください。

「スレインは、私を置いて行ってしまった」

…。

「どこにも行かない。一緒にいる。私がどんなに必死になっても、縋りついてても、聞いてくれなかった」

…。

「…嘘を吐くし、隠し事はするし、大事な時には傍にいないし。本当にひどい人。一緒に食事をしてもらえない」

酷いですね。

「でも、一番辛いのはそんなことじゃないの」

それは？

「あの人が私を生かして、一人で死んでしまったことよ」

…一緒に死にたかった？

「残酷な人」

…。

「ずっと、地球に来てみたかった。あの人の故郷」

…叶いましたね。

「スレインが話してくれる地球は綺麗で暖かくて、そこにはきっと、幸せがあると思いました」

うん。

「でも、気づいたの」

…。

「確かに綺麗な星です。青い空。青い海。草木や生き物。初めて見るものばかり。でも、そうじゃないの。違うの」

違う？

「スレインと一緒に、地球に来たかった。空を見ても、海を見ても、思い出すのはあの人の優しい声」

…。

「スレインがいない地球は、月より寂しいわ」

…。

「…みんな簡単に騙されて、馬鹿みたい。スレインがお姉さまを暗殺だなんて、想像もできないわ」

政治的判断です。仕方がない。真実は、関係ない。

「お姉さまを殺そうとしたのはザーツバルム。そしてこの私。それが真実よ」

貴方が？

「スレインはいつだって、お姉さまのことばかり。お姉さまは眠っていないながら、いつまでもあの人の心を捉えて放してくれない。私が持っていないものを全て持っていて、美しく心優しく、私にだって優しい。…大嫌い。目覚めたお姉さまに、私は全て話したの。お姉さまは私に化けて、スレインと話したわ」

…それで？

「…お姉さまはスレインに銃口を向けた。結局、スレインのことを何も見ていなかったのね」
撃つ気はなかっただろうけど、…同じことか。

「本当に可哀想な人。世界で一番愛してくれる人を手放すなんて」

選択した、ということでしょう。自分の幸せではなく、和平を選択した。

「そうね。それが不幸の始まり。お姉さまもスレインも、自分の幸せなんて、考えないのよ」
…。

「それが、大切に想う人を不幸にするというのに。私はスレインに幸せになってほしかった。時間が掛かってもいい、私のことを愛してほしかった。お姉さまのことを忘れなくても良かった…ただ傍にいただけで、私は幸福だったのに」

…。

「傍にいることも、共に死ぬことも許してくれなかった。月にも、もう帰れない。地球には、スレインはいない」

七人目、ハークライト。

界塚伊奈帆です。

「界塚伊奈帆……。オレンジ色」

スレイン・トロイヤードのことを教えてください。

「何も話すことはない。去れ」

ちょっと、近くへ。……彼は今、日本にいます。

「何？」

……彼は生きています。自由の身ではありませんが。

「生きて……」

しっ！内緒ですよ。

「……分かりました。いいでしょう。その代わり、後で頼みがあります」

僕にできることなら。

「……順を追って話しましょう。私は第三階層の生まれです。身分が低く、両親は大変な苦勞をして火星騎士の元へ私を送り出してくれました。その火星騎士がザーツバルム様です」

ええ。

「ザーツバルム様は身分に関係なく、実力で部下を重用します。また、火星の身分制度を変えようと、我々のような最下層の人間を部下に取り立てていた。富を独占しているのは一部。貧困層を味方につければ、そもその数が違う。クーデターなど軽々と成功する。地球侵略は、火星統一の後の市民の富の分配の為でもありました」

そのために、アセイラム暗殺を計画し、戦争を引き起こした。

「スレイン様は、ザーツバルム様とアセイラム様を連れ、月面基地にやって来ました。私たち直近の配下は、姫暗殺が失敗に終わったことを知りました。スレイン様はザーツバルム様の配下となり、私はスレイン様の部下となりました」

どう思ったの？

「スレイン様は地球人でありながら、卓越したカタフラクトの操縦技術でみるみる頭角を表し、騎士として取り立てられました。私は歓喜しました。地球人のあなたに、それがなぜだか分かりますか」

理由を、聞きたいですね。

「地球人が火星騎士になることができる。それは、実力さえあればザーツバルム配下であれば

誰でも騎士になる可能性を示した、ということです。これがどれほど大きな希望か、分かりますか」

火星の身分制度は重いそうですね。

「月面基地には、昔からステイギスというカタフラクトがありました。これはもともと、戦用の機体ではありません。月面基地建设の際に使用された作業用カタフラクトです。ずっと放置されていたのです。それに、ザーツバルム様は目を付けた。アルドノア因子の受け渡しは必要ない、一度起動したら誰でも搭乗できる」

死に行くような機体だ。

「そう。特攻機です。誰が乗りますか？」

僕は乗りたくないな。

「プライドの高い火星騎士が乗るわけがない。ずっと月面基地で持て余されていた化石のような機体です。実戦用ではない。武装パックを取り付けてなんとか戦闘用の体裁を整えてはいるものの、戦闘能力だけなら地球のカタフラクトにすら及ばないでしょう」

でも、戦争で使った。

「ザーツバルム様は、それを我々にくださった。搭乗者は全て、第三階層からの叩き上げの軍人です」

貴方への忠誠心は篤いでしょうね。

「数は力。覚悟は力。野心は力であると。我々持たざる者に、力を与えてくださった」
ステイギス隊は、強かった。

「スレイン様は、ザーツバルム様の意志を継いでくださいました」

…。

「あの方といれば、どんな夢も叶う気がしました。カタフラクトで宇宙を駆ける。なんと広い。風が吹く。自由を感じた。未来を感じた。時代が大きく変わるのが分かった」

機動権は、もう一人の姫から？レムリナ姫だね。

「そうですか、姫様に会われたのですね。お元気でられましたか。私は、姫様の護衛を放棄してしまいました。スレイン様がお心を残しておいだった。心配していました」

ほら、この頬を見て。彼女の平手だよ。

「お健やかであられるようだ。…ええ。私は、レムリナ様に機動権を与えていただきました。」

彼女がいたから、ザーツバルム伯爵はアセイラム姫を暗殺しても、アルドノアの力を掌握できるというわけだ。

「…アセイラム様のことを快く思わない人間は多かった。皇室へ反感情を抱かせることで、ザーツバルム様は我々を纏め上げておられたからです」

そうだろうね。

「スレイン様は、アセイラム様の存命のため、命を削り我が身を顧みず奔走されました」

うん。ステイギス隊のパイロットも、そう言っていた。

「ステイギス隊…。彼女、生きていましたか。良かった」

貴方のことを心配していたよ。

「よく働いてくれました。あの激しい戦闘状態で、最後までよく付き合ってくれた。そうか、生き延びていましたか」

伝えておくよ。

「スレイン様は、アセイラム様を愛していらっしやいました。でも、だからと言って、レムリナ様のことをどうでもいいと思っていたわけではありません。姫様の思いに応えられなくと

も、大切に思っておられた。心が通じ合っていたのは、レムリナ様であったと思います」

…そうかもしれないね。

「界塚伊奈帆さん。ありがとうございます。私は、戦争が終わってから初めて、生きていて良かったと思いました」

別に。頼み事って言ってたけど、何ですか？

「頼み事は、伝えてもらいたいのです。あの方に」

はい。

「いつか。…そう伝えてください。」

八人目、スレイン・ザーツバルム・トロイヤード。

「今日も雨か」

急に降られた。今日は、スレイン・トロイヤードのことを教えてくれ。

「は？」

だから、スレイン・トロイヤードのことを、教えて。

「僕のこと？」

そう。君のこと。

「何を…今更だ。惑星間戦争の首謀者。火星の総指揮官。地球人でありながら地球を滅ぼそうとした裏切り者。だろう」

君の中では、そうなるのか。

「何が言いたい。…ところで、その赤い頬はどうした」

これは、打たれたんだ。三日も経つのに腫れがひかない。

「打たれた？誰に？」

君の奥さんだよ。新宿の病院にいる。

「何？…ちょっと、触ってもいいか」

そつとだよ。…痛い痛い。

「…叩いた手も痛かっただろうな。…小さな、手のひらだ」

ちょっと、もういいだろ。

「…ああ。お健やかであられるようで、ほっとした」

彼女、君は死んだと思っている。会いたいんじゃないの。

「…合わせる顔がない」

まあ、そうだろうけど。

「お寂しい方だった。不幸な生まれを背負い、アルドノアに翻弄されて。…月しか知らない。あの方の弱みにつけ込むように利用した。お心を弄んで、酷いことをした」

それでも。きつとあの人は、君に会えたら嬉しいだろうと思うよ。

「夢みたいなこと、言わないでくれ。…でも、そうか。地球に來られたのだな」

…そう、ああ、あと伝言。

「伝言？」

いつか。そう言っていた

「いつか？」

君の部下から。赤い機体の。

「ハークライト…」

泣いていたよ。

「生きていたか」

生きている。元気だったよ。

「ああ、本当に…」

あと、オクタンティスのパイロットにも会った。君の決闘を褒めていた。

「バルークルス卿も…？お前一体、何をしていたんだ？」

君のことを知りたくて、話を聞いて回っていた。

「僕のことを？」

あと、ステイギス隊のパイロットにも会った。

「…ステイギスカ。彼らにも、酷いことをした。自分の都合で振り回して、最後はほったらかしにして…。あの機体で、よく生きていてくれた」

君に深く関わった人たちも、そう思っている。

「…」

生きていて良かった。そう思えない？

「…そんなに簡単なことじゃない」

そうか。

「でも、ありがとう。界塚伊奈帆」

再び、一人目。

「ああ、いらっしやい。どうぞ。…ええと、お名前はなんて言ったかしら
お邪魔します。界塚伊奈帆です。」

「そうそう、イナホくん。寒かったですでしょう。紅茶でいいかしら。座って
はい。」

「何を見てるの？」

これは？

「ああ、その写真ね。ずっと仕舞っていたのだけれど、貴方が来てから引っ張り出したの。昔は見るのも嫌だったけれど、なんだか不思議な気持ちね。…あの子、もうそんなに大きくなつてたのね」

これは、いつの頃ですか。

「一歳の時よ。ヘブンスフォールの年ね。貴方と年が近いんじゃないかしら」
生きていたら、僕より一歳年上です。

「そう。ねえ、何か分かった？」

色んな人に話を聞いてきました。配下の火星兵には慕われていました。

「ふうん。…私、別れたきりで。あの人が火星に行ったことも知らなかったの」

トロイヤード博士のことですね。

「戦争が終わって、テレビや新聞でいろいろと言われていたでしょう。私のところにも沢山の人が来たわ。でも、私は何にも知らないの。困っちゃったわ」

それで、引っ越しを？

「どこも住みにくくなっちゃってね。こんな田舎に引っ込んだじゃった。…寒いところでしょう。ここはね、あの子を産んだ街なの。懐かしいわ」

スレイン・トロイヤードのことをどう思いますか。

「スレインのこと？ そうねえ。…生きていたら、一度でいいから会いたかったわ」
自分から会おうとしましたか。

「私のことを憎んでいるでしょうし…。きっと、捨てたと思っている。そう考えると会うのが怖くてねえ。結局、別れてから一度も。勇気がなくて」

…。

「でも、死んじゃうなんてね。まだ、十七歳でしょう？ 子どもだったのに…」

…どうぞ。

「ごめんなさい、泣く資格なんてないのに。母親らしいこと、何もしてない。あの子のことなんて、ずっと忘れていたわ」

…。

「あの子、友だちはいたのかしら。好きな人は？歌を歌ったり、美味しいご飯を誰かと食べた
り…。誰かと一緒に眠ったことはあったのかしら。誰かと手を繋いで、歩いたことはあったの
かしら。楽しい思い出の一つくらい、あったのかしら」

…。

「死んじゃったら、もう何もできないわ…」

戦争が終わる少し前ですが、結婚していました。…ご存知ないかも、しれませんが。

「そう、奥さんがいたの。あの子を好きになってくれたのね」

月で出会ったそうです。彼女は、今は地球にいます。

「その人も、一人残されて可哀想ね」

…ええ。

「…ところで、貴方はどうしてスレインのことを調べているの？」

僕は、スレインと友だちになりたいんです。

「お友だち？になりたい？」

それには、まず相手を知らなくちゃいけないと思って。あいつ、自分からは何も話さないか

ら。

「それって、どういうこと？スレインは、死んだんじゃないの？」

九人目、界塚伊奈帆。

「スレインは生きています」

うそ…。

「本当です」

何でこと…。ねえ、あの子は今どうしているの？元氣かしら？

「ええ。大丈夫、元氣にしています」

そう…。あなた、何者なの？

「詳しいことはお話しできませんが、僕は直接会いに行くことができる立場にいます」

あの子は、どんな様子？お父さんに似て、無口でぶっきらぼうで、夢中になるとご飯も食べなくなるんじゃない？

「最近、食事も取ってます。僕と話をするようになってきました。でも話が合わなくて、喧嘩ばかりですけど」

喧嘩友達なの？

「一緒に戦いました。地球でも、宇宙でも。いい腕だった」

貴方、軍人さん？

「すみません、それは言えません」

私は、あの子に会うことはできる？

「わかりません。彼が望んだら、あるいは」

そう。…あの子は、会いたくないかもしれないわね。でも、伝えてくれる？私は待ってるって。

「ええ。分かりました」

ありがとうございます。イナホさん。本当にありがとうございます。

「それじゃあ。僕はこれで。…最後に一つ、聞きたいことがあるのですが」

なあに？

「スレイン・ザーツバルム・トロイヤードは死んだ。火星の皇女の暗殺を計画し、養父を謀殺し、謀略を重ね地球に戦争を仕掛けた。地球人も火星人も、彼は多くの人間を騙し、殺し、奪った。その報いを受け、処刑された。それがこの世界の真実です」

…。

「スレインが生きていて、良かったですか？」

PLOMISED LAND

(2016-08-13)

「第三者の存在及び通信機器、録音機器のある場所での発声を禁じる。每一箇月黒色染髪すること。黒のコンタクトレンズ、または黒のサングラスを常時着用すること。衣服の着脱及び規定の服装以外を着用する場合は監督官の許可を得ること。また、単独行動を禁じ、常に監督官と行動を共にし、監督官の命令を遵守すること。監督官の命を第一と考え、行動すること」

伊奈帆が書面を読み上げる。テーブルを挟んだ真向かいに座る囚人は、眉を顰めて伊奈帆を見た。

惑星間戦争が終わってから、伊奈帆はこの極秘施設へ何度も訪れている。この面会室で、たった一人の囚人に会うために。それは初めて訪れた冬の終わりから、季節が一巡して、もう一度冬がやってくるまで、定期的に続いている。外に出ることのない囚人は、伊奈帆の服装と会話の端々から季節の移ろいを感じ取っていた。面会室に入ると、伊奈帆はいつもの無表情な顔で「やあ、調子は？」と囚人に聞く。チェスを並べたり、本を読んだり、取り留めのない話をして過ごし、それに囚人が反応を示すことがなくても、特に落胆した風も見せず時間が来たら去っていく。そしてまた数日後、同じように「やあ、調子は？」とチェス盤片手にやってくる

のだ。面会室以外で会うことはない。この部屋に限らず囚人の行動はすべて監視され、記録されている。どうして伊奈帆がこんな無駄な時間を過ごしているのか、囚人はずっと不思議だった。

「聞いていた？」

スレイン、と伊奈帆が彼の名を呼ぶ。

「…何ですか、それは」

「君がここから出るための、最低限のルールだよ」

伊奈帆は書類をテーブルに置く。スレインは手に取り、斜めに目を通す。数枚の書類には、おそろしく小さな字で書かれた規約事項と、赤い複雑な判が幾つかと、筆記体のサインが幾つか。先ほど伊奈帆が読み上げた内容は最後のページにあった。その後には、「当該事項に違反、もしくは不測の事態が生じた場合には、速やかに処理すること。その場合、正体が露見することを防ぐ手段を用いること」という文章が添えられている。伊奈帆はこれを読み上げること避けたようだ、とスレインは考えたが、どうしてなのかは分からない。

「ここから、出る？僕が？」

何のために？と低く掠れた声が問いかける。その双眸は伊奈帆をしっかりと映していた。

伊奈帆は、見るたび綺麗な色の瞳だと思う。セラムの瞳も美しく、二人の瞳の色はよく似ている。しかしスレインの瞳が自分を引き付けるのは、そこに浮かぶ様々な感情がとても美しいからだろう。割り切ることのできない大きな感情が、揺蕩い、移り変わる様を、伊奈帆は二年間ずっと、このテーブルの向こうに見てきた。

「君にはこれから、地球の為に働いてもらう。結果的に、それが火星の為にもなる」

スレインが立ち上がり、彼の座っていた椅子が音を立てて倒れた。この音は、扉の外で待機している刑務官にも聞こえたかな、と伊奈帆は想像する。

「正気か？そんなこと、許されるわけではない」

伊奈帆はゆっくりと立ち上がり、テーブルの上で握りしめられたスレインの拳に触れる。蒼い血管が浮き出た手の甲をそっと撫でる。

「君は、誰に許しを請う？火星か？地球か？アサイラム姫か？…それとも、この僕か？」

伊奈帆は、左目の眼帯を外す。スレインの目が見開かれ、顔が歪む。アナリティカルエンジ

ンを外した左眼窩は、今は空っぽだ。

「君を憎んでいる人が、いないとは言わない。だが、僕は君が生きているということは、こんな形じゃないと思う。戦争だから、傷つけあった。でも、もう終わった。君が、自分を許すこと、許せるかもしれないと思うことだけだ。必要なのは」

スレインの白い指先が、恐る恐る伸ばされる。もうすぐ伊奈帆に触れそうところでぴたりと止まり、視線がそっと外される。伊奈帆は差し出されたその手を握りしめる。あの戦いの中、やっとの思いで掴んだ手。伊奈帆に比べると、少しだけ大きくて、白くて、骨ばって、蒼い血管が盛り上がるくらい華奢なスレインの手。力を込めると、どくどくと血が流れているのが分かる。伊奈帆は、小刻みに震える白い手を、そっと自分の左眼窩に宛てがった。スレインの体がびくりと震え、碧緑の瞳が伊奈帆の一つ残った橙の瞳を映し揺れた。

「僕は、君を恨んでも、憎んでもいない。君には、幸せになってほしい」

スレインは伊奈帆の左目があった場所、そして側頭部の銃創に触れる。スレインの目から、涙がこぼれ落ちた。

「そんな日が、来るのだろうか」

伊奈帆は身を乗り出して、スレインの涙を拭った。

「分からない。でも、その時に僕は君の傍にしよう」

「界塚……？」

涙目できょとんとした表情のスレインに、伊奈帆は小さく微笑んだ。種子島の上空で初めて話した時から三年以上が経つが、こんな年相応の表情を見たのは初めてだった。

「君の監督官は僕だ。これからよろしく。スレイン・トロイヤードは死んだ。もう二度と、君はその名前で呼ばれることはない。ここから出る時は、全くの別人として生きることになる」
過酷で凄惨であつたに違いない過去、そして僅かの美しい思い出、その全てをここに置いていくのだと伊奈帆は告げる。

「数年後には、君が誰か知っているのは僕だけになるだろう」

伊奈帆は、テーブルを回りスレインの傍に歩み寄る。今では、背丈はほとんど変わらない。

伊奈帆はスレインの髪に触れる。淡い金色の髪は、蛍光灯の光の下でも美しかった。

「この髪も、目も、隠す必要のないくらい平和な世界になったら、スレイン。この名前を、いつか呼ぶよ」

スレインは、しばらくぼううつと伊奈帆を見ていたが、やがて目を擦って頭を撫で続けている伊奈帆の手をそっと外した。

「君が拾った命だ。まだ使い道があるというのなら、好きに使え。…オレンジ色」

涙目で、声が震えて、頬が引き攣っている、怒っているような表情でスレインは言った。笑顔だとしたら下手すぎた。それでも、今までよりずっといい、と伊奈帆は思った。

「それじゃあ行こうか。コウモリ」

「今から？」

踵を返す伊奈帆に、スレインが聞く。

「人材不足なんだ。平和な世界になった信じている。軍人以外はね」

「そうだ、伝え忘れたが、君の名前はラルスだ。ラルス・カーヌス」

極秘施設の一室で、出所のための支度をしながら、伊奈帆は言った。

「誰が考えたんですか、その名前」

「僕だよ」

スレインは、その名称の意味に思い至り、どうして伊奈帆が自分にその名前を付けたのかを想像する。

「案外、ロマンチストなんだな」

「心外だな。コウモリより、ずっといいと思うけど」

伊奈帆が少し膨れたように見えて、スレインは可笑しく思う。面会室で向き合っていた時より、ずっと分かりやすい。彼はあの戦争が終わってから、どうして自分に会いに来るのか不思議だったが、ずっと、彼なりのやり方で自分を気に掛けていてくれたのだと知った。

「別に、コウモリでもいい。伊奈帆がつけたのなら」

染髪と身支度が終わり、最後に首に咽喉マイクをつける。このマイクは内部に声帯を圧迫する突起があり、着けている間は伊奈帆にしか声は聞こえない。

スレインが音のない声で呟いた。伊奈帆はイヤホンから聞こえたその言葉に微笑む。

極秘施設の通路を歩いてゆく。刑務官も警備員も一人もいない。二人分の足音がやけに大き

く響く。進むにつれて、窓が増え、太陽の光で窓枠が通路に影を落とす。まるで十字架のような黒い影を踏み、歩いてゆく。

「……ラルス、行こうか。世界が君を待っている」

伊奈帆が分厚い扉を開ける。風が冷たく頬を撫ぜ、乾いた空気に皮膚が粟立つ。二年ぶりに見上げた空は、雲一つなく青かった。

IN THE BLUE

(2016-08-12)

界塚伊奈帆少尉は、日差しの眩しさに目を細めた。

地球の南ヨーロッパの小さな島にあるのは、その豊かな自然に似合わない大きなヘリポートと病院。そして似合いすぎる古式ゆかしい豪邸だった。その庭園を、伊奈帆は歩く。きっちり着込んだ軍服の背中が汗ばむが、湿気が少なく風か通り、過ごしやすい気候だった。伊奈帆の少し後ろから、伊奈帆と同じくらいの背丈の黒髪の青年が歩調を合わせて着いてくる。

草花が咲き乱れる庭園には、鳥がいるのだらう、囀りが聞こえる。生い茂った木々の間から、青い空が見えた。

ここにはアセイラム女王がいる。非公式の訪問だったが、伊奈帆の来訪を告げると、庭園へ通された。

庭園の中ほどに、白く繊細な意匠を施すガゼボが現れた。テーブルには、白い湯気のたつティーセットが用意されている。クッションが何層にも重ねられたベンチに、彼女は座って待っていた。

陽光を集めたような豊かな金色の髪は、背中に流され一本一本が光を宿し輝いているよう

だ。澄んだ翠の瞳は伊奈帆を認め、親しげに細められた。少しふっくらとした白い顔に、柔らかな笑みが浮かんだ。

「伊奈帆さん」

伊奈帆は懐かしい思い出に笑みを浮かべ、軍人らしく礼をした。

「セラムさん。どうも。お久しぶりです。あと、」

おめでとうございます。伊奈帆が言うと、アセイラムはくすぐったそうに笑った。手がゆつくりと腹部を撫でる。

「ありがとうございます」

庭園に爽やかな風が吹き抜ける。木々が揺れ、重なり合った葉がさざめく。鳥が飛び立ち、影を落とす。ティーカップからはハーブの良い香りが漂い、アセイラムの白い手がカップにそっと添えられた。寒さも暑さも、痛みも苦しみも存在しない楽園のような場所に住む、火星の美しい女王。

ここはまるで、天国のような場所だ、と伊奈帆は思った。囚われてしまえば、もうどこにもいけないほど、幸福な場所だと。

伊奈帆は、アセイラムから視線を外し、左側に微かに顔を向けた。もう一人の軍人は、俯き加減だった顔を上げる。艶やかな黒い瞳がアセイラムの姿を映した。

アセイラムは、この黒い瞳の青年が視界に現れた時から、心がざわざわと煩くて仕様がな
い。目の色も、髪の色も違う。面差しも、随分違うように思う。そもそも、彼はもういない
はずだ。しかし、その眼差しからは懐かしい匂いがした。

「今日は、急な訪問にも係わらず、温かいおもてなしをありがとうございます。任務の合間
ですので、すぐに戻らなければいけません」

伊奈帆は、勧められた椅子とお茶を一瞥し、淡々と話す。

「構いません。一目会えただけでも嬉しいです」

伊奈帆が、後ろの青年を促し、青年はゆっくりと進み出る。

「こちらは、僕の補佐です。名前はラルス・カーヌス」

ラルスと呼ばれた青年は、深く頭を垂れる。その佇まいも、所作も、懐かしくて涙がこみ上
げてくる。アセイラムは、おそらくもう二度とこの青年と会うことはないだろうと悟った。こ
れが最後の邂逅ならば、彼には伝えたいことがあった。

「…ラルスさん。海の上を飛ぶ、鳥の名前ですね。私は、初めて地球で鳥を見ました。青い空、青い海、その中を飛んでいく白い鳥を」

ラルスという名の青年にアセイラムは言う。その手に触れたい。本当の名を呼びたい。言いたいことも沢山ある。けれど、それは許されないのだと思う。伊奈帆は無茶を承知で、彼を連れて来たのだらうと思った。

「それを教えてくれた人は、私のとても大切な人です。貴方の未来に、自由と幸福がありますように」

ラルスという名の青年は、その言葉に手を胸に当て、膝き、最敬礼の構えをとった。アセイラムの目に涙が浮かんた。

伊奈帆が踵を打ち鳴らし、若者は起立し黒い瞳でアセイラムを見つめる。たとえ色が違って、その眼差しに込められた思いは、あの頃いつも自分に向けられていたものだった。

「それでは、任務に戻ります」

少し切なげに聞こえる声に、伊奈帆は随分表情豊かになった、とアセイラムは思う。

「さようなら。伊奈帆さん、ラルスさん」

「セラムさんも、お元気で」

二人の青年の後ろ姿が見えなくなり、ヘリポートからセスナのエンジン音が聞こえ、遠ざかっていく間も、アセイラムは其処にいた。

どのくらい、そうしていただろうか。まるで何事もなかったかのように静かな空間で、アセイラムは天を仰いだ。新緑の木々の間に覗く空を、三羽の海猫が横切っていく姿が見えた。

それはとても自由な光景だった。

PERFECT DAYS/INSIDE OF YOU

(2016-08-15)

(2016-08-17)

※Pixiv 掲載時では分けていた二話を章立て順にまとめました。
※全年齢対象本のため、Pixiv 掲載時の R-18 部分はカットしてあります。(十八歳以上の方は Pixiv でご覧ください)

空を真っ赤に染める夕日の中、一機のヘリコプターが小さな島の軍用基地に降り立った。

「古いけど、使える。そっちは？」

「幾つか、レッドランプが。直せる範囲です」

「しばらくは、ここの整備かな。埃っぽいし、掃除もしないと」
機械室で、左目に眼帯をつけた青年が立ち上がる。

「宿舎へ行こう。電気と水が使えるといいけど」

黒髪の青年も立ち上がる。二人は、薄暗い通路を歩いていく。

「伊奈帆」

「何」

「この島は、平和ですね」

「そうだね」

宿舎は古くて簡素で埃っぽいが、掃除をすると一応寝泊まりができるようになった。数日は電気系統の整備や建物の補修で日々を過ごした。しかしいい加減水しか出ないシャワーや黴臭いシーツ、缶詰の食事に音を上げた伊奈帆が、どこか別の場所に住まいを移さないか提案した。

「もう使われていない別荘が島の反対側にある。そこに住もう」

君にはいろいろと制限ができるけど、と伊奈帆は顔を顰めて乾パンを齧る。

「聞いている？スレイン」

「ラルスだよ」

「監視カメラは故障している」

スレインは手に取った乾パンを口に放り込んだ。咀嚼するたび口の中の水分が奪われていくが、空腹が満たされるくらいには食べられる。伊奈帆は噛むのも嫌だというように一口食べると水で流し込んでいた。

「伊奈帆の好きにしたらいい」

「決まり。じゃあ行こう」

「今から？」

「遠いんだ。歩いていくから、早くしないと着くのが朝になる」

簡単に荷造りをして施設を出たのは、夕方だった。夕日が海に沈む様子を横にして、二人は並んで歩く。長い影法師が、砂利の転がる未舗装路の上で重なった。

「島の反対側のコテージが廃墟になっている。この島は気候がいいから、手入れすれば宿舍よりずっと居心地はいいはずだ」

スレインは伊奈帆の言葉に頷く。追われる身であっても、規約に違反した行動は取るべきではないし、その方が身を守ることに繋がるので、密室以外ではスレインは声を出さない。

「どうして、夕日は赤いか知ってる？」

伊奈帆が聞く。声が出せない状態では説明がこの上なく面倒だし、実際説明できるほど詳しくない。あと、伊奈帆が話したいようなので、スレインは首を振った。その後伊奈帆は長いこと、光の波長について話した。

辺りがすっかり暗くなっても、彼らは歩いた。所々に数件ずつ民家が集まり、そこに点る明かりが二人を照らす。

「人が住んでいる。思ったより多いね」

歩きながら伊奈帆は、取り留めのない話をする。スレインは、伊奈帆はこんなに喋るやつだったかな、と意外な思いで聞いていた。どことなく嬉しそうな表情の伊奈帆は、案外話好きなのかもしれない。

民家の明かりが、一つ、また一つと消え、星明りの下を歩く。波の音が心を攫ってゆくような静けさの中、コテージに辿り着いた。

真っ暗な室内を懐中電灯で照らす。ずっと使っていなかったから埃っぽいが、今の状態でも確かに宿舎より随分ましだ。しっかり掃除をしたら、きっと居心地がいいだろう。

何時間も歩いてすっかり疲れた二人は、とりあえず今日はベッドだけ整えて寝ることにした。水道からは茶色い水が出たが、出しっぱなしにしておくのと透明になったので、体を洗った。ガスは通っていなかったが、暖炉があったので火を起こして湯を沸かした。こういう時伊奈帆はてきばきとまめに動き、いつもスレインは感心する。ベッドも埃っぽかったが、叩いて

埃を出し、絞った布で拭くとまあまあ寝られるくらいになった。

「寝ようか」

「はい」

穴の空いたカーテンの隙間から、星明かりが差し込んだ。

翌朝。伊奈帆が目覚めると、ベッドに一人で寝ていた。スレインはもう起きているようで、キッチンから水音が聞こえる。リビングでは、スレインが掃除をしていた。窓を開け放し、明るく気持ちのいい光と風が入り込んでいる。

スレインは料理の腕はいまいちだが、掃除は丁寧で手早い。リビングは清潔感を取り戻していた。

「伊奈帆。おはようございます」

「おはよう。寝過ごした。綺麗になったね」

スレインは照れくさそうに笑った。最近、ようやく彼の笑顔を見られるようになって、伊奈

帆はとても嬉しい。彼にはいつも笑っていてほしいと思う。できれば、自分の傍で。

「お腹空きましたね」

「何か、買いに行こうか。ここに来る途中、商店があった」

スレインは頷いて、洗面所へ向かった。彼の支度ができるまで、伊奈帆はキッチンで、調理器具の確認をすることにした。

「いらっしやい」

ドアを開けると、カランとドアベルが鳴り、カウンターの店主が挨拶した。店内は飲食スペースと、食料品と雑貨を販売するスペースに分かれている。

伊奈帆たちが店内に入っても、店主は何も言わず、カウンターで仕込みをしている。見覚えのない、怪しい二人組を訝しく思っているだろうが、いろいろと面倒なことを聞いたり、態度に出したりしないことに、伊奈帆はほっとした。

とにかく空腹なので、すぐに食べられるものはないかと探すが、まだ喫茶店は開店前らし

く、販売スペースにある食パンが調理の必要のない唯一の食品だった。とりあえず食パンと紅茶を購入し、今後の食事については考えを巡らさなくてはいけないな、と伊奈帆は店内の食料品を眺めた。

「はい、お釣り。十時から十八時までではカフェもしていますから、良かったらどうぞ」

会計の時、店主が落ち着いた目でそう言った。どう見ても訳ありの自分たちを邪険にしない様子が心が安らいだ。

「ありがとうございます」

伊奈帆が言うと、スレインも会釈をして微笑んだ。二人は店を出て、来た道を歩く。

「腹ごしらえしたら、今日は大掃除だね」

暖かい日差しが降り注ぐ。青い空には海猫が飛び、穏やかな波音が寄せては返す。土の道を並んで歩きながら、伊奈帆は横を歩くスレインを見る。

白い横顔を風が撫で、黒い髪がさわさわと揺れる。口元は微かに微笑んでいるようだった。

うん、こんな日々も悪くない。素直に言うと、最高だ。と伊奈帆は思い、スレインの手を握った。スレインは意外そうに伊奈帆を見たが、困ったように笑ってその手を握り返した。

最近、よく来る客の話をしよう。

私はこの島で唯一の喫茶店を営んでいる。ヘブンスフォールで両親を失ったとき、私は十六歳だった。幸い、両親が経営していた喫茶店は被害を受けることなく、食材や飲料があったので、被災後は私を中心となり炊き出しを行った。救護所兼配給所となった我が家は、復興とともに本来の姿を取り戻した。それから二十年、私はこの店を切り盛りしている。喫茶店と言っても、飲料や軽食を提供するだけではない。老人が多くなったこの島では、家事手伝いに力仕事、送迎や郵便物の一時預かり所などを兼ねる便利屋だ。島の人口も減り、定期船も減少した。まともな客もほとんどおらず儲けなどないようなものだが、地域の住民の差し入れや物々交換によって、暮らせないことはない。

そんな私の店に、一か月ほど前から奇妙な二人組がやってくる。何が奇妙かというと、まず若い。この島では、これまで私が飛びぬけて若かった。他の住民は私より十以上年上で、私より若い住民はいない。この二人組は、十代後半か二十代前半の男性だった。

彼らは、初めて来たとき、私の店で食パンを一斤とダージリンを一缶買って行った。それから、一週間に一回から二回、食料品を求めてやってくる。

いつも私とやりとりをするのは、左目に眼帯をつけた男性だ。東洋系の顔立ちで、まだ学生のようにも見える幼い顔をしている。彼は表情の薄い乏しい顔で必要最低限の会話しかしないが、不思議と人好きのする穏やかな空気を纏っていた。

もう一人は、ほっそりとした北欧系の青年だ。彼はいつももう一人の青年の後ろにいて、何も言わない。黒い前髪で隠れがちだが、よく見るとなかなかの美形だ。

この島に場違いな二人組は、住民の噂では軍人らしい。軍服姿を見た人や、ヘリコプターで移動するのを見た人が何人もいるそうだ。この島には、軍備施設がある。ヘヴンスフォール以降閉鎖されていたと住人は思っていたが、彼らはそこに配属された軍人であるらしい。

彼らが来るようになって三か月が経ち、この島にも雪が降る日が増えた。

「寒いから、少し休んでいかれてはどうですか」

ある日、ちらちらと雪が散る中、鼻の頭や耳を真っ赤にしてやってきた二人にそう声をかけた。彼らは少し考えるように顔を見合わせたが、東洋系の青年が返事をした。

「そうですね。コーヒーと紅茶をいただけますか」

私は彼らをストーブの近くのテーブルへ案内し、カウンターで支度を始めた。ラジオのスイッチを入れる。古い曲が店内に流れた。

湯を沸かし、カップを温める。ふと目を向けると、テーブルの二人は窓の外を見ていた。薄闇の中、ぼたん雪がふわふわと降り出している。見目良い二人の青年が、静かな音楽の中雪を眺める姿は絵になり、まるで映画のワンシーンのようだった。

温かいカップをテーブルに運ぶ。東洋系の青年の前にコーヒーを、北欧系の青年の前に紅茶を置くと、彼らは小さく会釈をした。

「いつも臍屑にしていただいて、ありがとうございます。もし良ければ、配達もしておりますが、良いですか」

つい余計なことを言うのが、私の悪い癖だ。それで昔、友人と何度も喧嘩になったことを思い出す。

「助かりますが……。余り、僕たちに関わらない方がいいと思います」

いつものように、東洋系の青年が答える。北欧系の青年は、目を伏せた。

「しょっちゅう来ていて、今更ですが。僕たちは、軍人です。惑星間戦争が終わって数年が経ちますが、僕たちに仕事があるのは良いこととは言えませんが」

なるほど。やはりこの二人は軍人であったのだ。随分若いが、惑星間戦争でも戦ったらしいということは、見た目より年齢は高いようだ。東洋人は年より若く見えると言うし、もう一人の青年の整った顔立ちには年齢を想像しにくい。二十代後半か、もしかしたら三十代かもしれない、と想像した。

「この島には、若い人は珍しいんです。何かできることがあったら、言ってください」

東洋系の青年が微笑んだ。笑うと、子どものようなあどけない顔だった。

「ここのパンがとても美味しいので。あなたが焼いているんですか」

「ええ、窯があるので。その方が安いんですよ」

「彼が好きなんです。いつもサンドイッチにして食べています」

そう言われてもう一人の青年を見ると、にこりと笑った。眉が下がり、口元が緩やかなカーブを描く様が、まるでスローモーションのように鮮明に見えた。

なんて幸せそうに笑う人だろう、と思う。年甲斐もなく、鼓動が早くなる。

「お心遣いに感謝します。また、買いに来ていいですか」

立ち上がり、東洋系の青年が言う。北欧系の青年も立ち上がり、ジャケットを羽織る。

「ええ、いつでも」

返事をした時には、ドアベルが鳴り終わった後だった。テーブルには代金と、冷め切らない二つのカップが残った。窓の外には、白い雪に彩られた二人の青年が、寄り添って歩いている。

今度彼らが来るときは、サンドイッチを用意しよう、と決めてそっとカップを持ち上げた。

コテージと軍用施設はかなり遠い。軍備施設に軍用車はあるが、目立つし物騒なので一台だけコテージに移動させて、普段は歩いて行き来をする。

この数時間かけて歩く道のりを、伊奈帆は気に入っている。

伊奈帆は、スレインが好きだ。あの面会室で彼と向き合っている間に、伊奈帆はスレインに対する気持ちを自覚した。始めは、危なっかしくて放っておけない、と思ったし、何も語らない彼に興味があった。

彼を知りたい、という気持ちが、一緒にいたい、となったのはいつだったろうか。

差し入れを持って行ったある日のことだ。それまでも度々、栄養状態が気になる彼に何度も弁当や菓子差し入れたことがある。独房への持ち込みは禁止されているので、面会室で食べることになるのだが、彼はほとんど口にできなかった。それでも伊奈帆は、何度もおにぎりや、卵焼き、クッキーやマフィンなどを作って持っていた。半ば意地だった。

その日は、サンドイッチを作っていた。玉子やツナ、ハム、レタスやトマトを挟んだもの

と、いちごジャムとマーガリンを挟んだものを弁当箱に詰めていき、面会室のテーブルに置いたのだ。

蓋を開けた時、いつもはぼんやりと靄のかかったスレインの瞳の色が揺らいだように見えた。その美しい碧に見入っていると、彼は次に伊奈帆をじっと見つめ、聞いたのだ。

「これは、貴方が作ったのですか」

「そうだけど。手作りの物しか、持ってきたことはないよ」

もしかして、嫌いだったろうか。こういう時、素直に言えないのが自分の歯痒いところだと思う。

「…」

スレインはまたサンドイッチを見て、そっと目を閉じた。伊奈帆は、長い睫毛が頬に落とす影を、ただ見ていた。

「美味しそうだ。いただいていいですか」

その時のスレインの表情を思い出す。きっと自分は、あの時恋に落ちたのだ、と思う。

いつも無表情で無反応で、抜け殻のようにだらりと椅子に座る彼が、あの時は確かに笑っ

た。細めた碧の瞳が伊奈帆を映し、口角がわずかに持ち上がった。眉が下がり、少し首を傾ける。その仕草を見て、伊奈帆の心臓は大きく高鳴ったのだ。

スレインはその日、いちごジャムのサンドイッチを食べた。本当は全部食べたいが、これ以上は食べられない、と申し訳なさそうに言った彼に、今度から食べきれる量を持ってくると伊奈帆は返答し、面会室を後にした。

あれから色々あって、スレインは伊奈帆と一緒にいる。伊奈帆も、もうスレインと一緒にいるしかない、という所まで来てしまった。しかし、それを後悔したことはない。

極秘施設を出てからの数年で、自分たちを取り巻く環境は大きく変わった。今では、伊奈帆も追われる側の人間になった。しかし、スレインが隣にいるなら悪くない、と思う。

スレインは伊奈帆に優しい。というか、基本的に優しい人間なのだ。そして、控えめで、伊奈帆の気持ちを汲んでくれる。ぶっきらぼうで意地っ張りで、感情表現が下手な伊奈帆は、スレインがそれを気にせず傍にいて微笑んでくれることに感謝している。今まで理解されることの少なかった自分の心の内を、そっと受け止めてくれる存在は得難い。この島に来てから、ただ傍にいた時間が増えた。そんな時、伊奈帆は安らぎを感じている。

「寒いね。雪が降るかも」

寒がりの伊奈帆は、手に息を吹きかける。爪が青くなって、指先は悴んで感覚がない。

潮風が吹き付け、容赦ない冷たさに肩を疎める。それでも、伊奈帆はスレインと歩くこの道のりが好きだ。

歩きながらだと、いつもより素直になれる気がする。

スレインは鼻の頭と耳を真っ赤にしているが、平気な顔をしていた。北ヨーロッパの生まれだということだから、寒さに強いのだろう。

「ねえ、手を繋いでいい？」

伊奈帆が聞くと、スレインは右手で伊奈帆の左手をそっと握った。ごつごつしているが、あたたかい掌がなんとなく照れくさくて、伊奈帆は空を見上げた。白い雪が、鼻の頭について溶けた。

「雪だ」

二人は顔を見合わせて、少し笑って走り出した。

どちらかが言い出したわけではないが、行動を共にするようになってから、二人は同じベッドで眠ることが多い。それは、規約上同室で眠る必要がある、場合によってはベッドが一つしかない寝室だったことも一因だが、本質はもっと別のところにある。

初めて同じ部屋で眠ったとき、寝室にベッドが一つしかなかった上、他にスペースもなかった。その時にはスレインへの気持ちを自覚していた伊奈帆だが、そのことで動揺することはなかった。

お互い、背中を向けてベッドに入ったが、スレインは寝付けないようだった。同じ姿勢も苦しくなってきた、伊奈帆が寝返りをうつと、間近にスレインの首と背中があった。シャツの襟ぐりから、暗闇の中でも傷跡が見えた。白い首にかかるチェーンが小さく震えて、肩を抱く手が、ぎゅっと服に皺を作っていた。

何とも言えない気持ちになって、伊奈帆はスレインを背中越しに抱き寄せた。スレインはびっくりと震え、背中越しに鼓動が速くなったのがわかった。伊奈帆は「大丈夫だよ」と言って、

スレインの髪を撫でた。

それからずっと同衾している二人だが、伊奈帆はそろそろちゃんと気持ちを伝えなければいけないと感じている。目の前で無防備な寝顔を晒されるとどうにも心臓に悪いし、一緒にいられるだけでも勿論嬉しいけど、もっと触れたいし色んな顔が見てみたいと思う。

「あ」

キッチンで朝食を作っていた伊奈帆が、小さく声を上げた。

珍しい、と思いながらスレインは洗濯をする手を止めて聞く。

「どうしました？」

「ごめん、紅茶が切れてた」

このコテージを毎日利用するわけではないので、生活必需品の補充まで気が回らないことがある。特に、嗜好品は管理が甘くなりがちだ。

「買ってきましょうか」

「そうだね。お湯で食事をするのは味気ないな」

ついでにジャムも、と伊奈帆が戸棚を見て言う。スレインは、メモ用紙に書いた。

「一人で行ってきても？」

「監視カメラはないからね。でも、喋っちゃだめだよ」

スレインはにっこり笑って、首を人差し指でトントンと叩く。咽喉マイクをつけて、シャツを羽織った。

「いってらっしゃい」

後ろ姿を見送り、なんだか新婚さんみたいなやり取りだな、と伊奈帆は少し耳を赤くした。誰も見ていないが照れ隠しに頭を掻いて、朝食の支度を再開した。

3 Owner

それからさらに三か月。例の二人組は、時折一人でこの喫茶店に訪れるようになった。

いつも話をする東洋系の青年は、イナホという名前だそうだ。料理が得意で、レパートリーも多様だ。彼と話して、日本食の知識が増えた。この店のメニューにも、小豆や抹茶などとい

う日本の食べ物を取り入れ、島の住民にも広まっている。イナホから最初に教えてもらった出汁巻き卵というのは、難易度が高い。専用のフライパンを、島の金物屋の老人に作ってもらった。もう少し練習したら、店に出せると思う。

もう一人の無口な青年は、ラルスというらしい。一度だけ、イナホが彼の名前を小さな声で呼んだのが聞こえた。

断片的な会話と立ち居振る舞いから、彼らが軍人で、この島の軍用施設に住み込みで働いているということが分かった。しかし週に一回か二回、この喫茶店の近くの丘にあるコテージに寝泊まりしているらしい。これは、彼らがこの店に寄った日は丘の上のコテージに灯が点るという話を住民が噂していたことを伝え聞いた。

ある朝、ラルスが一人で私の喫茶店に訪れたことがあった。いつも通りカウンターに座り新聞を読んでいた私は、カラン、というドアベルの音で顔を上げた。ラルス青年がドアから入ってくる様子を、私は目を丸くして見つめてしまった。彼が一人で来店するのは初めてだったのだ。ラルス青年は、困ったように笑って一枚のメモを私に渡した。メモには、オレンジペコといちごジャムと書かれていた。

商品を用意し袋に詰め、金額を告げるとラルス青年は紙幣と小銭をカウンターに置いた。いつもイナホの後ろにいた彼を間近で見たのは初めてだった。真白い肌に濡れ鳥のような黒い目と髪。少し目が吊り上がりすぎだが本当に美しい顔をしている。釣銭を渡すときには動揺して手が震えてしまった。会釈をして去っていく彼の後ろ姿を見ながら、彼はこれから丘のコテージでイナホと朝食をとるのだな、と思った。今買いたいちごジャムをパンに塗って、オレンジペコの入ったカップを口に運ぶ。今日の空は高く青い。美しい想像に、私は小さく溜め息をついた。

4 KJ/ST

「伊奈帆」

この島に来て数か月。当初は必要ないと思っていたイヤホンからスレインの困り果てた声が聞こえた。

「今どこ？」

「本棟の南西、外壁です」

伊奈帆は腰を上げ、コントロールルームの扉を開けた。足早に階段を下りる。

「どうしました」

フェンスの外に、スレインと手押し車に腰かけた老人がいた。伊奈帆を見て、スレインはほっとしたように笑った。

「お兄さん、すまないねえ」

どうやら、老人は手押し車を押して移動中、転倒してしまったらしい。たまたまそれを見てしまったスレインは、老人を助け起こして怪我がないか確認していたところ、身の上話を聞かされ続け伊奈帆に助けを求めたのだ。

スレインは、あの極秘施設を出所する際、人権を無視された規約を確約させられており、その一つによって伊奈帆以外の人間の前では声を出すことができないのだ。会話が成り立たないので、基本的に伊奈帆が行動を共にしているが、この軍用施設では二人きりなので単独行動をすることが多い。しかし、スレインは行く先々で周辺に住む住人に遭遇し、質問攻めにあったり、今回のように不測の事態に巻き込まれてしまうことが……ままある。

今回は老人を助けたまでは良かったが、これから食料を調達に行く所で、これでは行くことができない。代わりに用事を済ませ、家まで送りとどけてくれないか、というものだった。

伊奈帆とスレインは二人で数キロ離れた民家へ老人の作った野菜を届け、代わりに卵と菓子、茶葉などを受け取り、老人をまた数キロ離れた自宅まで送り届けることになったのだった。

「今日は久しぶりに出汁巻き卵を作ろう」

帰り道。お礼に、と貰った卵をぶら下げて、伊奈帆が言った。スレインは、ぱあっと明るく微笑んだ。

彼は伊奈帆の作る料理を喜んで食べてくれる。もう、あの頃のように食べられない、と残すことはない。相変わらず細身だが、顔色もいいし体力もある。伊奈帆は、スレインのそんな変化が嬉しくて仕方がない。

しかし、こうやって島の住民と接することが増えてきたのが少し気に掛かる。自分たちの存在はこの島では目立つだろうと思っていたが、ここまでアグレッシブに関わってこれると避けようもない。

まあ、時間に追われることもないし、頼ってくる老人たちを無下にもできない。あれよあれよと引き受けるうちに、頼まれごとを遂行して食料品を貰うことが習わしになってしまった。

「今からだ夕方になるかな。あっちに行こうか」

スレインが頷き、伊奈帆とスレインはまた長い道を歩く。二人の間で、卵の入ったビニール袋が揺れた。

4 Owner

彼らが島に来てから、一年近くが経とうとしていた。伊奈帆とラルスは、島の住民にも受け入れられている。彼らがコテージへ行く日は大体週に一、二回で、その日は道すがら住民に野菜や果物、ささやかな嗜好品を手渡されるのが通例になっているらしい。伊奈帆とラルスは、住民に人気があり子どもや孫のように可愛がられているのだった。それというのも、彼らは住民に遭遇すると、困りごとを、お人好しにも助けてくれるというのだ。年寄りばかりのこの島では、困りごとがない人間はいない、といっていい。特にラルス青年は遭遇率が高く、やれ荷

物が重くて運べないだの、迷い猫や迷い犬が逃げ込んだだの、車がエンストした、人手が足りない、落とし物をした、家の蛍光灯が切れた、などありとあらゆる困り事を目の前で披露されてしまうのだそうだ。ラルス青年と伊奈帆は、それらの困り事をすぐに解決してくれる。その後も、二人は恩に着せることもなく「良かったですね」などと言ってクールに去っていく。

便利屋である私の仕事を取られたような気がしなくもないが、まあいいかとも思う。こんな辺鄙な島に軍のどんな仕事があるというのか。住民の話では、彼らはよく外に出てくたびれた施設のあちらこちらを手入れしているそうだ。そしてフェンス越しに住民に遭遇してしまい、様々な頼まれごとを引き受けてくれる……らしい。これは私の想像だが、彼らは時々ヘリで飛び立つ。おそらくそれが、本来の任務なのだろう。それ以外は、軍用施設の点検と修繕をして任務を待っているのではないだろうか。

この一年で、この店のメニューもずいぶん増えた。お惣菜、というものを店で作るようになってから、少ない島の住民がこぞって買いに来るようになった。その荷物運びを伊奈帆とラルスがしているのを見てしまっただけから、彼らには無料で飲食を提供している。

「こんな日が、ずっと続くといい」

ある日、様々な雑用を終えた二人にサンドイッチとアイスティーを出すと、伊奈帆が小さく呟いた。普段、無駄口を叩くことはない伊奈帆なので、私がいる所で独り言を言うのは意外だった。ラルスを見ると、彼も意外そうに伊奈帆を見ている。

「貴方たちが来て、みんな元気になりました。いろいろと面倒なことを頼まれて、ご迷惑ではないですか」

「仕事があるのはありがたいです」

伊奈帆の言葉に、ラルスも小さく頷いた。

この頃になると、彼らは軍用施設の外で見かけることの方が多くなっていた。丘のコテージにはほぼ毎日明かりがついているし、私の店の前を彼らが歩く姿が、毎日のように見える。コテージから軍用基地まで歩いて通うのは俄かに信じられないほどの道のりがあるが、若い二人は歩くのだろう。道すがら、住民に声を掛けられ、頼まれ事をされ、菓子や飲み物を貰いながら、彼らは毎日歩いていく。

「貴方は、ずっとここでお店を？」

伊奈帆が私に聞いた。初めてまじまじとみた彼の目は、濃いオレンジ色をしていた。

「はい。ヘブンスフォールで両親を亡くして、この店だけ残ったんです。それでなんとか。私は生まれてからずっと、この島から出たこともないんですよ」

グラスの中の氷が、カランと音を立てた。汗をかいたグラスに水滴が伝う。ドア越しにガア、ガアと海猫の鳴き声が聞こえる。

「その時はまだ、私と同じくらいの年の人や少し下くらいの人も沢山いたんですが。家族を亡くしたり、住む所がなくなったり、どこかに行ってしまったいました。」

誰かにこんな話をするのは初めてだった。若者たちは、静かに耳を傾けてくれている。

「惑星間戦争でこの島は被害を受けることはなかったですが、その時も沢山の人がどこかに行ったり。私の友人も行ってしまった。彼は、軍人になって、戦争で死んでしまいました。帰ってくると、言っていたんですがね」

幼馴染はヘブンスフォールで家族は助かったが、家が全壊した。彼ら家族は両親を失った私と一緒に、この店を切り盛りしてくれていたのだ。しかし惑星間戦争で彼ら一家はロシアへ疎開する道中、フェリーが火星人の襲撃に遭い亡くなった。幼馴染自身は徴兵されていたので襲撃時フェリーには乗っていなかったが、カタフラクトで火星人と交戦し、戦死したそうだ。そ

れらは全て、戦争が終わった後に調べて分かったことだった。

テーブルの上で組まれたラルスの白い手に、ぎゅっと力が込められたように見えた。伊奈帆はそれを横目で見て、私を見て言った。

「僕たちも軍人です。惑星間戦争では、僕らは多くの人を殺しました。そして、今も人を殺すことが任務になることがあります」

伊奈帆はテーブルをトントンと指で叩く。ラルスが顔を上げた。

「ここは優しいところです。島の人たちは、僕たちに手を振って、笑って、頼りにしてくれる。でも皆さんは、僕たちがどんなことをしてきたのか、知りません」

僕たちは、酷いですか。と伊奈帆は私に聞いた。私よりずっと年下の青年たちが、死と隣り合わせの世界で戦った事実を淡々と告げられると、知っていたこととはいえ冷水を浴びせられたような気持ちになった。

私としては。ショックを受けたが、たとえば伊奈帆とラルスが人を殺めたとしても酷いとは思わなかった。戦争なのだし、そうしなければ彼らは死んでいただろう。伊奈帆の左目の眼帯は戦時中の負傷だろうし、そんな経験をしてきた彼らは、幸せになるべきだと思う。

「戦争だから、命のやり取りがあるのは当然です。辛い思いをしましたね。この島は平和ですよ」

何にもない所ですけど。と言うと、伊奈帆は目に見えてほっとした様子で表情を緩めた。

「私の故郷ですから。気に入ってもらえたのなら、こんなに嬉しいことはありません」

ラルスが、びくりと体を強張らせたのが分かった。この美しい青年は、あの戦争で何を見てきたのだろうか。その傷が、癒えるといいと思う。

「ありがとうございます。僕たちは、この島が好きです」

伊奈帆が席を立ち、「行くよ」とラルスの肩に触れる。開けたドアから、強い日差しが店内に差し込む。私は目を細めて、歩き出す二人の姿を眺めた。二人は今日も寄り添って、あの長い道を歩いていくのだろう。

4.5 KI/ST

「伊奈帆」

風呂上がりで、髪を濡らしたスレインが、ベッドに寝転んで本を読んでいた伊奈帆のそばに腰を下ろした。

「この島は、平和ですね」

「うん」

伊奈帆は体を起こして、スレインの隣に座った。スレインは両手の指を軽く組んで、指先を弄んでいる。

「あの人も、とてもいい人です」

「そうだね」

喫茶店の主人は、いつも何も言わず優しく彼らを迎えてくれる。伊奈帆が水を向けると、今日は色んな話をしてくれた。最後に言われた言葉が温かった。

「僕には、故郷と呼べることはありませんが……。故郷を大切に思うということは、今日、少し分かりました」

惑星間戦争で、地球総攻撃の号令をしたスレインの姿を思い出す。地球も、火星も、月も。彼には優しくなかった。帰る場所のない中、引き返すことのできない境遇で何を思い決断した

のか、語ることはない。

「僕は、ここにいてはいけないのではないでしょうか」

「どうということ」

伊奈帆は静かに問い返す。この類の問答は、二人がああ面会室から出たときから、何度も何度も繰り返されていた。それでも伊奈帆は、いつも辛抱強く聞き入る。

「争いの火種になりはしないかと。もう、誰も傷つけたくありません」

殺せ、と彼は言わない。その代わり、その顔を歪ませ、揺れる瞳で言うのだ。

「伊奈帆」

と。碧の瞳に溢れそうなほどの悲哀と憎悪、そして形容しがたい美しい感情を籠めて、伊奈帆の名前を呼ぶ。

「駄目だよ」

伊奈帆はスレインの頬を両手で包んだ。ひやりと冷たい感触に、眉を顰める。スレインの濡れた髪から滴が落ち、伊奈帆の腕を伝っていく。

「駄目だ。ここから出て行っても、問題は解決しない。この島はちよつとやさつとじゃ見つか

らない。世間では存在しない島だからね。ネットがつながる場所や人が多い場所では、見つかる危険性が高い」

一度目を閉じてから、息を凝らして伊奈帆は言う。

「君がいなくなるのも駄目だ。約束しただろう。傍にいて」

「でも、伊奈帆は戻れるでしょう。投降すれば、普通の生活が送れる」

それには、スレインの身柄が交換条件だ。今度捉えられたら、もう命はない。

「分らないかな。僕はそんなこと望んでない」

伊奈帆はスレインの手を取って、両手で包み込んだ。冷たく青白い手を、強く強く握りしめる。

「僕は君が好きなんだ。君がいなくなるなんて耐えられない」

スレインが目を見開いて伊奈帆を見た。居心地悪そうに逸らされる目を追いかけて、伊奈帆は詰め寄る。

「ずっと一緒にいたい。君の笑顔が好きだ。どんな顔でも好きだけど、笑った顔が一番好きだ。ねえ、僕と一緒に生きてくれない」

「伊奈帆…」

スレインが消え入りそうな声で伊奈帆の名前を呼んだ。そこそ長い付き合いだが、ここまですり切った表情は初めて見た。寄った分だけ後退りされて、ベッドの上のスレインの背が壁に当たった。

「迷惑？ 僕のこと、どう思う？」

「…僕なんか、そんな風に思われる資格はありません」

至近距離で見つめるとスレインは上へ下へと目を泳がせて、目を伏せた。伊奈帆が強く握った白い手が、びくびくと震えている。伊奈帆は震える指に指を絡ませ、掌を合わる。温かい血液の流れる感触が伝わる。生きている。

「人の告白を勝手に否定しないでくれる？ 僕の事、嫌い？」

鼻がぶつかるほど近く。目を逸らせなくらい近くにある橙の瞳を、碧の瞳が映した。スレインが瞬きすると一滴の涙が頬を伝い、伊奈帆の手の甲に沁み込んだ。

「…嫌いなわけ、ないじゃないですか」

震える、吐息に混じって聞こえないような声でスレインが言った。伊奈帆がほっとして息を

吐く。スレインの手が、伊奈帆の掌をぎゅっと握り返した。

「好きです。伊奈帆。貴方になら、殺されたっていい」

泣き出したスレインの体を抱きしめる。スレインの腕が、伊奈帆の背中に回されておずおずと握られる。

「ばか。生きるんだよ。一緒に生きよう」

こくりと頷いたスレインの黒い髪を、伊奈帆は撫でた。

いつか、彼が何も隠す必要がなくなった世界で、淡い金色の髪を撫でたいと思う。日の光の中で見る彼の本当の髪色を想像して、伊奈帆はゆっくり目を閉じた。

—

「ねえ、キスしていい？」

伊奈帆が聞くと、スレインは涙に濡れた顔で微笑んだ。それを伊奈帆は、世界で一番綺麗だ、と思った。

「そんなこと、聞かなくていい」

ゆっくりと触れ合った唇は少しかさついていて、冷たかった。触れるだけのキスをして、顔を離す。目を開けたスレインが伊奈帆を見て幸せそうに笑った。伊奈帆はスレインの涙を指で拭って、何度もキスをした。

「耳が赤い」

キスの合間に、スレインが柔らかい声で囁いた。その細い指が伊奈帆の耳に触れる。

「照れてるんだ」

「ふふ、自分で言うかな」

伊奈帆はスレインの首筋に唇で触れた。スレインの腕が伊奈帆の首に回される。強く吸うと、くぐもった声が聞こえた。

壁に凭れていたスレインを、ベッドにゆっくりと押し倒す。はあ、と艶っぽい吐息が漏れ、スレインは自分の口を手の甲で覆った。見ると、頬が赤い。照れているのはお互いさまだ、と伊奈帆はスレインの手をとって口付けた。

「いい？」

スレインのシャツに手をかけて伊奈帆が聞く。スレインは何度か瞬きをして、こくりと頷いた。

ボタンを一つ一つ両手で外す。ゆっくりはだけさせると、縦横に傷跡がはった白い肌が露わになった。その傷跡にそっと指で触れる。スレインが身じろいだ。

「あまり、触らないで」

伊奈帆の腕を手で押して、スレインが言った。

「…どうして？」

手を止め、聞く。スレインは掴んだ伊奈帆の手首をぎゅっと握る。

「…汚い。どうして、この傷が消えないか知ってるか？きつと、憎しみが消えないからなんだ。あんなに罪を犯して、僕には何かを憎んだりする資格はないのに、今でも思い出すと憎しみて気がおかしくなりそうなんだ」

伊奈帆はスレインに、どうしてこの傷がついたのか、何があったのかを聞かない。聞いたことはないし、これからも伊奈帆から聞くことはないだろう。理由を聞いて納得したり、分かった気になるのはただの自己満足だと思うし、伊奈帆が彼を生に繋ぎとめるためには、聞いては

いけない気がした。

「真皮の半ば以上に達した傷は、再生できずに跡が残ってしまうだけだ。憎しみとかそういうのは、関係ないよ」

伊奈帆はスレインの胸に手を当てる。少し速い鼓動が伝わる。生きているっていうのは、綺麗なことだと思う。傷ついて、苦しんで、いつも苛まれている彼がそれでも生きてくれている。自分の傍で、時々自分に死を請うて。

自分は狡いのかもしれない、と伊奈帆は思う。

「君の体だ。汚いところなんて一つもない」

そう言って伊奈帆は、スレインの傷跡に一度だけ口付けた。スレインは両手で顔を覆って泣いていた。スレインが泣き止むまで、伊奈帆はスレインの染められた髪を撫で続けた。

5 Owner

彼らが島に来て、三年になる。今日は、少し特別な日だ。私は、朝から落ち着きなく、フロ

アのモップがけやキッチンを整頓、テーブルとイスにアイロンをかけたクロスを掛けるなど、時間を持て余して過ごしていた。

ティーセットを丹念に磨いていると、カランとドアベルが鳴った。目を向けると伊奈帆とラルスだった。

「少し早いかな。いいですか？」

伊奈帆がマフラーを外しながら聞く。

「待ってましたよ。どうぞ掛けてください。準備はすっかりできていますから」

伊奈帆とラルスは、会釈をして奥のテーブルに腰かけた。私はとっておきのティーセットでお茶の準備を始める。冷蔵庫から、丹念に飾り付けをしたケーキを取り出し運ぶ。

今日は一月十一日。昨年から、この日はうちの店で彼らにケーキを振る舞う。他の住民を呼ぶと收拾がつかなくなるので、内緒にしている。蠟燭を刺して、マッチで火をつけた。小さな炎を見て、彼らはくすぐったそうに笑った。

「お誕生日おめでとう、ラルスさん」

そう、今日はラルスの誕生日なのだ。昨年の一月十日に一人で買い物に来た伊奈帆は、蠟燭

はないかと聞いたのだ。店には何種類か蠟燭があったので、どのくらいの大きさで、何に使うのか聞くうちに、バースデーケーキを作るのだと知った。そこまで聞いて、私は何かの使命感に駆られ「バースデーケーキを作るから、もし良ければうちの店でお祝いさせてくれないか」と伊奈帆に言った。伊奈帆は了承し、翌日ラルスを連れてやってきた。それが昨年一月十一日のこと。

二十四本の蠟燭の火に照らされて、ラルスの顔がオレンジ色に染まる。彼らは、私が思っていたよりずっと若かった。昨年の会話の中で彼らの年齢を知り、一回り以上も私と離れていることに軽くショックを受けたことを覚えている。惑星間戦争のときにはまだ学生だったのだと知り、複雑な気持ちになったものだ。

ラルスが小さな炎を吹き消して、二人分の拍手が響いた。取り分けるため、隣のテーブルにケーキを移動させる。ケーキを切り分けながら彼らを見ると、伊奈帆が目を細めて微笑んでいた。その手がそつとラルスの頬に伸ばされるのを見て、喜んでもらえて良かった、と思った。彼らが店にいる間に、何人もの住民が訪れた。お祝いにと、派手な包みや不器用にリボンをつけた結んだ品物などを持ってきたので、人と物とで狭い店内はさらに狭くなった。プレゼントとい

っても、既成の菓子や畑でとれた野菜や果物、石鹼やタオルなどさやかな内容だったが、彼らは照れくさそうに一つ一つを受け取った。みんな、二人が好きなのだ。

夕焼けの中、両手にいっぱい荷物を持って彼らは帰っていった。これから、彼らは二人でお祝いをするのだろう。来月は、伊奈帆の誕生日がある。私は弾んだ気持ちで店の片付けに取りかかった。

5 KV/ST

「ワインだ。飲んだことある？」

リビングで贈り物を整理していたスレインは、隣に座る伊奈帆の手に収まった緑色のボトルを見た。赤いリボンの結ばれた瓶を受け取り、ラベルの文字を読む。

「シャトーディケム…確か高級品ですよ」

「詳しいね」

伊奈帆が意外そうに呟いた。スレインは苦笑いして言う。

「父が好きだったので」

伊奈帆はそのまま少しの間スレインを見ていたが、立ち上がった。

「飲む？開けようか」

「そうですね。伊奈帆はお酒、飲めるんですか？」

「何回か、飲んだことはある」

そういつて栓抜きとアルミのマグカップを持ってきた。この家にワイングラスなどない、というかコップはこれしかない。少し凹んだマグカップをテーブルに置いて、伊奈帆は栓抜きをコルクにくると刺す。

スレインは机いっぱい広がっていた贈り物を丁寧に寄せ、包装紙を几帳面に折り始めた。

「はい」

栓を抜いてカップについだワインを、伊奈帆はスレインに渡す。フルーツのいい香りがした。

「ありがとう」

スレインが受け取ると、伊奈帆は自分のカップを持ち上げた。スレインは、伊奈帆のカップに自分のカップを軽く当てた。

「Happy Birthday.」

やたらいい発音で、伊奈帆が言った。スレインは呆気に取られて、しばらくぼかんと伊奈帆を見つめた。

「…びっくりしました。気障ですね」

スレインが言うと、伊奈帆はぷいっと横を向いた。耳が赤い。

「それ、違うんじゃないの」

普段はクールなくせに、時々やたら子どもっぽい。口を尖らせてそっぽを向く伊奈帆が可愛らしくて、スレインはくすくす笑った。

「ごめんなさい。ふふ、ありがとう。伊奈帆」

身を乗り出して、伊奈帆の頬にキスをする。伊奈帆は頭をがしがしと掻いて、スレインの唇にキスをした。

「あれは…」

花の水やりに、と外に出たスレインは、微かに聞こえるエンジン音に顔を上げた。目を凝らす。数機のシャトルが近づいてきている。

「伊奈帆！」

キッチンで朝食を作っていた伊奈帆は、駆け込んだスレインを見てすぐさまコンロの火を止め、エプロンを外した。そのまま走って寝室へ向かい、クローゼットの奥からアタッシュケースとボストンバッグを取り出す。

「シャトルが四機、軍用基地に向かっていきます。目測ですが十分後には着陸する」

そう叫びながら、スレインは車庫のシャッターを開け、軍用車に乗り込む。エンジンをかけたところで、伊奈帆が助手席へ飛び乗った。

「とばして」

「はい」

火星の元カタフラクト乗りは、メーターの限界速度で目的地に向かいハンドルを切った。

6 Owner

二月七日に、彼らは来なかった。というより、来ることができなかった。

平穏な日々は、突然変わった。あの誕生日パーティーから数日後、軍用施設に数基のシャトルが降り立ったのだ。どうしたことかと住民が様子を見に行くと、物々しい恰好をした連中が発砲してきたらしい。幸いそれは誰にも当たらなかったが、驚いた住民は転んだり倒れたりして怪我をした。私の店に知らせてくれた老婆は、伊奈帆たちはどこにいるのか聞いた。私はそれを聞いて、丘の上のコテージに車を走らせたのだ。

初めて訪れるコテージの扉を叩く。静かだった。返事がないのでドアノブを回すと、ドアは開いた。

中に入ると、良い香りがした。キッチンに足を踏み入れる。湯気の立つ味噌汁や、鮮やかな黄色のだし巻き卵は、調理の途中で投げ出されていた。

彼らはいなかった。きっと軍用施設に向かったのだ、と急いで車に飛び込む。その時、爆発音がして島の反対側から煙が上がったのが見えた。

危険だと思いながらも、私は車をとぼして軍用施設に向かった。すれ違う住民に、私の店に避難するよう伝える。私の店は、ヘブンスフォールの時にも避難所として使用した。備蓄庫として、地下室があるのだ。

軍用施設は、大きな爆発で燃え盛っていた。とても、近くまで行くことはできないだろう。伊奈帆たちはどうしたのだろう。この中にいるとしたら、とても生きていられるとは思えない。

煙の中、ヘリポートのシャトルが一機、飛び立った。

彼らはいなくなってしまった。

私は何度もコテージに足を運んだ。しかし、二度と彼らに会うことは叶わなかった。

どこかにいないかと部屋中を探し回り、いつ帰ってきてでもいいように掃除をした。整頓されていて、温かな住まいだった。住民が渡した誕生日のプレゼントは、包装紙も綺麗に畳んで纏

められ、大切そうに置かれていた。

洗面所を掃除していた時、小さなケースを見つけた。開けてみると、黒いコンタクトレンズが保存液に浸かっていた。

背筋がぞわりと粟立つ。

これをつけていたのはラルスに違いない。艶やかな黒い瞳。彼の黒い瞳は、コンタクトレンズの色彩だったのだ。そうすると、髪の色も黒ではないのかもしれない。

でも、どうしてそんなことを？

彼らは一体何者だったのだろうか。軍人と言っていたが、たった二人で、誰からも忘れられたようなこの島にやってきて、何をしていたのだろうか。二人はいつも一緒にいた。きっと、恋人同士だからだろうと想像していたが、それだけだろうか。

ラルスは徹頭徹尾一度も喋らなかった。島の住民は、彼は喋ることができないと思っていた。しかし、目の色を隠し、髪もおそらく自然の色ではない。隠すのは、見つかってはいけな何かがあるからだ。今では、彼は喋らなかったのだ、と確信を抱く。

それは、夕立の日の出来事だ。急な雨に洗濯物を片付けていると、道を走る二人が見えた。

雨宿りに休んでいくよう声をかけ、私は彼らを店内へ招いた。タオルと着替えを渡したが、彼らはタオルだけでいいと着替えを断ったのだ。雨はまだまだ止みそうにないし、乾かす間だけでも着替えてはと勧めたが、伊奈帆は頑なに断った。せめて温かい飲み物でも、とキッチンへ入った私は、ちらりと彼らに目をやった。二人は顔を近づけていて、私はあわてて目を逸らしたのだ。

その時はてっきり二人がキスをしていると早とちりして思い至らなかったが、あれは内緒話をするときの様子によく似ている。もしかしてラルスは、伊奈帆に何か言ったのかもしれない。その後ホットレモネードを運んだ時、二人はむっつりとしていて、喧嘩でもしたのか、と思ったのだ。

ラルスは、いつも伊奈帆の左後ろにいて、伊奈帆に添うように行動していた。伊奈帆は、ラルスが喋ることのないようにいつも会話の矢面に立ち、時々首をぐるりと回してラルスの目をじっと見る。それにラルスはいつも、小さく頷いていた。伊奈帆は不愛想だがいつもラルスを気遣っていたし、ラルスは伊奈帆に応えていた。二人の間には、真心があった。

伊奈帆は、ラルスを守るためにこの島へ逃げ来たのではないか。この島の通信設備は、とん

でもなく前時代的だ。テレビも、パソコンも、タブレットもない。この店にあるラジオと固定電話だけが世界と島を繋いでいる。正体が露見せず、また、追手からも見つからない、人間の住める場所。軍用施設の設備がどこまで整っていたか疑問だが、彼らはそこで生きるために戦っていたのだろう。

優しい、年若い青年たち。立ち上る爆炎の中飛び立ったあのシャトルに、二人が乗っていてくれたらいい。彼らが好きだと言ってくれたこの島は、彼らの故郷には成り得なかったが、いつか彼らも帰る場所を見つけられたらいい。できるなら、この島の思い出が彼らを温めてくれますように。きっと、あの笑顔の奥にあった幸せには、嘘はないはずだから。

7 ハイローグ KI/ST

夕日の中、一機の小型シャトルが北へ向かって飛んでいく。少し離れたところを、雁の群れが飛んでいた。それを操縦席から見て、伊奈帆は隣に座るスレインに話しかけた。

「知ってる？雁は隊列を組んで飛ぶけれど、仲間が負傷したり、はぐれたりすると数羽が隊列

から離れてその一羽をサポートするんだ」

「知ってる」

「そう」

「…」

「今回のことは、不測の事態だ。あれは、僕たちを探してきたわけじゃない。軍用基地を使えるようにしてしまったことには、責任はあるけれど」

「分かっています」

「僕たちがいたことで、被害は最小限に食い止められたと思うよ」

「そうかもしれません」

「…でも、人を殺すのは嫌だね」

「はい」

夕日の円形が水平線に接する。赤さを増した、燃えるような空の色の中を、二人を乗せたシヤトルは飛んでいく。

「伊奈帆」

「何」

「いいところでしたね。みんな、無事でしょいか」

「死んだ人はいない。爆発は大きいけど、周辺の家には被害はないはずだ。怪我をした人も、あの店長さんがいるから大丈夫だよ」

「伊奈帆」

「何」

「優しいですね」

「事実を言っているだけだよ。それに、僕はいつも君に優しいと思うけど」

「ありがとう」

「…今度は、どこに行こうかな。寒いところに行ってみようか」

「寒いところは苦手なんじゃないですか」

「何事も経験だよ」

そういつて伊奈帆は、操縦桿を握り締めた。

(2017-06-24)

世界の果てで
溢れるくらいのキスを

「想像できるかな」

「え？」

濃紺の軍服に身を包んだ年若い青年は、隣の上官の顔を怪訝に眺めた。独り言かと思ったが、上官はちらりと青年を見やり、続けて言った。

「外部との接触を一切断たれ、たった一人で部屋に閉じ込められた人間がどうなるのか。」

ここは海の上。彼らはフェリーの甲板で吹き付ける潮風に頬をさらしていた。生臭い。潮の香りが、青年は得意ではない。

「何の話ですか」

「部屋の中にはベッドとテーブル、少しの本。トイレとシャワー室。ハッチから配給される食」と服。窓はない」

声は低く、眼差しは遠い。前方には、青一色の海と空が広がっている。昇りはじめた朝日による海面の照り返しが眩しい。目的地には、まだまだ遠い。

「誰とも会わない。職員は、食事や洗濯などの雑務の他、監視モニタでその人物をチェックす

る。食事は食べたか、病気ではないか、おかしい行動はないか。そのうち、職員は精神を疲弊させ、もうできない、と代わりの職員が配属される」

鬱屈な仕事だ。自分ならどうするだろう、と想像した。少なくとも、今の仕事よりやりたいとは思わない。現在の待遇は、それなりに気に入っているのだ。上官は何か書物を誦んじるように澁みなく語る。年齢にそぐわず柔らかく若々しい声だ、と気付く。

「監視されているその人物は、おとなしい。朝起きて、顔を洗い、服を着替えて、朝ご飯を食べる。食事は一日一回だ。その後は、本を読み、排泄をし、祈る。他にも、体操をしたり、家具を移動させる。家具と言っても、ベッドとテーブル、椅子しかないけれど。時々、壁に話しかける。滔々と流れるいい声だ。話す内容は、誰かに話す体をとった独白か、誦んじた文学の一説、拙い歌。姿かたちは美しいその囚人に、監視員は、ずっとその光景を眺めたいという衝動と、監視モニタを破壊したい衝動に駆られる。その人物は疲れてくるとシャワーを浴び、眠り、そのうち日付が進み、起きて、そして食事が届く。そんな日々を過ごしている」

青年は、丸二年の付き合いになる彼の上官をまじまじと見つめた。上官はどちらかというと寡黙で、常に無表情か不機嫌を顔に張り付けている。今はどこことなく優しい表情が意外だし、

こんなに長く喋るのを初めて聞いた。

「自分には、わかりません。想像できるかと言えば、非人道的かつ非現実的です。何かの喩え話なのですか？」

青年が言うと、上官は顎で前方を示した。

「今、どこに向かっているか知っている？」

「カタフラクトの研究施設でしょう。今回はまた、随分古い施設ですね」

「そう」

そもそも、この上官と行動を共にするのは、軍の研究施設視察の任務のためだ。これまでの二年間、上官と共に世界中を巡った。一都市を形成しているかのような最先端の研究施設から、廃墟に近い無人のところまで。表向きの研究内容と施設の現状を報告する。研究の中には極秘事項も多数含まれており、それらはもっと別の、特別な機関が調査する。青年には、自分たちの任務が重要だとも思われなかったが、上官はいつも図面を熱心に見分し、施設を隈なく回った。

「この仕事ももう二年になるけれど。どうして、僕と同行することになったかは知ってい

る？」

「説明はありませんでした。考えたこともありません」

「納得できる？」

青年は三秒ほど考えたが、小さく首を振り答えた。

「さあ。納得してもしなくても、自分の任務が変わるわけではありませんから」

ドライだね。最近の若者は、そういう傾向が強いのかな。と上官は甲板の手摺りに背を凭れさせ、青年に体を向けた。上官は、自分より背が低い。顔立ちは、どちらかというと甘くて子供っぽい感じだ。しかし眉間の皺と冷たい眼差し、隙のない身の熟しにこの人は歴戦の軍人なのだと思ひ知らされる。

「それで君は、この現実はどう折り合いをつけているわけ？」

どうも何も、命令されたら従う。軍人だし、そういう性格なのだ。

「職務ですから。責任感も使命感も、人並みです。何かに首を突っ込むのは面倒です」

うん、なるほどね。そう言って上官は頷いた。

「何か答えをくださるのですか。界塚少佐」

左目に眼帯をつけた、隻眼の佐官は頷いた。

「うん。実はね、僕の上上司が君を同行させるよう無理を通したんだよ」

「その理由を、お聞きしてもいいでしょうか」

そこで界塚は珍しく困ったように笑った。笑うと、年齢より随分若く見える。青年には、少佐がこのような人間らしい表情をしたことが驚きだった。

「そうだね。一人だと、危険だから」

「危険？」

「何をしでかすか、分からないってことだ」

僕が。その言葉に、青年は背筋に何か冷たいものが滑り落ちる感触がした。

「先ほどの話は、任務に関係があるのですか」

少佐はあっさり頷いた。

「うん。要するに、ここは表向き研究施設だが、一人の犯罪者のための牢獄なんだ」

一応今も研究所は機能しているけれど、有能な人間は十年も前にいなくなつた。年寄りばかりだ。そう付け足した。

「一人の犯罪者？」

「そう。たった一人の犯罪者を閉じ込めておくための施設なんだ。大げさだよ」

現実の話だったのか。しかも、これから向かう先にあると聞いて、青年はまいったなあ、と心の中で頭を掻いた。面倒事は嫌いなのに。

「その犯罪者は、何をしたんですか」

「戦争だよ」

戦争？戦後育ちの自分とは縁の遠い言葉に聞き返す。

「つまり、十八年前の惑星間戦争の戦犯なのですか」

「簡単に言うかね」

ということとは、かつての火星騎士だろう。和平条約が結ばれ、現在では惑星間の行き来も一般的だ。交換留学生の取り組みも盛んだし、旅行だってできる。火星の女王が先日、アルドノア十七号炉の完成記念式典に訪れたとニュースでやっていた。火星騎士と呼ばれた火星人たちは地球と火星の架け橋として、今では揚陸城を開放している。

青年にとっては、教科書のような戦犯。目的は研究施設視察ではないという現実。

「それでは、今回の任務はその人物の尋問ですか」

尋問と聞いて、少佐は珍しく声を上げて笑った。今日はどうしたのだろう。やけに口数が多いことといい、意外な一面のオンパレードだ。

「今更そんなことしないよ」

「それでは、何をするために？」

そこで少佐は目を細めた。

この行動は、危険ではないのか。脳が警鐘を鳴らした。

「君は、僕を監視する目的で同行しているんだよ。二年前からずっとね」

そこから、記録データが送られているはずだ、と少佐は青年のある一点を指差した。青年は緊張で体を強張らせる。

「さっきの話はね」

少佐が目線をフェリーの進行方向へ送る。日はすっかり高く、海面がきらきらと瞬いた。その先、緑の木々に覆われた目的地が見えてきた。

「もう、十五年前の話だ。まだ僕が、君と同じ年だったころ」

自分は今年二十歳になった。計算すると、少佐は当時二十歳、終戦時は十七歳ということか。その若さで生ける伝説となった軍神の横顔を青年は見つめた。

二人の軍人が船を下りた。現在は午前六時。次にこの陸地を離れるのは十二時間後だ。フェリーの昇降口からいくとも離れていないところから、人がすんでいるとは思えない鬱蒼とした森林が広がっていた。

荒れた山道を進む。なんだって、こんなところに研究所などを建てようと思ったのか。汗が吹き出るが、上官は一定の速度で歩みを進めていく。こんなところに十二時間か、と青年はうんざりと息を吐いた。上官のことは嫌いではない。無口で怖い、口喧しくないし、厳格ではない。話し方はフランクだし、青年の性格をよく理解してくれている。あちらこちらの施設を調査するのも、旅行だと思えば気楽だ。この上官との二人旅は、意外と居心地がいい。

船上での話が青年の気分を重くさせていた。どうも上官の様子がおかしい。今回の任務は、いつもとは違うようだ。面倒なことになりそうだった。

取り留めない思考を続けていると、視界に突然それは現れた。

窓が一つもない、正方形の建物。コンクリートの打ちっ放しで、目を打つことを忘れた賽子のような、味も素っ気もない作りだった。薄汚れ、ところどころ緑に覆われた外壁。手入れはされておらず、周囲の風景に溶け込みつつあった。そもそも、フェリーをチャーターしなければ、交通手段もなかったのだ。

「界塚少佐」

先ほどから考えていた事柄を口に出した。

「どうして、自分が？」

「うん、当然の疑問だね」

軽やかな返答があった。少佐は、施錠された扉の前で立ち止まり、セキュリティキーを操作しだした。内ポケットからコンパクトな工具類を取り出して、パネルをどうにかしている。

「僕が君とバディを組んだのは、君がそれを着けていたからだよ」

橙の肉眼が一度向けられた。視線の鋭さに慄く。

「その、右目」

よく見えるだろう。言いながら、少佐の手は流れるようにパネルを外し、キーの内部を整然

と取り外していく。青年はそれを、右目と左目で見た。

「アナリティカルエンジン。僕はプロトタイプを使用していた」

少佐の手が左目の眼帯を取り外す。戦時中の負傷だと聞かされていた眼帯の下には、右目と同じ橙の目があった。微かな電子音が聞こえ、それが人工物であることを青年の右目が示した。少佐は左目にデバイスを装着し、セキュリティキーと接続する。会話のような電子音が数回響き、チャイムのような能天気な音が発生した。

ピ、と呆気なく扉が開く。少佐がデバイスを取り外し、振り返って両眼で青年を見た。少佐の左目がキィ、と音を立てた、ような気がした。

行くよ。と足を踏み入れる少佐に続き、扉の内部に入る。人工的な照明をやけに薄暗く不健康に感じる。長くて細い廊下が伸びていた。

時は遡る。

しくじった。

界塚伊奈帆は、目覚めてすぐそう思った。白い天井、耳障りな電子音、まるでコンクリートの中にいるような動かしにくい体。身に覚えがある状況に気付き、電子音が速いテンポで警告を鳴らした。手を伸ばそうとするが、感覚がない。

自分は、要人警護の任務についていたはずだ。状況からして、任務の最中に負傷したらしい。

ここはどこだろう。

どのくらい、眠っていたのだろう。

視線を彷徨わせると、シーツの上の剥き出しの右腕が目に入った。

ざわりと背筋が慄く。闘病生活で青白く艶のない肌は、それだけでなく年月の経過を感じさせ

る肌色だった。

今、いったい何年だ。自分はどうなった。どこが動いてどこが動かないのかさえ分からな
い。いや、それは意識がはっきりしたらすぐ分かることだ。それはいい。それよりも。

彼は、どうなった？

慌ただしく医師と看護師が入ってきた。伊奈帆は、矢も楯もたまらず纏れる舌で一体今日は
何年か、と尋ねた。

「二〇三一年の二月六日ですよ。」

嘘だろう、と愕然としながら、明日は自分の誕生日か、という事実が意識の端でちらつい
た。

十二年間、眠っていたらしい。

「スレインは？」

伊奈帆は見舞いに來たユキに開口一番そう聞いた。

記憶にあるより穏やかで大人びた姉の顔が、悲しそうに伊奈帆を見た。

施設は解体され、スレインは移送された。移送先は分からない。軍部の誰が関与しているのかも分からない。生死も、分からない。そう教えてくれた。

伊奈帆がリハビリを終えて退院したのは、その一年後だった。

三十二歳になっていた。軍には一応所属していたらしい。階級は二階級特進で少佐。復帰した伊奈帆は、元いたサイバネティック研究所に配属された。そもそも、この研究所内部の病院でリハビリをしていたのだ。

かつての配属先だが、見知った顔は、少ない。若者が多いようだ。ここでも取り戻せない年月の経過を見せつけられ、伊奈帆はぎりりと奥歯を噛んだ。

伊奈帆は退院したその日、かつてスレインが収容されていた極秘施設へ向かった。フロントガラスから見える景色は記憶とさほど変わらない。ハンドルを握る手が硬く強張っていることに気付いた。

ガラス張りの面会室。

薄暗い照明。

素っ気ないテーブルに置かれたチェス盤。

差し向かいに座る囚人。

次々にかつての記憶が呼び起され、逸る心臓がこめかみに汗を流す。もう解体されたのは知っている。そこにはもういないことも。こんな無駄なことを界塚伊奈帆がするとはどういうわけだろう。それでも、行かずにいることはできなかった。

着くと、赤煉瓦の壁面は蔦に覆われ、手入れされていない野草が建物を飲み込もうとしている。た。

そこは朽ち果てていた。伊奈帆は車から降りて、扉に手をかけた。鍵がかかっていた。

思い出す。二〇一九年の一月三十一日。

——最後に会った日のこと。

「また痩せた？」

「…食事は、残してない」

口を尖らせてそういうスレインの二の腕が目につく。握ると、親指と小指がつくのではないか、という細さに伊奈帆は眉を顰めた。

「ストレスかな。当然だけど」

このように会うのも、もう二年になる。それはスレインが自由を奪われた年月に等しく、伊奈帆はこれほど長い間、彼が大人しく生き延びたことに驚いている。収容当初はいつ死んでもおかしくないような危うさが満ちていたが、しかし今の方が深刻だと伊奈帆は危惧している。緩やかに、死に向かう一本道。

そんな未来が見えるようで、それを彼もわかっているようで、伊奈帆は会うたび焦燥に駆られる。

「少し、歩こうか」

「でも」

「許可はある」

管理体制は随分緩くなった。面会時間の制限はあってないようなものだし、看守なしで独房へ訪問することもできる。伊奈帆が申請すれば、月に二、三回くらいは二人で施設内の中庭を散策するくらいはできるようになった。

「少し、肌寒いかな」

中庭へ続く扉を開ける。コンクリートの壁に囲まれたせせこましい場所だが、それでも肌を感じる空気や遮る物のない空は心を慰めるのだろう。スレインが気持ちよさそうに目を細めるのを伊奈帆は横目で盗み見た。

何か、気の利いた話はないだろうか。柄にもなくそんなことを考える。

「そういえば、来週は僕の誕生日なんだ」

言うと、スレインはきょとんとした顔で伊奈帆を見て、小さく頷いた。

「そうか」

「二十歳だよ」

「…それはそれは」

どうも盛り上がらない。伊奈帆はふと思いついた。

「そうだ、お祝いしてよ」

スレインは間の抜けた顔で再び伊奈帆の顔を見た。

「…僕が？」

「ここには君と僕しかいないだろ」

スレインが、苦虫を噛み潰したような顔をした。収容当初のことを思うと、そのような表情の変化でさえ嬉しい。うきうきとスレインの隣に肩を並べる。

「成人式、って言って、日本では二十歳は人生の大きな節目なんだ」

「…」

「だから、特別な何かをしたいわけだよ。今年、その日は出張で、成人式に参加できなかったし」

「…ちょっとよく分からないが、お前は僕に何か、お祝いになるようなことをしろと？」

スレインが怪訝そうに伊奈帆を横目で見る。奇跡的に会話が成立したらしい。

「伝わってよかった。そうそう、その通り」

スレインは珍しく喜色を浮かべる伊奈帆からぎこちなく視線を外し、しゃがみこんで中庭の野草を弄りだした。

「しかし、僕にできることなんて、限られているぞ。プレゼントのようなものは無理だ」
伊奈帆はスレインの隣にしゃがんで、その肩をポンと叩いた。

「物じゃなくて、気持ちだよ」

「気持ち？」

面倒くさそうに伊奈帆の手を払いながら、スレインは聞き返した。

「ハート」

「いや、そうは言われても」

「今度来る時までに、考えておいてよ」

うんうんと唸り出したスレインと一緒に、独房への道のりを歩いた。来週が楽しみだ、と思
いながら。

——まるで、昨日のことのようだ。

十三年。当時の上官の多くは退官している。特に、惑星間戦争の内情を詳しく知る重鎮は悉く軍を退いていた。

伊奈帆は、ハッキネンの元を訪れた。プライベートだ。ハッキネンは、自宅の庭に伊奈帆を案内した。ささやかな庭園を連れだつて歩く。

「君が目覚めました、と聞いてね。きつと来ると思っていたよ」

頭髮が白くなり、眼鏡の奥の瞳は柔和だ。杖をつき、ゆっくりと歩くハッキネンの後ろで、伊奈帆は庭園の草花を眺めた。ふと、薄紫と白の紫陽花が目に残まる。蝸牛が二匹、葉の上に乗った。スレインは、きつとこういう場所が好きだろうと思った。

「君が来たら、全て話すと決めていた。さて、何から聞きたいかな」

白いガーデンチェアにゆっくりと腰かけたハッキネンは、穏やかな声で問いかけた。席を勧められたが、立ったまま伊奈帆は冷たく聞く。

「スレイン・トロイヤードはどうなりました」

ハッキネンは小さく息を吐き出し、ゆっくりと首を二往復振った。

「やはりそれか。もう、このような場所でその名を口にできるほど、時は進み、世界は変わった」

伊奈帆は拳を握りしめる。痛みは感じない。

「殺してはいない。しかし、生きているかは分からない」

ハッキネンは握りしめられた伊奈帆の左手を見て、そして左目を見た。伊奈帆の左目は、眼帯に覆われている。

「君が重傷を負い、いつ醒めるともしれぬ眠りについた。アセイラム女王は、何度か君の元へ見舞いを寄越したよ。しかし十年を境に、それも途絶えた。スレイン・トロイヤードの存命については、君が軍内から姿を消したことで責任の所在が有耶無耶になった。女王は、君がいなければ聞くことはできないからね」

伊奈帆の隻眼がハッキネンを睨みつける。老人は視線を受け止めそして目を閉じた。

「あの極秘施設は君が倒れて半年後に解体した。表向きにも実情でも、金がかかるという理由だ。しかし、あの男を殺すことはできない。あくまで自然に消滅してもらわなければ、と考えた。そこで、軍の研究施設に移送されることになったのだよ」

ぞわぞわと伊奈帆の肌が粟立った。あまりの怒りに握りしめた拳が震える。

「女王からアルドノア因子を与えられていたそうだからね。囚人としては金がかかるが、アルドノア因子の被検体としてなら、軍にもメリットがあるし金も出しやすい」

「実験体の間違いでしょう」

「反論はない。もう死んだはずの人間だからな。全てを知っているわけではないが、あの扱いはモルモット、と言われても仕方あるまいね」

十三年前の、瘦せた二の腕を思い出した。

「様々な実験を試みたらしいが、どうも成果は芳しくない。方々の研究所を盪回しにされたと聞くよ。私が軍にいる間は所在を報告させていたのだが、もう六年前だ。それももう途絶えた。今、あの男がどこにいるのかは、私には分からない。」

生きているのかも、死んでいるのかも。

「しかし、運が良ければどこかの研究施設にいることだろう」

ざあ、と風が吹いた。ざわざわと草木が揺れ、擦れ合う音がやけに鬱陶しい。

「最後に、連絡が来たのはここですが」

ハッキネンの眼鏡の奥の瞳が光った。

「君のいる所だよ」

音が消える。

「サイバネティック研究所」

がん、と頭を殴られたような衝撃だった。伊奈帆は反射的に踵を返した。しかし振り向き、ハッキネンを見下ろした。

「最後に、いいですか」

「どうして、君を殺さなかったか。どうして、スレイン・ザーツバルム・トロイヤードを殺さなかったか」

間髪入れずに聞こえた声は太く響いた。

「そうです」

「まあ、私は善人ではない。損得を考えるし、敵に容赦はない。軍人だからね。あの爆破テロに私は携わってはいないが、黙認した。君の存在は危険だと認識していた。あわよくば、という思いはあったよ。君が目覚めます前に、事故を装い抹殺しようとする輩はいた。私は迷った

がね。そこまでせずとも良いと思った。今更だ。実質世界から取り残され、羽を挽がれるのならばよからう、と思った。君には恩がある。未成年にあのような非人道的な行為を勧めておきながら、とは思うが」

ハッキネンはゆっくり立ち上がり、胸に手を当てる敬礼姿勢をとった。

「君の好きにすればいい。微力だが、償いはさせてもらおう」

「界塚少佐、こちらです」

矢のようにサイバネティック研究所に戻り、伊奈帆は所長室を訪れた。所長は伊奈帆より四歳年上で、一番の古株だった。数少ないかつての同僚で、一番年が近い。

伊奈帆は受け取った図面にその場で目を凝らす。

所長は研究所の図面を見せてほしい、と息せき切って現れた伊奈帆に驚きつつ、図面をラックから取り出し伊奈帆に手渡した。

しばらくして現れた所長は、湯気のとつマグカップを両手に持っていた。コーヒーを入れて

くれたらしい。香ばしい香りに、そう言えば最近食事を忘れていた、と伊奈帆は気付いた。ソファを勧められ、腰かける。入室したきり、立ったままだった。

「何か、探しているのですか」

向かいに腰かけ、コーヒーを口に運んでから所長は聞いた。草臥れた白衣とサンダル履き。薄い銀フレームの眼鏡をかけた所長は、いかにも研究者らしく好奇心を目に宿している。

「僕が探しているものを、知っていますか」

まるで禅問答のような返答に、しかし所長は驚きもせずじっと伊奈帆の顔を見た。

「今、いくつかの可能性を思っています」

そう言ってもう一口コーヒーを飲んだ所長は、マグカップをテーブルに置き膝の上で両手を組んだ。

「その中で一番面倒くさいやつが、僕が探しているものです」

「そうですか」

所長は、顎や額に手を当てじっと考えた後、伊奈帆に言った。

「少佐、こちらへ」

監視室です、と案内された室内に踏み込む。薄暗い部屋には大きなモニタが三つ、小さなモニタが壁面を埋め尽くしていた。所長は椅子に腰かけキーを操作する。大きな中央の画面の下、B版ほどの大きさのモニタが切り替わる。

映ったのは、狭い部屋だ。窓はない。独房のようにも見えるが、実験室だろう。

「この人物についてですね」

「そうです」

荒い画像だが、伊奈帆が見間違えるわけがない。過去の映像であっても、十数年ぶりにスレインの姿を視認して伊奈帆は喉がつかえた。髪が肩を過ぎるくらいまで伸びて、見慣れない、白っぽい病院着を身に着けている。見辛いが、首と腕、それに頭にも白い布が巻かれている。包帯か。

「これは、いつの映像ですか」

「六年前です。私は、当時副所長でしたがこの映像を見つけたのはつい最近です。この実験室を調べました。他にも、使用されていない場所は全て私が直接調べました。痕跡はありません

でした。データを洗い出しました。五年前、極秘で、一人の被験者が移送されています」

「それは、ここで死んではいない、ということですね」

「ええ。そして行先は多分、ここです」

所長が手持ちのタブレットを操作し、地図が立体的に浮かび上がる。所長は、もう、ここにもいないかもしれませんが、と申し訳なさそうに付け加えた。十中八九いないだろう、が、無駄じゃない。手がかりがあることに伊奈帆は安堵する。

「ありがとう」

「こんなことできません。少佐、わたしは先の惑星間戦争の内情は分かりかねます。軍神と称された貴方が、何を思い戦っていたのかも知りません。しかし、貴方を信じています。貴方の力になりたい」

どうぞ、と差し出されたタブレットを受け取る。

「苦労をかける。またいつか会えたら、酒でも飲もう」

きっと、もう二度と会うことはないだろう。しかし、叶えられない約束が大切な時もある。

「下戸なので、カフェの方がいいですね」

所長は齒を見せて笑った。

ところで、その美人は何者ですか。一番肝心なことを最後に聞いた。伊奈帆の返答を待たず冗談ですよ、と手をひらひらさせた彼は、額に手をかざす敬礼の姿勢をとった。

「申し訳ないことをした、と思っています」

肩を下げるその人を、伊奈帆はモニタを挟んだ対面で無感動に眺めた。別に、この人の責任ではない。謝る必要はない。しかし、そうしなければ気が済まないのわかっている。大人とというのは面倒な手続きが多いのだ。

「貴方は爆撃に巻き込まれたではありません。貴方は狙われていた」

「分かっています。今となつては、全て自明です。マグバレッジ艦長」

連合軍は、界塚伊奈帆を危険視していた。惑星間戦争の英雄にして、女王とも懇意の間柄。密かに生かされた戦犯とも浅からぬ因縁がある。連合のお偉方から見れば、伊奈帆の指先一つで平和が一掃される、と見做されるほどの条件が揃っていた。ダルザナは当時の要人警護にお

いて、伊奈帆の直属の上司だ。何も知らず、踊らされたと気付いた時には手遅れだった。

「失われた年月に、何をもって報いればよいですか」

切れ長の目が強い意志をこめて伊奈帆を見つめる。伊奈帆はこの人を、心底信頼してここにやってきた。

「話が早くて助かります。スレイン・トロイヤードは、今どこにいますか」

ダルザナは、微かに瞠目してから、小さく息を吐いた。

「…やはり、彼ですか。貴方の願いは」

「はい。力を貸してください」

予想はしていたらしい。彼女はキータッチしてモニタのスリープを解く。

「正確な場所は不明です。しかし、生きているらしい、という噂はあります。もう彼が何者かなど知らない人間が関わり、アルドノア因子保持者として研究対象となっているらしい。…と
いうことで、そのリストです」

細かい字でびっしりと埋め尽くされたモニタを凝視する。連番は79まであった。

「このどれかに、居ると？」

「可能性は高い。死亡していなければ、ですが。しかし、それらの研究所を訪ねても、職員は何も知らないでしょう。彼はトップシークレットです。搜索は困難ですよ」

「構いません。やることがあるほうがいい。どうせ、煙たがられて抹殺されかけた命です。一人大人しく余生を過ごすつもりはありません。」

余生というには若すぎる目の前の将校を前にして、ダルザナは目を閉じ、そして聞いた。

「少佐がそこまでするのはなぜか、聞いてもいいですか」

その問いかけに、伊奈帆が顔を上げた。自嘲するかのように口角を上げる仕草があまりに様になっていて、彼がもう少年ではない、大人の男なのだとダルザナは思い知らされた。

「多分、拗らせたんですよ。この年でもう、軌道修正は不可能です」

「拗らせた、とは？」

伊奈帆が言い淀み、がりがりと後頭部を掻いた。隻眼がどこか遠くの星を見るように細められる。

「好きだった。笑顔を見たいと思った。生きることが辛いなら、傍にいたいと思った。いつか、自由な空の下で笑い合いたいと思った」

そして、はにかんで笑った。少年のように。

「まだ、手を握ったこともないのに」

そう言って握りしめられた左手は義手であることを、ダルザナは思い出した。

「野暮なことを聞いてしまったようです」

ピ、と次の話題のためのデータを呼び起こす。

「監視役という名目でサポートをつけると、ハッキネン元中将からの進言です。この人物を同行させます」

モニタが切り替わり数枚の画像が表示された。まだ学生のような雰囲気、軍服の青年だ。伊奈帆に心当たりはない。

「誰ですか」

「貴方の役に立つと思います。人選は私です」

それは、この人物を通じてダルザナのサポートを受けられるということだ。艦隊司令官の助力である。

「彼は、貴方と同じです」

モニタに、新たな情報が映し出され、伊奈帆は目を見開く。

「アナリティカルエンジンを装着しています。彼の右目を通じて、貴方のサポートを全面的に請け負いますよう」

——そして今。青年の右目に映るのは。

「君の右目は、どうしてアナリティカルエンジンを入れている？」

この研究所には、七人の人間がいた。研究者が二人、管理者が二人、医者、調理師、事務員が一人ずつ。彼らに来訪の目的を告げ、界塚少佐はマスターキーを受け取った。

二人で、複雑な通路を進む。ここは地下だろうか。何度も曲がり、上がったたり下がったりして今どこにいるのか全く分からない。徐々に現実感を失っていくそんな中、青年は発せられた一言に冷水を浴びせられたように現実に立ち返る。無駄話とも思えない少佐の言葉にぐくりと

喉が鳴った。

多分、全て知っている。

からからに渴いた喉から、ひゅうと呼吸が漏れた。

「…十五年前の新芦原爆撃テロで負傷しました。右目を失った当時五歳の自分は、サイバネティック研究所に勤務していた父により、アナリティカルエンジンを移植されました」

あの爆発での負傷者は十八人。もっとも重傷だったのは、自分と、そして目の前のこの男。軍神と呼ばれる死神。

「ご存知でしょう。貴方も、そこにいた。テロの現場に。調べると、あのテロは貴方を狙ったものだったらしい。その左目と左手は、その時の負傷によるものではありませんか」
まるで堤が決壊したように、言葉が溢れてくる。おかしいな、自分はあの事件にこんなに拘っていたのだろうか、と自身の感情に翻弄される。

「少し違う」

少佐の冷静な声が響いた。通路はまた行き止まり、少佐のマスタキーで壁面の扉が開く。少佐がエレベーターに乗り込み、ドアの外にいた青年と向かい合い、目が合った。

「僕の肉眼の左目は、その三年も前に失われていたんだ。あのテロで失ったのは左腕だ」

少佐がエレベーターのドアに手をかけ、閉じかけたドアを開く。ポン、ポン、と電子音がドアを閉じるよう急かす。少佐はゆっくりと口を開いた。

「君が軍人になったのは、僕に復讐するため？」

「違います」

「じゃあどうして、追いかけてきたのかな」

「追いかける、とは？」

何のことだ。考え込む青年に少佐は微笑んだ。

「君の経歴を見ると、僕の足跡をなぞったようだよ」

はっと息を呑んだ。確かに、知っている。高校も、入隊も、配属も、この上官の足跡を自分
は調べて知っている。

そして、この二年。この人の背中を見続けた。

「そうかも、しれませんが。追いかけていたのかも。…自分は、あまり執着がない。物にも人にも。でも、少佐が自分と同じアナリティカルエンジンを身に着けていると知り、興味を持ちま

した」

右目の人工物に触れる。幼い頃から慣れ親しんで、もう自分の一部であるその球体。

ポン、ポン、と電子音が相変わらず煩い。

怖くなる。

「自分は時々恐ろしくなります。少佐、この目は、自分の知らないことまで知っています。見ようと思えば、信じられないほどのものを見ることが出来ます。僕がこの目を使っているのか？僕が使われているのか？こうやって考える自分は、もう生来の自分ではないのか？」

怖い怖い怖い。言葉にしたことで、もっと恐ろしい。

自分は、自分は生きているのか？

意思はあるのか？

ポン、

ポン、

ポン。

ピ…、

エレベータの音の隙間、ピピピピ、と別の電子音が響いた。右目の映像が切り替わる。自分の姿が映し出されて顔を上げた。

少佐が僕を見ている。

少佐のアナリティカルエンジンの映像だ。

「もう一人の自分だと思えばいい。使いすぎなければ、悪さはしない」

ピピピ、と自身の右目が音を立て、映像が元に戻った。ふらつく膝に手をつき呼吸を整える。

「領域を拡大する必要はない。君は、君だよ。必要ないなら、取り外せ」

「取り外す…」

早く乗りなよ、と言われ、開いたエレベーターにふらふらと足を踏み入れた。浮遊感に気が悪い。

「父親の形見か」

その言葉に、やっぱり全部知っていたんじゃないか、と青年は上官を睨んだ。

扉が閉まり、床が揺れる。

浮き上がるのか、沈んでいるのか。

エレベータの扉が開いた。短い通路の先、白いドアが見える。

「物が人を繋ぐんじゃない。君の記憶、思い出と呼べるものしか抛り所はない。物に心乗っ取られてからでは遅いな」

いつになく早足でその扉に歩み寄った少佐は、マスターキーで躊躇いなくセキュリティを解除した。壁面のパネルに指を伸ばした少佐の口から、「どうか…」と小さく祈るような声が聞こえた。ぐっと力をこめ、彼は扉のスイッチを押した。

——白い。

扉の中は、狭い部屋だった。人工的な明かりで照らされた壁の白さに目を細める。しかし目

が慣れよく見ると、壁紙は少し黄ばみ薄汚れていた。ところどころ茶色い染みが滲んでいる。少佐の肩越しに室内を眺める。簡素なテーブルには、四冊の本。その横の壁にハッチが三つ。小さな扉はトイレとシャワーだろうか。窓はない。そして。

壁際のベッドの上に、人間がいる。

壁に背を預け、膝を立てて座っていた。本を読んでいたようだが、膝の上で開かれたまま、今は来訪者に顔を向けている。長い髪で顔が隠れ、顎先しか見えない。白くて、華奢な顎だった。髭はない。女性にしては、骨格が硬い。体は病的に細く、半袖から伸びる腕は手の甲までぷくりと血管が青白く浮き出ている。その細い腕が顔にかかる髪を無造作に後ろへはらった。髪が背に流れ、はつきりと顔が見える。青年は思わず息を呑んだ。それは、その人物があまりに美しかったからだ。

いったい、いくつなんだろう？

場違いにそんなことが脳裏をよぎった。十九年前の戦犯なら、三十歳は軽く超えているは

ず。しかし目の前の人物は、年齢も性別もよくわからなかった。息をしているのかどうかも疑わしいような感じだ。まるで作り物のような無表情だが、人形やマネキンというより、CGのような美しさだった。触ろうとしてもすり抜けて、スイッチ一つで消えてしまうような…。

「界塚」

薄い唇から漏れ出た声に驚く。何て声だろう。その掠れた声で、少佐がずかずかとベッドに歩み寄った。

「ごめん」

そう言って、少佐はその人をぎゅっと抱きしめた。そんなに力を込めたら、壊れてしまうのではないか。白い手が黒い髪を撫でた。少佐の肩口から、その人の顔が覗いた。目をまん丸く見開いて、不思議な色の瞳が揺れている。先ほどまで人形めいて静謐だった造作が綻び、泣き笑いのような表情を浮かべた。良かった、人間だ。そう思った。一度ゆっくり閉じた瞼から、数滴の雫が頬を伝った。

「生きていたか」

囁くような声で、掠れて、ほとんど聞き取れなかったがそう言ったことは分かった。少佐は

ますます抱く腕に力を込める。

「迎えに来た。遅くなってごめん」

本当に、待ちくたびれた。涙を流し笑うその人を見て、青年はきつと天使がいるならこんな姿をしていると思った。

ひとしきり再開を喜んだ後、囚われ人が青年を瞳に映した。美しい顔に見つめられ、青年は落ち着きなく後ろ手で組んだ指を動かす。

「彼は？」

「僕の監視役」

囚人が顔を顰めて青年を頭の上から爪先まで見た。青年はますます居心地悪く、天井を見た。

「気の毒に……」

「気の毒かどうかは、彼が決めるさ」

少佐はその人に手を差し伸べた。二人の左手が触れあい、淑女をエスコートする紳士のよう

に、無骨な義肢が蠟人形のような白い手を引いた。並び立った二人は、恥ずかしそうに笑顔を交わす。

「さて、准尉」

少佐が囚人を庇うようにこちらに向き直った。軍服を隙なく身に着けた軍神と現実離れた美貌の囚人のツーショットに、青年は冷たい汗が背中を濡らすのを感じた。

数十の、数えるのも面倒なほどの研究施設訪問で少佐が食い入るように図面を見つめ、隈なく歩き探し求めたもの。実際に目にしてようやく分かった。何に変えても探し求め、手に入れるほどの何かだ。それがこの人ならば、きっと自分はここで死ぬだろう、と思った。

「はい」

「見ての通り、僕らは並々ならぬ間柄というわけだ。もう気付いていたと思うけれど、僕は研究施設の調査という名目ですつとこの人を探していた。そして見つけた。このまま行方を睨ますことにする。君は、どうする？」

青年はえっ、と声を上げた。

「自分を消さないのですか」

てっきり、ここで死ぬと思っていた。

「うん。君を殺すつもりはない。しかし速やかに上に報告されても困る。できれば、逃げ切るだけの猶予がほしい。十七年もかかったんだ。もう、邪魔されたくないからさ」

どうせ、僕らが消えても世界は恙なく運行されていくだろうし。少佐の両目は、どこか遠くを見ていた。

「具体的に、少佐の要望を仰ってください」

「君はここで、僕に殴られ気を失う。そして、目が覚めたらフェリーで帰る。できれば、明日の午後の便を希望する」

「嫌だと言ったら？」

「結果はかわらないな。僕が手加減するか、しないかの違いだけ」

しかし君は、嫌だとは言わない。僕は君を結構気に入っている。

「君は僕に似ている。だから、嫌とは言わない」

「自分が、少佐に？」

少佐は、にやりと笑った。後ろで、囚人がやれやれといった表情で溜息をついた。

「若くて、分かりやすい。君は自分には執着がないというが、自分の感情を隠し切れない。軍人っぽくない」

「そうですか……」

「褒めてる」

そうか、褒めてるのか。軍人なのに、軍人らしくないと言われているのだが。

「迷いのない軍人は空恐ろしいよ」

確かに、今自分は迷っている。青年は思った。少佐に憧れていた。目の前に現れた囚人に目を奪われた。このまま二人は去るという。もう二度と会えないだろう。

ただ行かせてよいのか、という迷いがあった。

「追われる身になりますよ」

「当然だよ」

「その人を連れて、逃げ切れると」

後ろの人が、素早く自分と少佐に視線を送った。心配そうな表情だった。

「それも、当然だ。僕が何の準備もなくここにいるとは思っていないだろう」

その通りだ。この上官の頭脳の明晰さと用意周到さは、この二年間の付き合いで骨身に沁みて分かつている。

「どうしてそこまでするのですか」

この頭のいい上官が、こんな無謀なことをするなんて。いくら準備があったとしても、この先、どこか世界の端っこでひっそりと暮らすくらいしか、選択肢はないだろうに。

「そうだな。もう、限界なんだよね」

「限界？」

「この人のいない世界で生きることがさ」

少佐の後ろで、囚人が胸元でぐっと手を握った。噛みしめた唇を見つめる。やはり、綺麗だ。人形のような先ほどよりずっと。

唐突に、場違いも甚だしい、今更と言えば今更な疑問が口をついて出た。こういう場の空気を讀まない一言。これが自分の欠点の一つだ。

「お二人は、どういう関係のですか」

その言葉に、目の前の二人組はまじまじとお互いを見合い、やがて小さく吹き出した。少佐の左手が囚人の左手をもう一度力強く握った。

「初めは敵、次は軍人と囚人、今は自分の一部のような人かな」

「自分には分かりません」

「君も、恋をすれば分かるよ」

少佐は消えた。ように見えた。目が覚めると、少佐が信じられない身のこなしで自分の首に手刀を入れ、六時間二十四分の時が経っていることをアナリティカルエンジンが報告した。誰もいない白い部屋を何度も見渡して、溜息をついた。少佐は探し物をようやく見つけ、そして取り戻したのだと知った。

——六時間前。

「君が生きていて良かった。ここに来るまでに、時間が掛かりすぎてしまった」
来た道とは違う通路を、伊奈帆は次々とセキュリティを解除しながら進んだ。手を引かれて

いるが、体力も筋力もないスレインは足がもつれ何度も転びそうになる。

「そうそう死なないさ」

ぜえぜえと息を切らせながらも、どこか楽しげな表情を浮かべるスレインに伊奈帆は目頭が熱くなった。

「あれから、十七年経ったよ」

海岸で、君を殺し損ねてから。死の自由を奪ってから。

「もう、そんなになるか……。お前、老けたな」

「君は痩せすぎだ。食事は残すなとも言っていただろう」

まるでかつての面会室に時が戻ったようだ。つい口煩く言ってしまった伊奈帆に、スレインが口を尖らせる。

「運動もしないで食べられるわけがない。それに、食事の量や回数は僕が決められることじゃない」

通路の曲がり角でちらりと振り返り、伊奈帆はスレインを見た。内肘のあたりの肌色に変色している。首や手首には、消えなくなった痣が斑に残っていた。不気味なほどに目が大きく見

えるのは、痩せすぎだからだ。頬がこけて、顎が薄い。長い髪は艶なく、ところどころ纏れ、絡まっている。義手の左手で握った手から体温が感じられないが、きっと正常ではなく、冷たすぎるか熱すぎるかだろう。目が潤んでいるのは、感情的なだけではなく体温が高いからだ。どう見ても、長生きはできない有り様だ。

本当に、生きているうちに会えてよかった。

「どうして、髪が長いのか？」

鼻の奥がつんとして、話していないと泣きそうだった。伊奈帆の質問にスレインは喉の奥で笑った。

「これくらいしか、自由になることがなかったから」

結構時間が経っていたとは思ったが、まさかお前が来なくなって十五年も経っていたとは驚いた。彼は息を切らせながらそう言った。

「どうやって正気を保っていたの？生きていても、おかしくなっているんじゃないかと思っていた」

またエレベーターだ。マスターキーで開錠する。急いで乗り込み、バランスを崩して倒れそ

うになるスレインを支えた。はあ、はあ、と苦しそうな呼吸の合間に、スレインの白くとがった指先がトントン、と自身のこめかみをたたいた。不揃いな爪はぎざぎざとしていた。

その仕草に思い切り顔を顰める伊奈帆に、スレインはしまった、と困ったように笑った。

そんな笑い方だけ、昔のままなのだ。

「お前と、チェスをしていた。ここで」

ふう、と大きく息を吐くスレインの肩を支える。凭れ掛かったまま伊奈帆を見上げて、スレインは不敵に笑った。

「今の僕なら、お前がどんな手を指そうともコテンパンにできる」

その挑戦的な眼差しに、面会室よりも前、宇宙よりも前、ノヴォスタリスクよりもさらに前の、オレンジ色の夕焼けの中の共闘を思い出した。

「言ったな。負けたら、どうする？」

「お前の言うことを、何でも聞いてやろう」

ポン、と電子音がしてドアが開いた。手を引き、走り出す。

「その言葉、覚えておいてよ」

まずは、こいつを腹いっぱいにしてやろう。そして、酒でも飲もう。チェスもいい。

——自分たちの余生は短い。

スレインはそろりと、自身の手を引き歩く男の後ろ姿に視線を注ぐ。体格ががっしりとして、大人の男らしくどこか雑で大きい走り方だ。人生のほとんど半分を世界から隔離されていたスレインは、そんな伊奈帆の後ろ姿を見て複雑な気持ちになった。

僕のことなんて、忘れてくれて良かったのに。

そんな馬鹿な事が頭に浮かぶが、言葉にはしなかった。言葉にするには、過ぎ去った年月が大きすぎた。その間の界塚の苦労を思うと、残酷な言葉だ。

それに。

嬉しい。そう感じる自分がいた。

そんな気持ちはまだあったなんてな。心の中で一人ごちる。

息が切れるが、足は動く。軽く。力を込めて床を蹴る。握られた手をしっかりと握る。

そう、嬉しかった。悪夢にも、退屈にも、苦痛しか伴わない生きる作業にも、とうに諦めはついていた。生きるふりをするのは上手になった。

感情など失われたと思っていた。

でも、ドアが開いた。

ドアが開いて、界塚伊奈帆がそこにいた。その驚きと不安、胸を満たすあたたかな喜び、そしてざあっと通り抜ける突風のような感情。

それは外。生。自由。

自由とは、風のようなだ。

自分より、少し背の高くなった後頭部を見つめる。

この男は、いつも風を運んでくる。いや、それは違うかもしれない。彼自身が風なのだ。時に風を。

突風を。

春風を。

潮風を。木枯らしを。雨風を。

ああ、好きだな。

どかどかと心臓がうるさい。ひゅうひゅうと肺が悲鳴を上げる。足がぐくぐくして膝が震えるそれでも、生きている喜びを感じてスレインは微笑んだ。

伊奈帆が両手をドアの取手にかける。重量のありそうな戸を力いっぱい回す。光が差し込み、目が眩む。

扉が開いた。

——空。

衝撃に、思わず目を固く閉じる。髪と服がばさばさと波打つ。スレインの肌が粟立ち瞳から涙がこぼれた。風だ。そして空。光。

また、世界を見ることができるようなんて。

目を開けると、近くに伊奈帆の顔があった。足を止め、待っていてくれた。屋上に出たらし

い。一機あるヘリコプターへ手を引かれる。

「界塚」

「うん？」

「今更だけど、誕生日おめでとう」

伊奈帆が勢いよく振り向いた。珍しく、とても驚いた顔をしている。そしてさらに珍しいことに、肩を上下させて子どものように嬉しそうに笑った。

「…覚えてたの」

つられてスレインも笑った。

「お前こそ」

スレインの白い手の平が伊奈帆の頬を包んだ。かさつく指先が、確かめるように目や、鼻や、頬を辿った。伊奈帆は目を閉じた。彼の皮膚を肌で感じる。ああ。そっか。

そういうや、初めて手を握った。右手で握れば良かったな。

「ハートだって、言ってたから」

指の腹で唇をなぞられ、唇が重ねられた。少し震えている。柔らかくて、少し甘くて、苦い

味がした。伊奈帆がスレインの丸い頭蓋を支えて舌を絡めると、ちゅ、と吸い付き唇が離れた。

「続きは、後で」

そう言ったスレインは目の周りも耳も真っ赤にしている。自分がしたことなのに盛大に照れていて、伊奈帆は声を上げて笑った。右手で手を握って二人でヘリコプターに乗り込むと、今度は伊奈帆がスレインの顎を掬ってキスをした。

短い余生だが、精々長生きしよう。

毎日、腹いっぱいにしてやろう。時々、酒でも飲もう。

二人で、チェスをしよう。

——そして、溢れるくらいのキスをしよう。

Ta voix me manque.

(2016-08-24)

訳) あなたの声が 聞きたいです。

「人間は死ぬとき、聴覚が一番最後まで残っているらしい」

伊奈帆の言葉に、スレインが瞼を上げた。

「こんな話は嫌い？」

スレインが小さく首をふる。柔らかい髪が首の動きに合わせて広がった。

「いいえ」

伊奈帆は、肘をついて体を起こし、枕の上のスレインの顔を見下ろした。

「もし君が死んだら」

重大な告白をするように、伊奈帆はごくりと唾を飲みこんだ。喉仏が上下する様子を、スレインは見上げる。

「僕は、そばにいたい」

スレインの視界が天井を映す。色あせた天井は、薄明の青に染まっている。伊奈帆の声を聞きながら、終わりを迎える日を想像した。

「…本当にそうになったら幸せだ」

少し怠い左腕で、伊奈帆の髪に触る。少し癖のある茶色い髪に、指を差し入れる。耳の上

に、小指の爪くらの大きさのつるりとした感触があった。

「何て…」

もう開くことのない左目に、指の腹でそっと触れる。睫毛をなぞると、伊奈帆が擦ったそうに肩を竦めた。

「うん」

「僕が死んだら、何て言ってくれる？」

伊奈帆が、スレインの右手に自分の左手を重ねた。スレインは、伊奈帆の手の温度に目を細める。温かい。伊奈帆が首をぐりと回して、橙の瞳にスレインの碧が映り込んだ。伊奈帆の声が優しく響く。

「君がいてくれて、良かった、って」

伊奈帆がスレインの頬を両手でそっと包み、スレインの額に伊奈帆の額が重なった。こつんと小さな音がした。

「いつも、そう思ってる」

スレインは、伊奈帆の背中に左腕を回す。隆起した肩甲骨に手のひらで触れる。

「でも、その時が来たら、ちゃんとと言えるか自信がない。努力するけど」

想像したら、涙が出てきた、と言って伊奈帆が目を擦った。伊奈帆は目元を赤くして、スレインの背中を支えて抱きよせる。二人の間で、ペンダントの鎖がカシャリと音を立てた。

「だから、今言うよ。明日も言う。ずっと、言う」

伊奈帆は、スレインの肩に顔を埋めて言う。伊奈帆の息が耳にかかる。

「君に会えて、よかった。君がいてくれて、僕は幸せだ」

伊奈帆の右目から、ぼたりと一滴の涙がスレインの肩口に落ち、筋を辿って鎖骨に留まる。

幾筋もの涙はいつしか二人分になり、その窪みへ流れ込み、あふれた水滴が肌を伝って消えない傷跡を濡らした。

「泣かせたいわけじゃないんだ」

伊奈帆が腕に力を籠めると、スレインが嗚咽を漏らして、縋りつくように伊奈帆の背中を掻き抱いた。

「大事にしたい。笑ってほしい。できるだけで、いいから」

伊奈帆が、少し体を離して両手でスレインの頬を濡らす涙を拭う。スレインは、伊奈帆の唇

が震えているのを見た。はにかんだ笑顔が目の前にある。

「今、愛の告白をしたんだ」

橙の瞳と、碧の瞳が交錯する。このまま、時が止まってしまえばいいのに、と思う。

「……はい」

スレインは、顔をくしゃくしゃにした。眉が下がり、瞼が腫れて、真っ赤になった白目に囲まれた碧色が、伊奈帆を映している。小刻みに震える唇を懸命に持ち上げ、笑いの形を取ろうとするが、上手くいかないようだ。瞬きして、目尻から透明な涙がこぼれ落ちた。泣き顔にか見えないが、伊奈帆はこの笑顔をこの上なく愛しいと思った。

「ありがとう。」

伊奈帆も笑った。もし、他の誰かが今の二人の顔を見たら、よく似た顔で泣いているように見えるだろう。

「伊奈帆。ずっと一緒にいたい。伊奈帆といると、幸せです」

そう言ってスレインは、伊奈帆の左手を自分の胸に触れさせる。小さな振動が、絶え間なく手を伝う。伊奈帆はこの鼓動が理不尽に止まることがないように願いを込めて、その場所にキ

スをした。

「…スレイン」

真白な部屋の、真白なベッドの上に横たわるスレインの真白い顔を、伊奈帆はのぞき込む。淡い金色の髪がパラパラと散らばっている。伊奈帆は、その細い髪を指で梳いた。そして、乾いてざらざらした頬を撫でる。落ちくぼんだ眼窩を包む薄い瞼。そこから覗く碧の色彩が、何もかも真っ白な室内で鮮やかに際立った。

「伊奈帆…」

ほとんど聞こえないくらいの声で、スレインが伊奈帆を呼んだ。かさかさにひび割れた唇に、耳を近づける。

「うん」

視界がぼやけて、熱い。もう世界がぼんやりとしか見えない伊奈帆の右目はそれでも、スレインの碧の目を鮮やかに捉えていた。

「あの約束…覚えてる…？」

スレインの顔が歪んだ。自分には笑顔だとわからない下手な笑顔。毎日、二人が繰り返してきた愛の形。目を凝らして、最後になるだろうその笑顔の奥にある感情を零さず掬い取ろうとする。

「うん」

ぼたぼたと落ちる涙がシャツに染みをつくる。伊奈帆の声を聞いて、スレインは目を閉じた。安らかな顔だった。

「スレイン、」

震える声で、伊奈帆は言葉を紡ぐ。あの日から欠かされることがない心の底からの願いと祈りは、今この時届くだろうか。

「ありがとう。愛してくれて。ずっと一緒だ。君がいて、僕は幸せだ」

やさしく閉じられた瞼と、ゆるやかな弧を描く口元は、安心しきった子どものようだった。いつもの、顰め面の、懸命な笑顔を思い出す。死を渴望しながらも生へ執着した。痛みを伴いながらも伊奈帆の祈りを受け入れた。証のようなその笑顔。

愛していた。全てを。愛している。心から。

「笑ってくれて、ありがとう」

そう言って、伊奈帆は泣いた。あの約束をしてから、長い年月が経った。白い、骨と皮だけになった皺だらけの手を、やはり皺の目立つ、日に焼けて少し染みができた手が包んだ。

初めて訪れる。その丘の上。界塚伊奈帆はとても小さくなってしまった愛しい人を持って、ゆっくと丘を登る。ここは、軍の共同墓地の片隅だ。緑の原っぱのずっと端。小さな墓が一

っただけぽつんとあった。

息を切らして登りきると、先客がいた。白い車椅子がゆっくりと回転し、黒いスカートの裾が風に遊ぶ。その人物の横顔が伊奈帆を視界にとらえ、勢いよく顔を上げた。彼女は両手を胸の前で握り、言った。

「やっと、会えた。貴方は、界塚伊奈帆さんですね」

自分と同年代くらいの、小さな女性だった。はっきりとは視覚できないが、初めて見る顔だ
と思う。

「貴方は？」

伊奈帆が聞くと、薄いピンク色の髪を揺らして、彼女は笑った。青い瞳が、悪戯っぽく光る。

「私は、スレイン・ザーツバウム・トロイヤードの婚約者です」

伊奈帆はらしくもなく、口を開けてぽかんとその顔を見た。婚約者と名乗った女性は不躰な視線を受け止め、困った顔をして笑った。

「そんなに怖い顔をしなくて。レムリナといいます」

ようやく伊奈帆は、戦時中にアセイラム姫の役目を果たしていたもう一人の姫に思い至る。

半世紀も前にアセイラム姫の姿でスレインを夫に迎えると言った映像が、昨日のことにように鮮やかに思い出された。

「火星のプリンセス？」

伊奈帆が聞くと、レムリナは左右非対称に顔を歪めた。その表情は、なんとなく、スレインに似ていると思う。

「火星に行ったこともないのにね。月で生まれて月で育ったの。長いこと地球に住んでいるし。ルナリアンってところかしら」

そんなこと、どうだっていいわ、とレムリナが言い、二人の間を風が通り抜ける。伊奈帆は、風が笑っているようだ、と感じた。

「スレインは、どこに？」

レムリナの言葉に、伊奈帆は手に持った木箱へ視線を落とした。

「…そう。やっと会えた」

伊奈帆は、レムリナの前に立ち、彼の欠片を差し出した。レムリナが、入れ物の表面を両手

で撫でる。泣き笑いのような頬を、風が撫ぜた。桜色の髪が、涙を隠すように顔を覆う。

「僕を待っていた？どうして？」

レムリナは、そんなこともわからないの、と言いたげな様子で鼻を鳴らした。

「貴方がスレインを攫っていったから」

彼女は潤んだ目で小さく首を傾げ、両手を顔の横でふわりと合わせた。伊奈帆はその動きを見て、人間はこんなに可憐な仕草ができることを初めて知った。

「レムリナさんは、スレインが処刑されたと聞いてから、ずっとここに来ていた？」

伊奈帆は、分かりきったことを聞いた。自分でも、そうするだろうと思うからだ。

「ええ。花を欠かしたことはないわ」

見ると、墓前に赤い薔薇が供えられていた。生きていると信じながら、墓を訪れる。墓の下に愛しい人がいないよう願いながらも、死出の手向けに花を飾る。その行為は矛盾している。しかし、とても美しい。

レムリナが、両手を膝の上で上品に重ね、伊奈帆を見上げた。

「ねえ。一度だけ、その頬を打たせていただけないかしら」

可憐な声とは裏腹に、瞳は燃えるような色を宿している。伊奈帆が片膝をついて首を垂れると、バチンという鈍い音が響いた。衝撃によって尻餅をつく。

「ありがとう」

空を集めたような青い瞳から、涙があふれる。しゃくり上げながら、レムリナは言った。

「愛していたの。ずっと」

両手で顔を覆った彼女の小さな肩を、伊奈帆はそっと抱いた。長い長い、彼女の孤独を思う。

「貴方は、ひとり？」

レムリナはこくりと頷く。上げた顔は涙で濡れていたが、優しさを湛えていた。強い瞳だった。

「伊奈帆さん。私と、話をしましょう。きっと、私たちは友だちになれると思うわ。だって、あの人は本当に優しい人だったんですもの」

その言葉に頷き、伊奈帆は白く華奢な手の甲を持ち上げそっと唇を当てた。

車椅子を押して、丘を下る。振り返ると、墓前の赤い薔薇の花びらが風を受け、さわさわと揺れていた。それはまるで、彼が微笑んでいるようだった。

往復書簡

(書き下ろし)

2020.6.6

「降参だ」

ふう、と一呼吸して椅子に凭れなかったのは同時だった。一週間ぶりの対戦だが、勝ち試合は随分久しぶりだ。一言言ってやりたくなる。

「僕の勝ちだな」

「君、今日はやけに強いね」

丸い目をして意外そうに呟かれた言葉に首を振る。

違う。逆だろう。今日の界塚伊奈帆はやけに弱い。

何となく気後れして、ちらりと彼の顔を盗み見る。表情は変わらないが、普段よりもゆっくりと、いや、丁寧に駒をケースに仕舞っている。ふと、自分の手にした駒を指の腹でなぞってみた。すっかり手に馴染んだこのピース。模様や形、すり減って滑らかになった縁や、一目見ても分らないほど小さな傷に気付く。

「手紙を書くよ」

伊奈帆の言葉にはっとする。今度は顔を見ることができた。無表情に近いが、目の色が物言いたげに揺れた。

「藪から棒に、どうした」

駒を片付ける彼の手が止まる。金の一本線の入った袖口。爪の短い、軍人の手だった。テーブルの上で、手が組まれる。

あの手に触れたこともないな。僕は。

「今度来るのは、当分先になりそうだから」

こういう時に微笑むことができるくらいには、生きる真似が上手になった。スレインはそう自分を振り返った。

「大丈夫だ。お前が来なくても、勝手に死んだりしないから」

「そうしてくれると、助かる」

それぞれ駒をケースにびったりと入れて、脇に寄せる。もう面会は終わりだ。これまでずっと、そうしてきた。そういう決まりだ。しかし伊奈帆は、まだ立ち上がらない。唇が開いた。

「手紙を書くから」

「ああ」

「君も書いてよ」

音が消えた。

こうして見つめ合うことは、これまでもあったかもしれない。でも、こんな気持ちでこいつを見るのは初めてだ。

言いたいことはあるのに、言葉にならない。

「…届くのか？」

「紙なら届くさ」

伊奈帆が椅子を引いて立ち上がった。見上げた顔は穏やかに微笑んでいる。

「じゃあ。元気だね。寂しがって、泣いたりするんじゃないよ」

「誰がだ」

伊奈帆が机と椅子の隙間からずりと抜け出した。このままでは、あっさり行ってしまう。そして。

…そして。

「おい」

こんな呼び方しかできないのが情けない。それでも伊奈帆は振り向いた。

「何？」

いつもの口調。いつもの顔。しかし肩が少し強張っているよう。そうか。手だ。手を握っている。きっと、あの拳は固いだろう。

目を閉じる。

息を吸う。

息を吐く。

目を開く。

さあ、言うぞ。

「名前を呼んでほしい」

伊奈帆は隻眼をしばし見開き、重々しく頷いた。体を正面向けて、目を真っ直ぐ射抜き、口の動きはいつもより大きく。スレインには、彼の動き一つ一つがスローモーションのように鮮明に視認出来た。

そして耳に届く声。

この声を初めて聞いたのは空の上だ。

低くなった。

重くなった。

柔らかくなった。

大人になった。

いつからだろう。

いつの間にか、この声に慣れた。

「スレイン」

それが僕の名前。

これが伊奈帆の声。

スレインは笑おうとした。しかし今は、顔の筋肉を動かすことがとても難しい。全く、表情一つ作るのも下手になった。それはこいつのせいだろう。

伝わるだろうか。

嬉しいと。

待っていると。

君が僕の名前を呼ぶことが、いつもこの心臓に命を吹き込んだのだと。

死者の名だ。

亡霊の名だ。

失われた名前だ。

他にだれ一人、この名前を呼ぶ人間はいないんだから。

「伊奈帆。またな」

伊奈帆は嬉しそうに顔を綻ばせた。

「うん。また会おう」

面会室の扉が、余韻を残して閉じる。スレインは立ち上がる。テーブルの上、伊奈帆の手が置かれていた場所に自身の手を重ねた。

お元氣ですか。

君と最後に会ってから、もう半年か。手紙を出すのが遅くなってごめん。色々あってね。こうして鉛筆を持つと、何から書けばいいのか分からないな。

この場所では、青い月が出ます。綺麗だから、いつか君に見せたいと思う。
今頃、君はどうしてるかな。

忘れないように書き留めておこう。チェスの戦績は二百六戦、僕が百二十対八十六で優勢だ。でもこの間は君が勝ったから、次の対戦はリベンジになるな。腕が鳴るよ。
それじゃあまた。お元氣で。

オレンジ色

20201229

お元気ですか。

君の所は、もう夏も終わつたろうか。今年の夏はどうだったろう。君は夏が苦手だと言っていたから、きつと今頃ほっとしているんじゃないかな。

僕のいるところは、あまり季節というものがないみたいだ。まあ、当たり前か。寒くないのはいいけれど、どうも味気ない。冬は苦手だったけれど、雪も悪くない、と最近考えが変わりました。

暇なときは、君と打ったチェスの棋譜を思い出しています。今まで内緒にしていたけれど、君の分かりやすい癖のおかげでチェックがとれたことは一回や二回ではありません。その癖に気づいたら、次の対戦はいい勝負ができるんじゃないかな。

じゃあ、また。ご飯はちゃんと食べてください。

オレンジ色

2021.9.15

お元気ですか。

前の手紙から、随分間が空いてしまった。もしかして、もう死んだと思っていたんじゃないか。ちゃんと生きてるから、心配しないでください。

日付を確認して気づいたけれど、そろそろ桜の季節だ。君のいる場所では見えないかな。日本では、春になると桜の花が辺り一面に咲きます。ほんの数日ですが、ピンク色の花が雨のように舞い落ちる様子はとても綺麗です、今年は一緒に見られそうにないけれど、いつか一緒に見に行こう。家の近くの河川敷がいいな。お弁当持って、花見でもしよう。

ではまた。お元気で。

オレンジ色

2025.3.16

お元気ですか。

この手紙が届くころには過ぎていくけれど、今日は僕の誕生日なんだ。おめでとう、って言うてくれると嬉しい。

学生の頃は、友だちにお菓子やジュースでお祝いしてもらいました。もっと小さい頃は、姉が買ってきてくれたスーパースターのケーキに小さい蝋燭をさして、二人で食べました。おいしかったな。ユキの歌うハッピーバースデーが懐かしいです。生まれたことをお祝いされるのはとても嬉しいことです。君ともそういうことをしたかったのだけれど、まだできていないな。誕生日を知っていたのに、勇気が出なくて言い出せませんでした。いつかの一月十一日に、手作りのケーキとクラッカー、バースデーソングを贈りたい。ケーキはイチゴがいいかな。歌は下手だと思ふけれど、初めてだから大目に見てほしい。

こんなに長い間、この場所にいるとは思わなかったよ。もっと早く、君に会えると思っていたのだけれど。

それじゃあまた。過ぎてしまったけれど、二十八歳の誕生日おめでとう。

Happy Biethday,■■■■■. bat.

オレンジ色

2027.2.7

お元氣ですか。

六月といえば、君が初めてチェスの駒を動かした日のことが思い出されます。よくあれで会話が成立したな、と今では思います。僕も大概だけれど、君も相当だからね。

君が黒のナイトを♞に置いた時、僕は珍しく後悔をしました。あまりこれまでの人生で、後悔なんてしたことはないのだけれど。

あの時、君の話をちゃんと聞いておけばよかったなあ、なんて思っていました。初めて会った種子島。先に撃ったのは君だけれど、海に落とすことはなかったな。

僕が白のビショップを♝に置いた意味は伝わっているだろうか。君は頭がいいけれど、自分のこととなると時々鈍感だから。余計かもしれないけれど一応書いておく。

僕は、君といることをあの時に決めました。

昔のことを書くのは照れくさいな。もう十年以上も前のことなんだね。年を取るはずだ。それじゃあ、また。会った時に、チェスをしよう。ガラスの駒が懐かしいよ。

オレンジ色

2030.6.10

元気にしてるかな。

ご飯は食べているかな。夜は眠れている？僕は最近、あまりよく眠れない。嫌なことが多くてね。

早く帰って、お風呂に入りたい。自分の部屋でゆっくりしたいし、卵焼きが食べたい。特売で混み合うスーパーも懐かしい。それに、君とチェスもしたい。この間は君が勝ったから、今度は負けないよ。

ああ、ここは雨が多い。でも、雨に色がついているからあまり濡れたくないんだ。前はよく雨に濡れて行ったけれど、君と話がしたかっただけなんだ。こんなことまで書いて、ちょっと恥ずかしいな。日本の雨が懐かしい。

君と戦ったことがあったよね。何度も。あのサテライトベルトでの風景が、よく思い出されます。戦争なんて下らないけれど、君と戦った時はそんなことも忘れた。

今だから言うけれど、あの白い機体を僕はウミネコと呼んでいたんだ。それから僕には、君が白い鳥のように見えていた。知らないかな。言ったことがないから、知らないか。

これはもしもの話だけれど。

もう会うことが無くなっても、君が氣に病むことはない。僕のことは、時々思い出してくれると嬉しい。

もしも姉のユキに会うことがあれば、墓は作らなくていいと伝えてくれないか。いつだつて、僕は死ぬつもりはないんだから。たとえ会えなくても、どこかでしぶとく生き延びている。この僕はね。

最後に。名前が書けないのが辛いが。

コウモリ。

僕がいなくてもちゃんとご飯を食べろよ。夜は眠れなくてもいいから目を閉じろ。看守に迷惑をかけるな。あと、本を読め。差し入れた本、まだ読んでないのがあるだろう。

またチェスがしたいな。今度は僕が勝つから、覚悟しておくように。僕が勝ったら、一つお願いを聞いてくれないか。

それじゃあ、また。この手紙が届くといいけれど。

追伸

ここは雨はひどいが、虹はきれいだ。いつか君に見せたい。

オレンジ色

2031.1.2

お元気ですか？

こんな手紙を書くのは初めてで、何から始めたらいいのかわかりません。お元気ですか、なんて、馬鹿らしいと思わないでくださいね。

あなたに会うことがなくなり、何度目の夏でしょう。僕は相変わらず、あの場所で息をしています。一応、生きてはいるようです。しかし最近は、目がよく見えなくなってきました。文字を読むとき目を擦っては、あなたに目を擦るな、と小言を言ったことを思い返します。僕はあなたの小言をうるさく思っていたましたが、あなたもそうだったのかもしれない。それ以上目が悪くならないように、と心配だったのです。許してくださいね。

雨が少なくなりました。そのせいか。あなたと過ごした日々を夢のように感じるがあります。記憶の中のあなたはよく、雨の匂いをさせていましたから。

僕はもう、手紙を書くことはないでしょう。この一度きりです。そんな時間ありませんね。あなたに届くといいのですが。

最後に。界塚伊奈帆。あなたに命を救われたこと、今では
そうあるべきだったのだと感じます。そうでなければ、少な
くとも遺言書を書くことはできませんでしたから。

これは遺言です。どうか、君に届きますように。

君と過ごしたあの日々は、僕がアセイラム姫と過ごした
日々、そしておぼろげな記憶の中の父母と過ごした日々のよ
うに、思い返すと幸せな気持ちになります。

美しい思い出です。

P.S.

今君はどこにいるのかな。雲の向こうなら、紙飛行機にし
た方が届くかもしれませんね。

From bat.

2020.6.5

「…何だ？」

スレインが本のページを捲ると、何かが床に落ちた。拾い上げるとそれは、真新しい、白い封筒だ。

「手紙？」

伊奈帆がつい一週間前に差し入れた本だ。差出人の名前はないが、表面には「コウモリへ」と書かれていた。そんな風に人を呼ぶのは伊奈帆以外にはいないだろう。これは自分に宛てた手紙だと確信して、スレインは封を切った。文面を読む前に、慌てて先ほどの本を捲る。挟んであったページはどこだったか。もしかして、何か意味があったのかもしれない。あった。百二十一ページ。封筒を葉代わりにして、本を閉じる。背表紙のタイトルが見えた。

—RILKES GEDICHTE—

あの朴念仁が詩集なんて珍しい、と思ったのだ。だから、ふと手が伸びた。

直接言えないことだろうか。

漢字とひらがな、カタカナの混じった日本語は難読だ。スレインはざっと目を通し、しばらく逡巡して積み上がった本の下から辞書を引っこ抜いた。

スレインへ

君がこれを読んでいるのはいつだろう。できれば、僕が目の前にいない時がいいな。面と向かって見つかる、ちょっと恥ずかしい。挟んであるページも、会った時には触れないでくれるとありがたい。

戦争が起こる。それにいくことになった。場所は言えない。でも、君がよく知っているところだ。

地球も火星も、アルドノアの影響で変わりつつある。人がたくさん死んで、生態系は見たこともない姿へと変貌していくだろう。それが何百年も先のことなのか、何十年後か、数年後か、明日のことなのか、僕にはわからない。

勝手な願いだが、君にはそこにいてほしい。考えつく中で、そこが一番安全だからだ。職員に迷惑をかけるなよ。

もしかしたら、もう会えないかもしれない。でも、心配しないでほしい。君のことは忘れない。というか、死んでも忘れられそうもないし。それに、僕は死なない。君が生きているうちは、宇宙のどこかで次のチェスのことでも考えていると思っていてくれないか。たまたま、会

いに行くタイミングがないだけだと。

もし彼女に会えたら、君の話をするよ。元気で生きています、っていうつもりだから、嘘にならないように元気でいろ。

手紙を書きたいが、届くかどうかはわからない。もし届いたら、読んで捨ててくれ。多分、恥ずかしいことが書いてあると思うから。後でまとめて見せるなんてことをしたら、卵焼きを山ほど口に詰め込んでやる。

次のチェスは、どちらが勝つだろう。僕が勝ったら、何かお願いしようかな。何がいいだろう。次に勝つ時まで、考えておくよ。君も、この手紙を六月六日までに読むことがあったら、考えておいてくれ。多分僕が勝つだろうけど、君が勝ったら一つ言うことを聞くよ。

最後に、照れくさいけれど言っておきたい。

これはラブレターだから。いつか、返事を聞かせてほしい。

界塚伊奈帆より

2020.5.28

あとがき

この本をお手に取っていただきありがとうございます。

再録本第二段です。

この本はアルドノア・ゼロで一番最初に書いた話が収録されていて、編集作業は難航を極めました。昔書いた話を読み返すというのは解釈違いもあり、自分との戦いですね。ちょっと恥ずかしいです。しかし二〇一六年八月の投稿ラッシュの情熱は我ながらあっぱれといった感じですよ。アルドノアの夏。

「B a s h a」(2016-08-22)

◇イメージソング

「月」People in the box ェン

「読むひと」(2016-08-20)

「飛ぶ鳥を待つ」(2016-10-09)

「Te necesito」(2016-10-19)

◇イメージソング

「Ghost of a beautiful view」 ART-SCHOOL さん

「Scent of rain」 (2016-09-20)

もしもスレインが伊奈帆以外の手で脱獄するならどうなるだろう。スレインが伊奈帆の元を去るのは、伊奈帆が記憶を失うくらいしかないんじゃないか。と思いました。筆力がなくて全く入れられませんでした。伊奈帆が来ない間に火星の残党兵が密かにスレインにコンタクトを取り、脱獄の計画を進めていました。施設にスパイもいて、外出の時にノーマークだったのは手引きがあったからです。雨の中、自分がいない方が伊奈帆は幸せになるだろうと決めつけてスレインは火星側のゲリラ軍に加わります。ハークライトもいます。彼が捕らえられている、という情報もあり、スレインはいなくなりました。

◇イメージソング

「YOU」 ART-SCHOOL さん

「スレイン・トロイヤードのことを教えてくださーい」 (2017-08-15)

「PROMISED LAND」 (2016-08-13)

「IN THE BLUE」(2016-08-12)

「PERFECT DAYS」(2016-08-15)

「INSIDE OF YOU」(2016-08-17)

今見ると顔から火が出る拙作のオンパレードですが、基本的に最終話後の二人のイメージはずっとこんな感じです。二人で世界の隅っこでこっそり生きている。移動はヘリ。そう。移動はヘリです。ヘリコプターって大好きで。翼がないのに飛ぶ、というところが好きなのです。二人乗りの狭い座席もたまらないし、レトロな計器類も最高です。

蛇足で、「PERFECT DAYS」「INSIDE OF YOU」のモブ店主は女性でも男性でもお好みで想像していただけたらいいなあと思うのですが、私の頭の中でしゃべっていたのは三十七歳の黒髪短髪長身細身文系眼鏡(男性)です。

◇イメージソング

「翻訳機」People in the box ェ

「罪と罰と慈愛と、多分我儘」(2017-03-15)

「世界の果てで溢れるくらいのキスを」(2017-06-24)

モブが多いこの本の中でも相当出しゃばるこのモブは、茶髪ストレートヒョロ長理系イケメン(好きな食べ物は焼肉)です。この後無事保護されて以後はマグバレッズ艦長の元で働きます。

この二つはたとえ伊奈スレがカップリング未満だったとしても、界塚伊奈帆という男は必ずスレインを地の果てまでも探しにいく、という私の解釈宣言のようなものです。

◇イメージソング

「劔」天野月子さん

「Ta voix me manque」(2016-08-24)

◇イメージソング

「声」LOST IN TIME ェル

「往復書簡」(書き下ろし)

二〇一八年の八月にツイッターに掲載したショートショートを仕上げました。往復書簡と言いながら、伊奈帆が火星から出した手紙はスレインに一つも届いていないので(伊奈帆もそう

だろうなと分かっているけど出す）最後二通だけの一往復書簡です。スレインは伊奈帆に手紙が届かないのを知っていて（出したところで軍に処分される、悪くすれば何かの取引材料にされる）、書かなかったという設定があります。一通だけの手紙を何度も読み返して、返事を考えて過ごしていたのかな。極秘施設はシェルター完備（というマイ設定）なので、スレインは少数の職員の皆さんと生き延びたんですね。何十年も経って紙飛行機を飛ばすために外に出ると、一面の青空と動物たち。建物は緑に覆われた人のいない大地が広がっていると。白い紙飛行機が空を切って飛ぶ姿はもう戻らない日々で……というラストシーンです。人類滅亡エンドで、地球にさよならする最後の人類がスレインです。

◇イメージソング

「あなたは生きてゐる」LOST IN TIME ちん
四方山話にお付き合いただきありがとうございます。次の本でも、お会いできますように。

参考・引用文献

リチャード・バック著

五木寛之訳

発行年 昭和五十二年五月三十日

発行 新潮社

「かもめのジョナサン」

井伏鱒二著

発行年 昭和二十三年一月十五日

発行 新潮社

「山椒魚」

高村幸太郎著

発行年 昭和三十一年七月十五日発行

発行 新潮社

「智恵子抄」

G・ガルシア・マルクス著

木村榮一訳

発行 二〇〇六年十月三十日

発行 新潮社

「コレラの時代の愛」

訳者 生野幸吉

発行 一九六七年七月二十日

発行所 白鳳社

「リルケ詩集 青春の詩集／外国篇」

果ての岬で 空に笑う

発行 Scramble/鳴海

発行日 2018.11.18/ZEROの方舟 Osaka03

印刷所 (株)しまや出版様

Mail jineg720@yahoo.co.jp

Twitter @marumiblue

PixivID narumi07

本作は制作会社、関係者、及び関係団体とは一切関係ありません。

無断転載、ネットオークションへの出品などはご遠慮ください。